

やはり俺が魔戒騎士なのは間違っている。

アスハラ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

八幡を銀牙騎士ゼロにしてみました。気に入らないと思いますがなるべくご了承下さい。

俺ガイル×牙狼（GARON）シリーズとのコラボです。今まで出たホラーや魔戒騎士出してみたいと思います。

目次

戦友	遊園地	姉弟	迷子	魚	弱い	犬	娘？	番犬	出会	討伐	依頼
122	108	98	86	68	52	45	37	29	21	7	1

銃	転校	制服	送り	絵	暗黒	西	呼	朝食	過去	義妹	銀の馬	援軍
345	330	293	271	249	240	227	208	198	184	171	143	131

リユメ	508
食事	498
携帯	481
パソコン	461
情報	442
誘拐	430
浸入	418
ルーク	408
指輪	395
銀V S黒	374
銀と漆黒	361

依頼

《とある屋敷／???部屋》

ある屋敷にある暗い部屋に男が目を閉じながら何かを待っていた。

ブオン!

???

「・・・。」

ブオン!

???

「ハア!」

ガキイ!

暗闇の中からデカイ斧が男に当たりそうになったが二本の小太刀で受け止めた。

ブオン!

???

「ウオオオオオオ!」

ガキガキイン!

ブオ、ブオオオオオン!

???

「ハアアアアア!」

ガガキイイイイン!

前と左右に斧が来たが受け止めた。

ガチャ!

女

「はあ八幡君訓練するのはいいけど牙の鋼直すのに苦労するのよ?」

暗闇の部屋から髪の毛の長い黒髪の女性が来た。

八幡

「すいません凜さん。でも、加減したら怪我してしまいますよ。」

凜

「まあ、そりゃそうだけどね。」

八幡

「それで何か用があつたんじゃ?」

凜

「ああ、//東の//番犬所//から指令よ。」

凜は、赤い封筒を八幡に渡した。

八幡

「指令？まだ東に移ったばかりなのに指令かよ。」

凜

「まあまあ、東に移つてのデビュー戦だと思いなさい。」

八幡

「分かりましたよ。」

カシヤ！

ボオ！

八幡は、赤い封筒を変つたライターを使い燃やし謎の文字が浮かび上がった。

八幡

『人の願いから生まれしホラーを討伐せよ。魔獣の名はライラ』か。」

凜

「願いね。確かこの街には“祈りの鐘”があつたわね。」

八幡

「祈りの鐘ね。人は願わなきやダメなんですかね？」

凜

「それはその人次第よ八幡君。八幡君は願うんだつたら何を願うの？」

八幡

「願いませんよ。俺は、願わなきやダメな男じゃないですからね。」

凜

「そうね。〃シルヴァ〃を忘れずにね。」

八幡

「〃家族〃忘れるわけないですよ。」

凜

「そうね……。」

八幡

「凜さん？どうしたんですか？」

凜

「い、いいえ、何でもないわ。さあ、さっさと着替える！」

八幡

「は、はい。」

八幡と凜は、広間に向かった。

《屋敷／広間》

ガチャ！

???

『あら八幡お仕事？もうちよつと休みたかったわね。』

首飾りのアクセサリーが八幡に声を掛けた。

八幡

「そう言わない東に移つてのデビュー戦だと思えばいいんだからなシルヴァ。」

シルヴァ

『凜に言われたわね？』

八幡

「はい、そうです。」

シルヴァ

『フフ、まあ、この東の地形は大体把握したわよ。』

八幡

「御苦労様シルヴァ。」

凜

「はい、『魔法衣』を着て討伐に行つて来なさい。」

八幡

「はい。」

パサツ!

カチャ!

凜は、黒い上着を八幡に着せ。シルヴァを首に掛けた。

八幡

「じゃあ、行つて来ます。」

凜

「いつてらっしやい。」

ガチャ!

ボタン!

八幡は、屋敷から出た。

凜

「……あの子に母親なんて名乗れないわよ。知らなかったとはいえあの子を捨てた事にかわりないもの。」

討伐

《広場／祈りの鐘》

夜中の広場祈りの鐘に亜麻色の髪の色の子が鐘を鳴らす。

カカーン！

女の子

「もう一度あの人に会えますように……。」

女？

「その願い叶えて上げる。」

女の子

「え？」

フツ

女の子

「あ、あれ？」

女？が女の子に声を掛けられたと振り返った瞬間夜だったのに昼間になっていた。

男？

「よお、久しぶりだないろは。」

いろは

「え？涼邑さん？」

いろはの前に涼邑という男が現れた。

涼邑？

「ああ、いろはお前は俺の事をどう思っている？」

いろは

「え？えくと？あれ？あの貴方は涼邑

さんですか？」

涼邑？

「何でそんな事言うんだいろは？」

いろは

「だって私の知っている涼邑さんは私の事名前呼びませんよ！貴方は涼邑さんじゃありません貴方は誰ですか!？」

涼邑？

「……チツ！バレたか。」

ボオ！

いろは

「やっぱり偽物でした！」

女？

「お前何故分かった？まあいいお前は私のエサだ。」

いろは

「ヒ!？」

ビヨーン!

女の体が伸びいろはに襲い掛かろうとしたが。

ビシユ!

女？

「う!」

ドン!

女？

「何だ？これは『破邪の剣』？まさか！」

男

「そのまさかだぜ人の願いから生まれしホラーさん。」

いろは

「あー！涼邑さん！」

涼邑

「ん？誰だお前何で俺の名前知っている？」

いろは

「え!?私はいろはですよ！一色 いろは！忘れないで下さいよ!?!」

涼邑

「一色？覚えてない悪いが話しは後だ今はこの女とお付き合いをするんでね。」

カチャ！

女？

「小太刀の二刀流？まさか魔戒騎士？」

涼邑

「正解。シルヴァこいつが、ライラか？」

シルヴァ

『ええ、そうよ魔獣ライラ人間の心を覗き見る悪趣味なホラーよ。』

涼邑

「へくま、東に来ての初デビューー殺りますかね。」

ライラ

「私を嘗めてもらつては困るな！」

ジャキ！

ガキイ！

涼邑

「別に嘗めちやいないよ。フン！」

ガキイ！

ライラは剣を出し涼邑と斬り合いを始めた。

いろは

「涼邑さん！」

ライラ

「フ、お前昔父と愛した女を守れなかつたようだな。」

涼邑

「!?」

シルヴァ

『コイツ八幡の心を覗いたわね！』

ライラ

「お前の目の前であの女を殺してお前の心をズタズタにしてやるぞ。」

八幡

「させるかよー！」

ギイン！

ライラ

「フツッ！」

ビシユ！ビシユ！

八幡

「ハア！」

ガキ，ガキイ！

ライラはトランプを投げいろはに当てようとしたが素早くいろはの場所まで移動しトランプは八幡に弾かれた。

ライラ

「チツッ！」

八幡

「俺を舐めんなー！」

ザシユ！

ライラ

「グツ！」

八幡

「さて、ライラこのまま俺に斬られくないかな？」

ライラ

「舐めるな魔戒騎士！」

カカーン！

パアアアアア！

いろは

「ええ！何処ですか此処!？」

ライラが鐘を鳴らした途端に場所が不明な場所に変わった。

ライラ

『キシヤアアア！』

いろは

「キヤアアアア!!」

八幡

「頭は熊で下はムカデかシルヴァあれがライラの本来の姿か？」

シルヴァ

『ええ、あれがライラ本来の姿よ。』

八幡

「じゃあ此方も！」

キュカン！

カアアアア！

ガシヤガチャーン！

八幡は2本の魔戒剣で空に円を描き円の中から白銀の鎧が現れ八幡は白銀の鎧を着した。

いろは

「銀の狼？」

八幡？

「銀牙騎士ゼロ！魔獣ライラ人の祈りを食い物にする貴様の陰我俺が断ち斬る！」

ライラ

『シャアアアアア！』

銀牙騎士ゼロ

「ハアアアアア！」

ブン！ブン！ブン！

ライラ

『シャアアアアア！』

銀牙騎士ゼロ

「チッ！」

ブブブブン！

ゼロは絶狼剣でライラを斬ろうとしたが避けられライラもゼロに攻撃したがゼロは避けた。

シルヴァ

『八幡！奴の本体が分かったわ！』

銀牙騎士ゼロ

「何処だ!？」

シルヴァ

『奴の首にある鐘が本体よ！』

銀牙騎士ゼロ

「……!?!アレか！」

シルヴァ

『八幡かなり距離があるわどうするの？』

銀牙騎士ゼロ

「どうするって二刀流を使う……」

ライラ

『シャアアアアア！』

銀牙騎士ゼロ

「そこだ！二刀流！陰陽撥止（おんみょうはつし）！」

ガキイイイイ！

バキイイイイ！

ライラ

『な、何イ！グアアアアアア！』

ドカアアアアアア！

バアアアアアア！

ゼロは、絶狼剣の切っ先で突いて押し飛ばしライラ本体の鐘が突き刺され鐘が壊され

ライラは爆発した。

八幡

「フウ！疲れた。」

シルヴァ

『お見事八幡。』

いろは

「終わったんですか？」

八幡

「終わったよじゃあ気よ付けて帰れよ？」

いろは

「はいつて待つてくださいよ!？」

八幡

「何だ？」

いろは

「アレ何ですか!？」

八幡

「お前が知る必要はないじゃあな。」

いろは

「だから待つてくださいってば！」

ギユ!

八幡

「裾を掴むな!？」

いろは

「家に送る気持ちは無いんですか!？」

八幡

「ない。じゃあな。」

いろは

「腰抜けちゃったんですこんなかわいい女の子置いていくんですか!？」

八幡

「かわいって自分で言うなよな……しょうがねえな文句言うなよ?」

いろは

「え? きゃ!?! な、何でお姫様抱っこ何ですか!？」 ジタバタ!

八幡

「暴れるなだから文句言うなって言っただよ。そう言えば何で俺の名前知ってんだよ

?」

いろは

「え? えくとナンパされて無理矢理連れていかれそうになったのを助けてくれましたから……覚えてませんか?」

八幡

「覚えてない。」シレッツ

いろは

「そ、そうですか……。ズーン！」

八幡は、インターホンを鳴らした後いろはを置いて八幡は去っていった。

《早朝》

八幡

「はく東に移ってそうそうホラー退治とはね〜」

シルヴァ

『そうねでも短い間とわいえ尊士（そんし）の教えが良かったわね。』

八幡

「そうだな義父さんもいい友人がいたもんだな。」

シルヴァ

『そうね今日はもう帰りましょ番犬所の挨拶は昼からでもしましょ？』

八幡

「そうだな。」

???

「サブレー!？」

八幡

「何だ？」

シルヴァ

『サブレって犬？変な名前ね。』

八幡

「あ、犬が道路に！ツチ！」

ダツ！

シルヴァ

『チヨツ!?!八幡!?!』

キキイ！

ドン！

八幡は車に惹かれ病院に搬送されてしまった。

出會

前回車に惹かれた八幡は……。

《病院／寢室》

八幡

「クカク」zzz

シルヴァ

『まったくよく寝るわね。』

ガララ!

凜

「八君いつまで寝てるの?」

八幡

「フガ!? あ、凜さんおはようございます。」

凜

「はい、おはよう八君。」

シルヴァ

『早いわね凜?』

凜

「まあ、八君が車に惹かれた何て聞いた時は流石に肝を冷やしたわよ。」

シルヴァ

『まあ、たかが八幡が車に惹かれたぐらいで怪我何てしないわよ。』

凜

「そうねまあ、八君を重傷に追い込んだのは“カルマ”と“リング”ぐらいよね。」

シルヴァ

『あの時は本当に凜心配したわよね。』

八幡

「その節はご迷惑お掛けしました。」

凜

「謝らなくていいわよ。」

八幡

「それでももう帰っていいんですか?」

凜

「いいわよ先生から帰っていいって言われたわ。」

八幡

「医者が驚いていませんでしたか？」

凜

「驚いてたわよ車に惹かれたれたのに怪我しないで気を失っただけなんだからね。」

八幡

「ハハ、まあ・・・？」

ガラガラ！

???

「わあ!？」

八幡が人の気配を感じ扉を開けたらウェーブのかかった茶髪の女性が扉の前にいた。

八幡

「お前誰だ？」

由比ヶ浜

「あ、えくと私、由比ヶ浜結衣って言います。」

八幡

「ふくんそれでその由比ヶ浜が何の用だ？」

由比ヶ浜

「えくとその……。」

八幡

「まあ、落ち着いて話せ。」

由比ヶ浜

「は、はい。」

シルヴァ

『（八幡この娘あの犬の飼い主じゃないかしら？）』

八幡

「（犬？）」

???

「サブレー!？」

八幡

「ひよつとしてサブレーとやらの飼い主か？」

由比ヶ浜

「え、あ、はい……あのあの時は本当にごめんなさい。」

八幡

「あく別に気にするな怪我何てしてないし一日気を失っただけだし。」

由比ヶ浜

「え、嘘!？」

八幡

「そこまで驚く事か？」

凜

「普通は驚くわよね。」

八幡

「まあそれはそうとサブレとやらは大丈夫なのか？」

由比ヶ浜

「は、はい。」

八幡

「あ、そうだ悪いがこの街の甘い店があるとこ知ってるか？」

由比ヶ浜

「し、知ってます。」

八幡

「じゃあ案内してくれないか？まだこの街来たばかりだからな出来ればサブレも一緒でな。」

由比ヶ浜

「は、はい！」

八幡

「後、敬語なしで頼めないか同い年だしな？」

由比ヶ浜

「う、うん！」

八幡

「ちよつと俺は用事があるから昼でいいか？」

由比ヶ浜

「うんいいよえくと？」

八幡

「？どうした？」

凜

「八君名前言つてないわよ？」

八幡

「あ、忘れてた。俺の名前は涼邑 零だ。」

凜

「私は凜この子の保護者代理よ。」

由比ヶ浜

「よ、よろしく。」

八幡

「じゃあ集まり場所は“広場”でいいか？」

由比ヶ浜

「うんいいよ涼邑君。」

八幡

「じゃあまた後で。」

由比ヶ浜

「うん。」

八幡と凜は1度由比ヶ浜と別れた。

凜

「さて、八君この東の番犬所に挨拶に行くわよ。」

八幡

「はい。」

八幡と凜は東の番犬所に向かった。

番犬

《通路》

〈昼前〉

八幡

「じゃあ此処で待つて下さい凜さん」

凜

「分かってるわなるべく粗相がないように気よ付けなさいね？」

八幡

「はい・・・シルヴァ」

シルヴァ

『大丈夫すぐに開けるわ』

ズズズ！

八幡はシルヴァを壁に掲げ壁が開いた。

八幡

「じゃあいつてきます」

凜

「いってらっしゃい」

ズズン!

凜

「ふう」

???

「お母さん？」

凜

「? 何であんたが此処にいるの . . . 小町？」

《??》

八幡は変わった場所にいた。

男

「.」

執事服を着ていた男が現れ口の開いている狼の石像に手を向けた

カシン!

八幡

「……。」

カシユ!

ブハアアアア!

八幡は小太刀二本の魔戒剣を出し口の開いている狼の石像に二本同時にさして抜いた後小さな剣が現れた。

男

「……。」

八幡

「(この男かなり出来る)」

シルヴァ

『八幡来るわよ』

パアア!

三姉妹

『……』

八幡の前に3人の幼い少女が現れた。

八幡

「初めまして『西の管轄』から来た涼邑 零と言います」ペコッ
八幡は三姉妹に自己紹介をし頭を下げた。

少女1

「礼儀正しいわねではこちらも私は『ケイル』」

少女2

「『ベル』」

少女3人

「『ローズ』」

八幡の前に現れたのは番犬所の神官と呼ばれた少女達だった。

ケイル

「早速で悪いのだけれど『コダマ』」

コダマ

「……」

コダマと呼ばれた男は八幡に赤い封筒を渡した。

シルヴァ

『また指令昨日ライラを討伐したばかりなのに』

ベル

「文句ならこの管轄の『魔戒騎士』に言ってください」

八幡

「何故？」

ローズ

「リングは覚えているか？」

八幡

「リング……勿論覚えています」

シルヴァ

『八……零と魔戒法師が苦勞してようやく討伐出来たのよ』

八幡

「それでリングとこの東の管轄と何の関係があるんですか？」

ベル

「関係大有りなのです」

八幡

「？」

ケイル

「リングが西の管轄に行く前にこの東の管轄にいたのです」

八幡

「え？」

シルヴァ

『何ですって!?!』

ローズ

「リングがこの東の管轄にいるホラーに入れ知恵してしまい一人行動する筈が複数で行動する事になったのだ」

ベル

「しかも複数でホラーが行動するせいでかなりの魔戒騎士が亡くなりました」

ケイル

「だからリング、カルマを討伐した貴方を呼んだのです」

八幡

「あのくこれは俺の勘なんですけどもしかして此処の魔戒騎士リングの口車に乗っちゃったんじゃないあ……」

三神官達

『……』

シルヴァ

『凶星ね呆れたわね』

ローズ

「返す言葉もない」

ベル

「しかもよりにもよって口車に乗った魔戒騎士は——です」

八幡、シルヴァ

『『えっ!?!』』

八幡

「よ、要するに俺はそいつの尻拭いしろという事ですか？」

ケイル

「そうです」

八幡

「分かりました依頼受けましょう」

ローズ

「そう言ってくれると思っていた」

ベル

「では頼みましたよ？」

八幡

「はいお任せあれでは俺はこれで……」

八幡は三神官に挨拶をすませ番犬所を後にした。

《通路》

ズズズ!

バシツ!

八幡

「?」

番犬所から元の場所に戻った八幡は叩く音が聞こえた所を見たら凜が黒髪の女の子を叩いている姿を目撃した。

八幡、シルヴァ

「『どういう状況?』」

娘？

八幡

「じゃあ此処で待つてて下さい凜さん」

凜

「分かってるわなるべく粗相がないように気よ付けなさいね？」

八幡

「はい・・・シルヴァ」

シルヴァ

『大丈夫すぐに開けるわ』

ズズズ！

八幡はシルヴァを壁に掲げ壁が開いた。

八幡

「じゃあいつてきます」

凜

「いってらっしゃい」

ズズン!

凜

「ふう」

???

「お母さん?」

凜

「?何であんたが此処にいるの・・・小町?」

これは八幡が東の番犬所に挨拶に向かっていた最中の出来事である。

《通路／東の番犬所前》

凜の前に現れたのは髪の色は黒アホ毛と八重歯の女の子小町という娘が現れた。

小町

「お母さん何で此処に?」

凜

「アンタには関係ないわ」

小町

「関係あるよ!だって小町のお母さんだよ!」

凜

「一つ言っておくわ．．．」

小町

「？」

凜

「私はアンタの事娘とは思った事．．．一度も無いわ」

小町

「!?何でそんな事言うのもしかしてまだ生き別れになったお兄ちゃん探しているの！」

凜

「アンタには関係ないわきつさと『あの男』の元に帰りなさい．．．」

小町

「嫌!?!帰るんだったらお母さんと一緒だよ！」ガシッ!

小町は凜の手を握るが．．．。

凜

「離しなさい！」

ズズズ!

バシッ!

凜は小町の頬を叩いた。

八幡

「？」

八幡、シルヴァ

「『どういう状況？』」

八幡は、東の番犬所に挨拶が終わり凧の元に帰ってきた。

凧

「八君？」

八幡

「え〜と凧さん何やってるんですか？」

凧

「この子が私の事を母親と勘違いしちゃったのよ私まだ若いのにね〜」

小町

「お母さん……」

八幡

「お母さん？」

凧

「その子の言うお母さんって私に似ているから勘違いしているのよ」

八幡

「……成る、程」

シルヴァ

『まあ、理由は聞かないけどその子見習い魔戒法師ね？』

小町

「私は見習い魔戒法師の小町。あの貴方は？」

八幡

「俺は涼邑 零。魔戒騎士だ」

小町

「魔戒騎士？何でお母さんと魔戒騎士が一緒にいるの!？」

凜

「アンタには関係ないわ八君行きましょ？」 ガシッ！

八幡

「チ、チヨット凜さん引つ張らないで〜」

ズルルー！

凜は八幡の腕を無理矢理引つ張って小町と別れた。

小町

「お母さん何であんな事を言ったの？あの魔戒騎士のせい？あの魔戒騎士目が腐っている癖によくも私のお母さんを許せない！」

《町／広場》

ズルルー！

凜

「……」

八幡

「凜さん!？」

凜

「あ！ゴメンね八君痛かった？」

八幡

「いえ、大丈夫です。」

シルヴァ

『珍しいわね貴女が怒るなんてあの見習い魔戒法師が原因でしょ?』

凜

「まあ、ね」

八幡

「それより……」

犬

『ワンワン!』

三人

『ん?』

犬

『ワンワン!』

ポスツ!

八幡

「わ!」

八幡が言葉の途中犬の声が聞こえ犬は八幡の足下に飛び付いた。

犬

『へっへっへっ!』

八幡

「何だ〜お前迷子か〜?」 ナデナデ

犬

『く〜ん♪』フリフリ！

凜

「この子ダックスフンドね？」

八幡

「首輪があるし飼い主と別れちゃったのかな？」

女の子

「サブレ！もう勝手に何処かに．．．」

全員

『あ．．．』

八幡達はまさかの由比ヶ浜結衣と合流した。

犬

由比ヶ浜結衣と偶然再会した八幡達は……。

《町／スイーツ店外テラス》

サブレ

『く〜んく〜ん。(撫でて〜撫でて〜) スリスリ!

八幡

「お〜お〜撫でて欲しいのか?」

サブレ

『ワン!』

八幡

「分かった。」ナデナデ!

サブレ

『♪』

由比ヶ浜

「サブレがあんなに懐くなんて珍しいな〜。」

凜

「そうなの？」

由比ヶ浜

「あ、はい余り人に懐かないんですましてや初対面の人に対して……。」

八幡

「よしよし！」 ナデナデ！

サブレ

『ク〜ンク〜ン。』 フリフリ！

由比ヶ浜

「あんなに懐くなんて初めて見ました。」

凜

「フフツあの子何故か動物に懐かれるのよね。本人も何故懐かれるのか分からずじまいだけど。」

シルヴァ

『（凜機嫌が直ったわね。）』

ガチャーン！

八幡

「わ!？」

サブレ

『キャン!?!』

店員？

「お待たせしました!ご注文すべて持つてきました!」

サブレを撫でている途中に店員が八幡が注文したスイーツを乱暴に置いた。

凜

「ひ、酷い店員ね?」

サブレ

『クゥン……。』ビクビク

八幡

「大丈夫だぞサブレ。」ナデナデ!

店員?

「あのすいません私の存在忘れてませんか? 涼邑 零君。それとももう一つの名前で言いますか?」プルプル

八幡、凜

『え?』

店員？

「久しぶり……涼邑 零君、凜さん。」

八幡

「めぐりか？」

凜

「〃城廻めぐり〃ちゃん!？」

めぐり

「お久しぶりです凜さん。」

シルヴァ

『（これは思わぬ再会ね。）』

八幡

「久しぶりだなめぐり……何で此処に？」

めぐり

「私〃あの一件〃で画家になろうと思って留学金を集めてるの。」

八幡

「そうか、頑張れよ高校生。」

めぐり

「うん。あ、凜さんとこの娘が頼んだスイーツは先に零君のを全部届けた後にしますがよろしいですか?」

凜

「私はそれでいいわ由比ヶ浜ちゃんもそれでいいかしら?」

由比ヶ浜

「え、あ、はい。」

めぐり

「相変わらずの甘党だね零君」

八幡

「フツまあな。」

めぐり

「じゃあまた持って……。」

カラン

八幡

「ご馳走様めぐり凜さん達の持って来て〜」

由比ヶ浜

「はや!? テーブル全部に置かれたケーキ無くなって!？」

サブレ

『ク〜ン。』アングリ

めぐり

「あ、相変わらずの早食いね．．．此処のケーキ美味しかったの？」

八幡

「美味かっただから凜さん達の持って来て。」

めぐり

「分かったわ．．．。」

めぐりは店内に戻った。

由比ヶ浜

「え、えくとあの人と知り合いなの？」

八幡

「ん？まあな彼奴は城廻めぐり前の街で色々あったんだ．．．そう色々。」ズーン！

凜

「(めぐりちゃん元“アレ”だったからなく。)」

サブレ

『ク〜ンク〜ン。』タシタシ！

八幡

「ああ、スマンスマン。」ナデナデ!

サブレ

『ク〜ン』／／／／／／

凜

「平和ね．．．．。」

由比ヶ浜

「(いいなサブレ．．．．。)」

弱い

《通路》

〈夕方〉

八幡

「助かったぜ由比ヶ浜いいデザート店を紹介してくれて。」

由比ヶ浜

「ううん気にしないで。」

凜

「フツツでもまさかこの街にめぐりちゃんがいたのは驚いたわね。」

八幡

「そうですね。」

シルヴァ

『(八幡そろそろ。)』

八幡

「(分かっている。)」

由比ヶ浜

「どうしたの？」

八幡

「悪いな由比ヶ浜ちよつと用事を思い出した凜さんに家まで送ってもらいな。」

由比ヶ浜

「え、そんな凜さんに悪いよ。」

凜

「私は気にしないわ由比ヶ浜ちゃん最近この街夜になると行方不明者がでるでしょ？」

由比ヶ浜

「は、はい……。」

凜

「ここは八……零君の云うこと聞きなさい。」

由比ヶ浜

「はい。」

サブレ

『クゥン……。』

八幡

「サブレくまた会おうな。」ナデナデ！

凜

「零君行きなさい。」

八幡

「はいじゃあ由比ヶ浜縁あつたらまた会おうぜ。」

由比ヶ浜

「う、うんまた会おうね涼邑君。」

八幡

「ああじゃあな由比ヶ浜、サブレ。」

サブレ

『ワン！』

コツコツ！

八幡は由比ヶ浜達と別れた。

凜

「さ、由比ヶ浜ちゃん家まで送るわ。」

由比ヶ浜

「はい。サブレ……あれ？サブレ？」

凜

「どうしたの？」

由比ヶ浜

「サブレがないんです。」

凜

「え？まさか……。」

シルヴァ

『はあくやつと喋れるわ。』

八幡

「お疲れシル……？」

サブレ

『ワンワン。』

八幡

「あり!?サブレ付いてきちやったのか？」

サブレ

『く〜ん。』キラキラ↑送って欲しいなという目

八幡

「しようがないなまだ走れば由比ヶ浜に追い付けるかな？おいでサブレ。」コンコン↑キラキラで地味にダメージを受けているダメージは0. 1

サブレ

『ワン！』

八幡はサブレを抱いて由比ヶ浜達を探した。

〈夜〉

《広場》

何処かの広場でパーティーを終えた男女が歩いていた。

男1

「イヤ〜面白かったな。」

女1

「そうね〜」

男2

「またパーティーに誘ってくれよ？」

男3

「ああ分かったよ。」

女2

「あれ？あの二人は？」

男1

「どっかでイチャイチャしてんじゃないの？」

女3

「あり得るわね。」

《広場／階段》

男4

「なあ、俺と付き合う事にしたんだ？もしかして親父の財産目当てか？」

女4

「酷いそんなわけないじゃん。」

男4

「そっかありがとな。」

男女がキスしようとしたが……。

カサッ!

カップル

『ん?』

バアッ

カップル

『ウワッ! (キャ!)』

二人の前に赤人形と青人形パペットを持つピエロが現れた。

赤人形

『二人共お互いの事どれだけ知ってるんだろ?』

青人形

『恋人同士でも知らない事いっぱいあるよね?』

赤人形

『そうだこのピエロすごい力があるんだって。』

青人形

『本当? どんなどんな?』

赤人形

『人間の心の声本当の声聞きたくない？』

青人形

『聞きたい聞きたい！』

赤人形

『じゃあ、この赤い鼻に注目！』

カアツ！

カツプル？

『……』

女1

「ねえ、あれ見てよ。」

男1

「お、あの二人もしかして。」

女4

「ねえ、結婚して……。」

男4

「誰がお前みたいな女と結婚するかよ一回ヤッチ前まったらお終いだよ。」

女4

「ハハハハ！アハハハハ！私だってねあんたの親父がくたばっちまえば遺産貰ってサヨナラよ！」

パシン！

男2

「おいおい！」

女2

「何やってんのよ！」

男4

「フッフフ、ハハハハ！」

ゴツ！

ドカツ！

バキ！

男4

「ハハハハ！」

バキ！

男4

「アグツ！ウウツ！」

女4

「アハハハハ！」

ギユウウウウウ！

男女達

『おいおい！辞めろつて！』

仲が良かったカップルが喧嘩を仕出し止めようとしたが……。

キラ

男女達

『?』

赤人形

『注目！』

カアツ！

男1

「ハハハハ！アハハハハハ！知ってるぞお前俺の女に手えー出しやがつて！」

男2

「ハハハハ！こんな子豚ちゃんこつちから願い下げだよ！ハハハハ！」

男1

「ハハハハ！」

女2

「ハハハハ！あんたちよつと私の事そんな風に思ってたの!？」

女3

「ハハハハ！当然じゃない付き合っているのは私なんだからこの子豚ちゃん！」

女2、3

『ハハハハ！』

女2

「どつちが子豚よ！」

男女達

『アハハハハ！』

ピエロの赤い鼻を見た男女が喧嘩を仕出し誰も止められなくなりついには……。

男女達

『……』

赤人形

『死んだ?』

青人形

『あくあ死んじやったよ。』

赤人形

『アー。』

青人形

『アー。』

クルクル!

ジャキ!

ピエロは二本のジャグリングを取り出した。

ピエロ

「♪」

???

「待て!」

ピエロ

「?」

???

「ホラー貴様の思い通りにはさせない！」

髪の色は金髪白いコートを着ている男が現れた。

青人形

『何だコイツ？』

赤人形

『魔戒騎士？』

魔戒騎士

「そうだホラーを狩るのが俺の使命だ！」

ジャキ！

青人形

『ん？白い鞆もしかしてコイツ？』

赤人形

『俺達に騙された魔戒騎士だ！』

魔戒騎士

「クツ！舐めるな！」

ジャ！

魔戒騎士は剣を抜きピエロを斬ろうとしたが。

ビタア！

魔戒騎士

「何?！」

ピエロ

「♪」

止められた。

魔戒騎士

「パントマイムか！ハア！」

ビタア！

ピエロ

「♪」

魔戒騎士

「チイ！」

バキ！ドゴオ！

魔戒騎士

「グア！」

ピエロ

「♪」

青人形

『何だコイツ弱いな話にならないよ。』

赤人形

『人間（ゴハン）食べて撤収！』

魔戒騎士

「や、ヤメロ……。」

ジャ、ジャン！

ゴツクン！

ピエロは喧嘩をした男女の死体を丸い玉にしそれを魔戒騎士の目の前で食べた。

青人形

『じゃあな弱い魔戒騎士♪』

赤人形

『イヤ、黄金を剥がされた魔戒騎士♪』

魔戒騎士

「く、クソオオオオ！」

魔導輪

『フン、情けない奴だ・・・。』

魚

《通路》

場所は変わり八幡達は今……。

由比ヶ浜

「ゴ、ゴメンね涼邑君サブレが迷惑かけちゃって。」

八幡

「イヤ、気にする必要はないまだサブレ俺と遊びたかったようだしな。」

サブレ

『ワンワン！（その通り！）』

凜

「ゴメンね零君。」

八幡

「凜さんも気にしないで下さい。」

シルヴァ

『!?八幡ホラーの気配よ!?』

八幡

「何!？」

由比ヶ浜

「え、今の声は？」

八幡

「悪い由比ヶ浜、サブレ此処で待っててくれないか？」

由比ヶ浜

「え、あ、うん。」

八幡

「サブレいい子で待ってろよ？」

サブレ

『クーン』

ダツ!

由比ヶ浜

「早いもう見えなくなっちゃった。」

凜

「はい、此処で……あれ?サブレちゃん何処に行っちゃったの!？」

由比ヶ浜

「え？まさか……。」

???

「あら？貴女達？」

《廃墟屋敷前》

少女

「かなり遅くなっちゃったお母さん心配してるよね？」

ピチピチ！

少女

「？」

ピチピチ！

少女

「え？」

屋敷の廃墟前を通っていたら少女の前に大きな魚がいた。

少女

「つ、疲れているのかな？」ゴシゴシ！

少女

「あれ？いない？」

少女が少し目を離れたら大きな魚はいなくなっていた。

少女

「？」

男

「驚いた!？」

少女

「わあ!？」

男

「アハハハ、驚いてやんの。」

少女

「な、何なの？」

突然少女の真後ろに男が現れ少女をからかった。

男

「ねえ、お嬢ちゃんさつきまでこれ見てたでしょ？」

ピチピチ!

少女

「え?」

男が少女に見せたのは先程少女が見ていた大きな魚だった。

男

「あくんモグモグ。」ゴツクン!

男

「お嬢ちゃんもつと驚かせて上げようか?」

ゴパア!

少女

「キヤアアアアア!!」

男の顔が左右に増えた。

男?

「十分に驚いたねじゃあいたただきまゝす。」

少女

「ヒッ!だ、誰か助けて・・・。」

パチパチ!

男？

「？」

八幡

「イヤ、驚いた驚いた。まさか年端もいかん子供を……」

カシヤ！

ボオ！

ブワア！

八幡

「ホラーが襲うなんて驚いたな……。」

カシヤン！

八幡が拍手しながら現れライター型の「魔導火」の火を点け男の前に翳し男の目から黒い紋章が浮かび上がった。

男？

「キミ魔戒騎士だな？」

八幡

「そうだお前らを狩る魔戒騎士涼邑 零だ。そこのガキ此処から離れてな。」

少女

「だ、ダメ腰が抜けちゃった……。」

八幡

「チツ……。」

男？

「隙有り！」

バシツ！

男？

「な!？」

八幡

「ん？どうした逆に驚いているようだが？」

ギリギリ

男？

「チツ！」

八幡

「ハッ！」

ドゴオ！

男？

「カハア!? ウツ! ゲホツ!」

八幡

「何だ? 腹にキツイ一発当てただけでダウンか?」

男?

「クウ!?! 魔戒騎士めー!」

ドパア!

少女

「キャアアアアア!」

シルヴァ

『八幡そいつは、魔獣アズダブよ。まあ八幡の敵じゃないわ。』

八幡

「まあ、油断せずにやるか覚悟しろよ半魚野郎。」

キーン!

魔獣アズダブ

「二刀の魔戒剣? ま、まさか……。」

キュカン!

ガチャーン!

銀牙騎士ゼロ

「銀牙騎士ゼロ！魔獣アズダブ貴様の陰我俺が断ち斬る！」

魔獣アズダブ

「噂の銀牙騎士ー!?」

銀牙騎士ゼロ

「?まあいい来い！」

魔獣アズダブ

「ウオオオオオ！」

バツ！

アズダブは飛び上がった。

銀牙騎士ゼロ

「フン。」

ガキイ！

銀牙騎士ゼロ

「〃銀牙銀狼剣〃！ハア！」

ブウウウウン！

魔獣アズダブ

「馬鹿め何処を狙っている!？」

銀牙騎士ゼロ

「デリヤア！」

ドカア！

魔獣アズダブ

「グワア！」

ブウウウウン！

ザシユウン！

魔獣アズダブ

「ガハア!？」

バシイ！

銀牙騎士ゼロ

「ウオオオオ!!！」

ズバアアアア！

魔獣アズダブ

「ギヤアアアアア！な、何であの銀牙騎士がこの街に……。」

ドパアアアア！

銀牙騎士ゼロは二刀の絶狼剣を合体させアズダブを狙わず下に銀牙銀狼剣を投げ銀牙騎士ゼロは魔獣アズダブより飛び上がり魔獣アズダブを蹴り後ろに下がらせ銀牙騎士ゼロが投げた銀牙銀狼剣がアズダブの真ん中を斬り銀牙騎士ゼロは銀牙銀狼剣を掴みアズダブの上半身を斬り魔獣アズダブを倒した。

バアアアアン！

八幡

「はあ、疲れた。」

シルヴァ

『お疲れ八幡。』

八幡

「ああ、ガキ大丈夫か？」

少女

「は、はいつてガキじゃないよ!？」

八幡

「名前知らんからガキで十分だ。」

少女

「ううう鶴見 瑠美！ガキって言うな！」

八幡

「一応決めてるとこ悪いが腰抜かしてるから決まってるから決まってるぞ？」

鶴見 瑠美

「う、ウルサイ！」／／／／／

八幡

「ところでお前鶴見だっけ？鶴見 瑠花（つるみるか）さんの親戚か？」

鶴見 瑠美

「え？お母さんの事知ってるの？」

八幡

「瑠花さんの娘だったのか・・・仕方ない瑠花さんには世話になったし送るぞ？」

鶴見 瑠美

「う、うんありがとう。えっと？」

八幡

「俺は涼邑 零。涼邑って呼べ鶴見ちゃん。」

鶴見 瑠美

「ちゃんはいらない。」

八幡

「子供はちゃんで十分だ。背中乗んな送ってやる。」

鶴見 瑠美

「むう〜」

八幡

「乗るのか？乗らないのか？」

鶴見 瑠美

「乗る。」

八幡

「フツ、シルヴァ悪い凜さん呼んで……。」

シルヴァ

『分かったわ。』

サブレ

『ワンワン！』

八幡

「あ、サブレ追いかけて来たのか？」

サブレ

『ワン！』

八幡

「そうか。しょうがないな由比ヶ浜と凜さんと合流するか？」

???

「あら？八幡君？」

八幡

「え？・・・溜花さん？」

鶴見 溜美

「お母さん。」

鶴見 溜花

「溜美！まさか・・・。」

八幡

「ホラーに襲われそうでした。」

鶴見溜花

「そう、ありがとう八幡君。」

鶴見 溜美

「八幡？」

鶴見 溜花

「この人の本名。」

鶴見 瑠美

「じゃあ私も八幡って呼んじゃダメ？」

八幡

「ダメ。」アツサリ

鶴見 瑠花

「本名は彼自身が認めて貰わないとダメなのよ。」

八幡

「そういう事。」

由比ヶ浜

「あ、サブレ。」

八幡

「あ、由比ヶ浜。」

凜

「あ、零君。」

八幡

「凜さん。」

鶴見 溜花

「零君の知り合いだったのね偶然会ったのよ。」

八幡

「へえ、まあ取り合えず溜花さんの娘さんを家まで送りますよ。」

鶴見 溜花

「あ、お願いね零君。」

八幡

「はい。」

凜

「零君この人達の事そろそろ紹介してくれないかしら？」

八幡

「あ、すいませんこの人は鶴見 溜花。凜さんと同じ仕事している人です。」

鶴見 溜花、凜

『(同じ? 魔戒法師ね。)』

鶴見 溜花

「改めて初めまして鶴見 溜花です。」

凜

「凜です。」

由比ヶ浜

「ゆ、由比ヶ浜 結衣です。」

八幡

「鶴見ちゃん自己紹介しな。」

鶴見 瑠美

「ちゃんはやめて。鶴見 瑠美よろしく。」

八幡

「じゃあ、紹介も終わったし帰りましょ？」

凜

「そうね。」

八幡は鶴見親子を家まで送り次に由比ヶ浜を家まで送った。

???

「へえ、アイツこの街に来たんだ。」

???

「姉ちゃんあの銀の魔戒騎士がこの街に来てくれたの？」

???

「ええそうよこれでホラー退治少しは楽になるわ。」

???

「この街に八幡がいるんだ。」

???

「うむ、また八幡と組めるな。」

???

「そうだね。」

???

「ようやく来たわね銀の狼早く会いたいわ。」

迷子

〈朝〉

《涼邑屋敷／キッチン》

トントントン!

凜

「よし出来たわ。羅号（ラゴウ）八君起こして来て。」

羅号

『バウ。』

トコトコ!

朝食を作っていた凜は魔戒獣 羅号を呼び寝ている八幡を起こしに頼んだ。

《涼邑屋敷／八幡の部屋》

八幡

「zzz」

ガチャ!

羅号

『バウバウ!』

八幡

「ンガ? ああ、羅号か……フワアおはよう。」 ナデナデ!

羅号

『♪』

八幡

「じゃあ行くか。」

羅号

『バウ!』

ガチャ!

《涼邑邸／居間》

ガチャ!

凜

「あ、八君おはよう。」

八幡

「おはようございます凜さん。」

凜

「羅号お疲れさま。」

バシッ!

羅号

『……。』

凜

「……壊してやろうかこの犬ー!」ジンジン!

羅号

『ガルルルルー! (殺れるものならやってみやがれー!)』

ボカスカ!

〃魔戒獣 羅号〃 は凜が生みの親である筈が懐かず八幡には生みの親の凜以上に懐かれています。八幡が撫でられるのは好きだが凜に撫でられるのは嫌いである。

八幡

「いつもの朝だな」モグモグ

猫

『ニャ〜』タシタシ

八幡

「ん？今日も来たのかカマクラ。」ナデナデ

カマクラ

『ゴロゴロ♪』

凜

「あら？カマクラちゃん久しぶりね……。。」ポロツ！

バシツ！

凜

「……。。」ジンジン！

カマクラ

『……。。」

凜

「三味線にするわよこのバカ猫ー！」

カマクラ

『フーーーー！』（殺れるものならやって見るニャー！）』

ボカスカ！

野良猫のカマクラ。八幡が街を歩き回っていた時腹を透かせたカマクラを見付け餌を上げた事で八幡に懐いていた凧と喧嘩になるため屋敷では飼ってない。たまに何処かに行きたまに屋敷に来る猫である。

八幡

「はあくカマクラのご飯用意しとこ。」

凧、羅号、カマクラ

『……』ボロボロ！

八幡

「カマクラ餌置いとくからね。」

カマクラ

『二、にああく……』

シルヴァ

『八幡何処に行くの？』

八幡

「ゲート〃封印しに行く。」

凧

「じゃあ私は片付けてゲート封印に行くわね。羅号連れて行きなさい。」

八幡

「はい。羅号おいで。」

羅号

『バウ!』

凜

「いってらっしゃい。」

《東の番犬所》

ケイル

「ベル、ローズ聞いたかしら？」

ベル

「聞いているわ。」

ローズ

「あの男が指令とは違うとはいえ魔獣アズダブを討伐した件だな？」

ケイル

「そうよあの男はやってくれたが……お前は失敗したようだなホラーに騙され黄金を

剥がされた男葉山 隼人。」

葉山 隼人

「……。」

ベル

「本来なら鎧は剥奪されるがお前を騙したリングが討伐されたので黄金を剥がされただけですんだのに……。」

ローズ

「にもかかわらず司令もだしていないのに勝手にホラー討伐しようとしたな？」

ケイル

「討伐したならば大目に見てやったが返り討ちにあい情けで見逃されられるとは情けないわね。」

葉山 隼人

「で、ですが！」

ベル

「黙りなさい言い訳など聞きたくないわ。」

葉山 隼人

「クッ……。」

ローズ

「お前はあのホラーを討伐する必要はないあの男に任せてある。」

コダマ

「……。」ペコ

ケイル

「コダマ? どうしたの?」

ブワアアア!

コダマは東の見取り図の映像を表した。

ボッ!

ベル

「ほう、あの男ゲート封印しているようね。」

ローズ

「もう十つ箇所も封印とはなお前より働いているな。」

ケイル

「魔戒法師と協力しあつてゲート封印を封印しているようね。」

葉山 隼人

「クッ……。」

《町の裏町／オブジエ前》

八幡

「ハア！」

ズバアアアア！

八幡

「フウ！」

シルヴァ

『お疲れ様八幡かなり消費したわね凜と合流してお昼にしましょ？』

八幡

「そうだな……にしても此処の管轄の魔戒騎士はちゃんとゲート封印してんのかよ？」

シルヴァ

『そうね西の管轄と比べて大いわね。』

八幡

「あくあく俺一人じゃキツイな彼奴ら此処に来ないかな？」

シルヴァ

『あの子達元気にしてるかしらね?』

八幡

「さあな・・・。」

《町／広場》

八幡

「えくと凜さんは?」

ガシツ!

八幡

「ん?」

幼女

「グスツ!」

八幡

「えくとお嬢ちゃんどうした?」

幼女

「さくちゃんがどつかいっちゃったの。」グスツ!

八幡は服を掴まれ掴んだ人を見たら水色髪で小さな女の子が服を掴んでいた。

八幡

「迷子か……。」

幼女

「うう〜」

八幡

「しよがないな……。」ガサガサ

幼女

「？」

八幡

「好きな飴味あるか？」

幼女

「リンゴ……。」

八幡

「ほらよ。」

幼女

「あ、美味しい……。」コロコロ

八幡はポケットから飴を取り出しリンゴ味を幼女に上げ少し元気になった。
???

「けーちゃん何処ー。」

八幡

「ん？」

ケーちゃん

「あ、さーちゃんの声だ！さーちゃん！」

さーちゃん

「あ、けーちゃんもう探し．．．八幡？」

八幡

「ん？．．．川崎 沙希？」

シルヴァ

『これは思わぬ再会ね．．．。』

姉弟

〈昼〉

《サイゼ／店内》

八幡は偶然川崎 沙希と出会い大志とも偶然出会った後凜と合流しサイゼに川崎姉弟に案内された。

凜

「久しぶりね沙希ちゃん、大志君。」

大志

「お久しぶりっすね八幡さん、凜師匠。」

沙希

「八幡あんたの噂聞いてるよ “疾風の銀の騎士” って呼ばれているわよ。」

八幡

「フーン。」

沙希

「フーンって興味なさそうね……。」

八幡

「ホラー狩るのに呼び名なんて興味ないそれより……。」

京華

「？」

八幡

「何でお前達の妹けーちゃんを俺の膝の上に乗せなきやならんのだ？」

沙希

「しようがないでしょけーちゃんが八幡の膝に乗りたいつて言ったんだから。」

大志

「でも以外つすね京華が初対面なのに八幡さんに懐くなんて。」

京華

「はーちゃんは飽くれたから好き〜。」〃〃

八幡

「……。」

沙希

「あんたの気持ち分かるけど我慢して。」

何故京華が八幡の本名言っているかというと……。

〈回想〉

京華

『川崎 京華です。けーちゃんって呼んで。』

凜

『私は凜よ。』

八幡

『涼邑 零だ。』

京華

『嘘だ!』

全員

『?』

沙希

『けーちゃん嘘ってどういう事?』

京華

『だってお名前間違えてるもん。本当のお名前教えて。』キラキラ↑（名前教えてほしいなという目。）

八幡

『……。（何で偽名だって分かったんだ？）』コンコン↑（星が当たってる。）

京華

『ダメなの……。』ウルウル+キラキラ

沙希

『八幡……。』ジー

大志

『八幡さん……。』ジー

凜

『八君……。』ジー

シルヴァ

『八幡……。』

八幡

『は、八幡だ……。』↑観念した。

京華

『八幡？じゃあはーちゃんだ！はーちゃんも私の事けーちゃんつて呼んでね？』

八幡

『……はい。』

という訳である。

〈回想終了〉

京華

「はーちゃん食べさせて〜。」

八幡

「はいはい。ホラ、ア〜ン。」

京華

「ア〜ン」モグモグ

八幡

「上手いか？」

京華

「うん美味しいよ。」

八幡

「そうか……。ナデナデ！」

京華

「えへへへ」／＼／＼／＼／

凜

「まるで兄妹見たいね。」

大志

「そつすね……。」

八幡

「沙希お前妹いたんだな？」

沙希

「まあね。」

八幡

「三人姉弟か？」

沙希

「いや四人姉弟後もう一人弟がいてけーちゃんが末っ子だよ。」

京華

「さーちゃんさーちゃん！」

沙希

「何けーちゃん？」

京華

「はーちゃんと遊園地行きたい。」

沙希

「え？」

八幡

「何故俺？」

沙希

「いや、八幡このあと用事があつて……。」

京華

「ウーはーちゃんで行きたいよ。」キラキラ

沙希

「いや、でも……。」チラツ！

八幡

「いや、見られても……。」

凜

「八君ゲート封印なら私と大志君でやっておくから沙希ちゃんと京華ちゃんと遊園地で遊んできなさい。」

沙希

「え？それじゃあ師匠と大志に悪いし……。」

大志

「姉ちゃんたまには羽根を伸ばすのも悪くないよ？」

沙希

「それじゃあお言葉に甘えようかな？八幡はどうする？」

八幡

「え？」

京華

「はーちゃん……。」ウルウル＋キラキラ

八幡

「……分かった分かった行きますよ。」コンコン

京華

「ワァー！」

沙希

「良かったねけーちゃん。」

京華

「うん。」

凜

「代金は私が払っておくわ。」

八幡

「すいません。」

沙希

「すいません師匠。」

京華

「ありがとうりーちゃん。」

凜

「りーちゃん。フフ、どういたしまして。」

沙希

「じゃあ行こっかケーちゃん？」

京華

「うん。はーちゃん肩車して。」

八幡

「分かった。」

凜

「じゃあまた後でね〜」

八幡は沙希と京華を連れて凜と大志と別れた。

凜

「じゃあ私達も行こっか？」

大志

「はい、師匠。」

凜と大志はゲート封印に一緒に向かったが……。

小町

「お母さんまた彼奴と……。」

小町が遠くから覗いていた。

遊園地

〈夕方〉

《遊園地／メリーゴーランド》

京華

「さーちゃん！はーちゃん！」

八幡

「オーイ。」

紗希

「けーちゃん！」

八幡、シルヴァ

『『ジーン』』

紗希

「な、なによ？」

八幡

「いや、お前がそんなにはしゃぐなんて以外でな。」

シルヴァ

『確かに。』

紗希

「ウウ。」／＼／＼／＼／＼／

八幡

「そういえばけーちゃんも魔戒法師になるのか？」

紗希

「いや、出来ればけーちゃんはだけは普通の生活をしてほしいんだ。」

八幡

「そうかまあでも決めるのはけーちゃんだからな。」

紗希

「そうだね・・・。」

八幡

「それにしても遊園地かあまりいい思い出がないな。」

シルヴァ

『そうね。』

紗希

「それってホラーがらみ？」

八幡

「まあな……。」

シルヴァ

『ヤシャウルとリングの事よ。』

紗希

「遊園地で殺りあつたの？」

八幡

「ああ、ヤシャウルには勝ったけどリングには負けた。」

紗希

「ま、まあ今日は楽しも？」

八幡

「そうはいかねえよ。」スツ！

八幡は赤い封筒を取り出した。

紗希

「指令書……。」

八幡

「前回指令書に書かれたホラーを討伐する筈がアズダブを討伐しちまった。」

紗希

「指令書確認したの？」

八幡

「する前に色々邪魔されたんだよ……。」

紗希

「なんかごめん。」

八幡

「いや、気にするな。」

シルヴァ

『八幡今確認したらどうかしら？人はそんなにいないし。』

八幡

「分かった。」

カシヤ

ボオ！

ブワア！

八幡

「ホラー『アスモデイ』討伐せよか……。」

シルヴァ

『奴は人間の心の奥深くにある本音を無理矢理引き出すホラーよ。』

八幡

「恐ろしいなそのホラー。」

紗希

「え？何で？」

八幡

「まあ考えてみな仮にAさんとBさんが婚約者だったりしよう二人は愛しているとお互い言っているが本心までは分からないそこでアスモデイが何らかの方法でAくん、Bさんの本音を強制に引き出しAくん、Bさんの本音をだしたがアスモデイは狂暴姓まで引き出したら後は分かるな？」

紗希

「う、うん……。」

八幡

「まあそろそろ……?」

紗希

「どうしたの？」

八幡

「いや、今誰かに見られていた。」

紗希

「え？ 私には何も……。」

八幡

「俺だけ視線を送ってたから分からのだろ？」

紗希

「アンタ誰かに恨まれてんの？」

八幡

「心当たりがありすぎるなホラーに憑依された身内かな……。」

星川ミサオ

『私はあなたを一生許さない！』

八幡

「……。」

紗希

「八幡……。」

京華

「さーちやくん。はーちやくん。」

紗希

「あ、けーちゃん終わったんだ……。」

シルヴァ

『八幡あの娘の視線だったの？』

八幡

「いや、違うが……確かに俺に視線を送ってた。」

京華

「はーちゃん次行こー！」キラキラ

八幡

「はい……。」コンコン

小町

「フフツ、アイツが遊び呆けてる間にこの“ホラーの返り血”がついたハンカチをばらまいて……フフお母さんの為にあの男には死んでもらわないとね。」

〈夜〉

《ビル／社内》

男会社員

「ハハハハ！」

女会社員

「アハハハハ！」

ドガ！バキ！

アスモディ

「♪」

とあるビルでアスモディが人間を操り喧嘩をしていた。

ガチャ！

葉山 隼人

「そこまでだホラー！」

青人形

『またお前か．．．。』

赤人形

『弱いのにまた挑むなんて馬鹿な奴。』

葉山 隼人

「黙れ今度こそ俺が倒す！」

ガシッ!

葉山 隼人

「!？」

男社員

「ハハハハ！」

葉山 隼人

「は、離せ！」

アスモディ

「♪」

赤人形

「じゃ〜な〜♪」

葉山 隼人

「ま、待て!？」

葉山隼人は操られた人間に取り押さえられた。

葉山 隼人

「クッソ！ ザルバッ！」

ザルバ

『お断りだね。』

葉山 隼人

「な!?!」

ザルバ

『それくらい自分で解決しな。』

葉山 隼人

「クッ!?!」

男女会社員

『ハハハハ!』

葉山 隼人

「クッどうすれば!」

ガチャ!

凜

「ちよつと貴方魔戒騎士？これ何とかしなさいよ！」

葉山 隼人

「そうしたいけどザルバが……。」

凜

「ザルバ？もしかして貴方黄金騎士？」

葉山 隼人

「そ、そうですが……。」

凜

「その魔導輪非協力のようね。」

大志

「ど、どうするんすか凜師匠!？」

凜

「しようがないわね。」

ヒュ！

凜

「ハア！」

バチイイ！

男女会社員達

『…………』

凜は筆を出し衝撃波を放ち男女会社員達は気を失った。

大志

「す、凄い流石は凜師匠！で、でもホラーが…………。」

凜

「私がタダで見逃す訳ないでしょ？」

大志

「あ、魔界魚ですね？」

凜

「フツ、魔界魚もそうだけど『花罪』も羅号も八君に懐くのはいいけど何で私には懐いてくれないのかしら？」ズーン

大志

「師匠！そんな事言ってる場合ですか!？」

葉山 隼人

「待ってくれ！」

凜、大志

『?』

葉山 隼人

「僕も連れて行ってくれないか!？」

凜

「ダメ。」アツサリ

葉山 隼人

「な!？」

凜

「貴方は弱いそれに魔導輪は非協力で一緒に行ったら足手まといなのよ。」

大志

「あ、あの凜師匠俺遊園地に行つて来ます! 零さんに伝えないと!？」

凜

「そう? アイツが向かった先は遊園地よ!」

大志

「な、何ですって!？」

凜

「それだけじゃないわ大量のホラーが出現している!」

大志

「お、俺先に行ってます！」

ガチャ！

凜

「……あら？あの二人の魔戒騎士この街に来てたのね援軍として行かせましょ。」

ガチャ！

葉山 隼人

「……。」

ザルバ

『おやおや仲間外れだな。』

戦友

〈夕方〉

《遊園地／観覧車》

京華

「さーちゃん、はーちゃん早く早く！」

シルヴァ

『子供は元気ね〜。』

八幡

「元氣過ぎだがな……。」

暫く八幡はお子様専用ジェットコースターやカーレース他のアトラクションに乗せられて修行し体力がある筈が疲れがではじめた。

紗希

「その〜ごめん体力回復のビン後で上げるからね。」

八幡

「わ、悪い……アレ何だ？」

紗希

「アレ？」

子供1

「何だこのウサギ弱いぜー！」

子供2

「やっちゃえやっちゃえ〜」

ポカポカ

ウサギの着ぐるみ

「止めて〜誰か助けて〜。」

子供がウサギの着ぐるみを着た人を虐めていた。

八幡

「ん？この声何処かで……。」

ウサギの着ぐるみ

「助けて〜八君〜。」

八幡

「間違いないアイツだ……。」

京華

「はーちゃん？」

八幡

「けーちゃんちよつと待っててくれ。」

子供1

「このこの〜。」

子供2

「弱つちい〜。」

八幡

「こら止めるクソガキ共ウサギちゃんが可哀想だろ？」

子供1

「何だと!？」

子供2

「邪魔すん・・・な？」

八幡

「アア？」ギロ!

子供達

『ヒ、ヒイイイイ!』

子供1

「この男の目恐えー！」

子供2

「ママー！」

ピューー！

八幡

「フン。おい大丈夫か？」

ウサギの着ぐるみ

「ううゝ助かりましたゝって八君!？」

八幡

「その声やつぱりめぐりか。」

スポツ！

めぐり

「ばれたか八君昨日ぶりだね。」

八幡

「俺の本名で八君呼ばわりするのはお前くらいなもんだよ。お前バイトはいいけどちやんと選べよ……。」

めぐり

「う、うんゴメンねまた迷惑かけちゃって……。」

八幡

「気にするなお前の迷惑何てもう慣れた……。」ズーン

めぐり

「ゴ、ゴメンなさい……そういえば八君何で遊園地にいるの？」

八幡

「ああ、子供の付き添い……。」

京華

「はーちゃんその人誰？」

紗希

「ん？八幡の知り合い？」

八幡

「ああ、城廻 めぐり 元血に染まりしものだ。」

めぐり

「ど、どうも……。 (はーちゃん?)」

八幡

「で、こっちは魔戒法師の川崎 紗希。」

紗希

「初めまして……。（血に染まりしものですって？それに八幡って呼んでる。）」

八幡

「で、この娘は……。」

めぐり

「八君の隠し子？」

八幡

「殴るぞ？」（黒笑）

めぐり

「ゴ、ゴメンナサイ。」ガクガクブルブル

八幡

「はあ、この娘は川崎 京華。紗希の妹だ。」

京華

「川崎 京華です。けーちゃんって呼んでねめーちゃん。」

めぐり

「めーちゃん可愛い呼び名ね。」

係員

「オ～イ城廻君ちよつといいかい？」

めぐり

「あ、は～い。ゴメンね八君、川崎さん楽しんでね？」

京華

「は～い。」

八幡、紗希

『(用事があるんですが……)』

めぐり

「じゃあね～」

めぐりは係員に呼ばれ八幡達と別れた。

小町

「フッフ、あの女あの男の知り合いかな？いい事思い付いたこのホラーの返り血が付いているハンカチをあの女の背中に付けさせて……。」フッ！

ピタッ

小町はホラーの血が付いたハンカチを飛ばしめぐりの背中に貼り付いた。

小町

「そろそろホラーの時間ね。」

ズズズ!

素体ホラー

『キシヤアアアア!』

小町

「素体ホラー」 まだ出てくるわね。いくら魔戒騎士でも死ぬわねお母さんの為にあの魔戒騎士には死んでもらわなくちゃね。」

???

「この遊園地に八幡がいるの?」

???

「間違いないそれにホラーが数体出現しているいくら八幡でもそんなに相手に出来ない。」

???

「確かにそうだねじゃあ行くよ！」

???

「承知！」

二人の男が遊園地に向かった一人は片刃剣をもちもう一人は弓を持っていた。

アスモディ

「♪」

赤人形

『今度は此処だ！』

青人形

『此処には仲間の血の臭いが沢山するぞ！』

アスモディ

「♪」

アスモディが八幡達がいる遊園地に向かった。

援軍

〈夜〉

《遊園地／観覧車前》

シルヴァ

『そろそろホラーが出現する時間ね。』

八幡

「紗希、人払いの札一応貼ったか？」

紗希

「貼ったわこれで私達は一時的に消えるわ。」

八幡

「以前リングが使ってた札を凜さんが応用して作っていたからな。」

紗希

「たまに思うけど凜師匠は何者？」

八幡

「さあな、あの人突然俺の前に現れて俺の手伝いをしたいと言いだしたからな……さ

て来るな例の視線はまだいるがな。」

素体ホラー達

『キシヤアアアアア！』

パツ！

一般人

「？」

人払いの札によつてホラー、八幡、紗希は消えた。

シルヴァ

『誰かが言つてたわね素体ホラー100体相手に出来ない何てまあ八幡からすれば10

0体のホラーなんて……。』

ズババババア！

八幡

「〃回天劍舞・六連〃！」

素体ホラー達

『ギシヤアアアアア！』

ドドドドパアアアアア！

シルヴァ

『あつという間に片付けちゃうわね。』

紗希

「鎧召還していないのに八幡また強くなったわね。」

京華

「zzz」

紗希

「けーちゃんは上手く寝かせて防御結界貼ったし私も……。」

素体ホラー

『キシヤアアアア！』

紗希

「ハアッ！」

バシヤバシヤバシヤバシヤア！

素体ホラー達

『キシヤアアアア！』

ドパア！

紗希は筆に気を込めて水色の大量の魔界魚出し素体ホラー達が消えた。

八幡

「紗希！」

紗希

「任せて！ハア！」

ブワアアアア！

八幡

「〃二刀流竜・卷〃！」

ズババババア！

素体ホラー達

『ギシャアアアアア！』

ドドドドパアアアアン！

紗希は風の気をため込み八幡の二刀の剣に当て竜巻を発生させ素体ホラー達を倒した。

素体ホラー

『キシヤアアアアア！』

八幡

「また素体か何でこんなに？」

シルヴァ

『今この場合全体を調べたわどうやらホラーの返り血が付いたハンカチが遊園地全体に置かれていたのを確認したわ。』

八幡

「こんな事が出来るのは……魔戒法師か？」

紗希

「何ですって!？」

シルヴァ

『一人心当たりがあるわね八幡……。』

八幡

「確か小町……。奴しかあり得んな。」

紗希

「小町？誰よそいつ？」

八幡

「凜さんと何らかの関係者だ。ハア！」

ズバア！

素体ホラー

『ギシャア!』

ドペア！

紗希

「けどホラーの返り血の付いたハンカチどうすんの？ハッ！」

バチバチイ！

素体ホラー

『ギシヤア！』

ドペア！

素体ホラー

『キシヤア！』

紗希

「しまっ！」

八幡

「紗希ー！」

ズドオ！

素体ホラー

『ギシヤア！』

ドペア！

紗希

「？」

八幡

「ハア！」

ズバア！

八幡

「紗希大丈夫か!？」

紗希

「う、うん。」

シルヴァ

『八幡アレを見て!』

八幡

「?あの矢はまさか!」

紗希が素体ホラーにやられそうになったが素体ホラーに矢が刺さっていた。

???

「デリアア！」

ザン!

素体ホラー

『ギシヤア!』

ドペア!

八幡

「お前は材木座か!？」

材木座

「久し振りだな八幡!」

ビシユ!

ザシユ!

???

「八幡久し振りだね。」

八幡

「戸塚! お前から何で此処に?」

柳葉刀に似た円状の鏝をした片刃刀を持ち太っている男材木座と青い弓をもった男の娘戸塚が八幡達の前に

戸塚

「此処東の管轄に移るように言われたんだよ。」

材木座

「八幡我也だぞ！」

八幡

「チツ！」

材木座

「オイ！今舌打ちしただろ!？」

八幡

「気のせいだ。」

シルヴァ

『劇的な再会だけど今は……』

材木座

「そ、そうだな……」

八幡

「それよりお前らコイツら早く片付けるぞ！」

全員

『うん！／オウ！』

ザシユ！ザシユ！ザシユ！

ズババババア！

ドシユウ！

バリバリイ！

大志

「八幡さ〜ん！姉ちゃ〜ん！」

紗希

「大志！」

大志

「うわ〜俺が来るまでもなかったな〜。」

シルヴァ

『八幡。』

八幡

「何だ？」

シルヴァ

『めぐりのいる所にホラーが出現したわ！』

八幡

「何!?!」

シルヴァ

『以前めぐりに私の分身アクセサリーを渡したままだったでしょ?』

八幡

「そういえば……悪いお前から此処頼めるか?」

ドシユウ!

戸塚

「うん任せて!」

ザン!

材木座

「行くがいい八幡!」

バリバリイ!

紗希

「八幡気よ付けなさいよ!」

バチイ!

大志

「お気よつけて!」

ダッ!

八幡

「めぐり……。」

ザシユ！ザシユ！ザシユ！

八幡は、素体ホラーを斬りながらめぐりのいる場所まで走った。

銀の馬

《遊園地／スタッフ控え室》

男性スタッフ

「城廻さん、今度はこれ着てね？」

めぐり

「は、はい……。お、お姫様の衣装って恥ずかしいなくて、でも、八君どんな反応するかな？」

〈妄想〉

めぐり

『は、八君このドレスどうかな？』 //

八幡

『似合ってるよめぐりそのドレス。』

めぐり

『あ、ありがとう。』 //

八幡

『めぐり．．．。』

めぐり

『八君．．．。』 //

〈妄想終了〉

めぐり

「何て．．．あるわけ無いから。八君、魔戒騎士だし守りし者だし八幡だしなあ。」ズー
ン

八幡

「クシユツ!？」

シルヴァ

『八幡どうしたの。風邪?』

八幡

「いや、分からん。」

ザシユ!

素体ホラー

『キシヤア!?!』

男性スタツフ

「城廻さん?」

めぐり

「あ、すいません。着替えますね……。めぐりは着替えるために試着室に入った。」

男性スタツフ

「うへへ……あの娘いい体してたな」

ガタツ!

男性スタッフ

「何だ？」

ピエロ？

「♪」

赤人形

『この鼻に注目！』

カー!

男性スタッフ

「.....」

《遊園地／スタッフ試着室》

めぐり

「あれ、このハンカチいつの間に？それに黒い血？まさかね……。」

めぐりが着ていたウサギの着ぐるみの背中、黒いシミの付いたハンカチがあった。

ドカー!

めぐり

「ヒッ！な、何!？」

男性スタッフ

「ふ、フヒフヒヒヒヒ！」

めぐり

「ヒッ！こ、この人の目ヤバい！」

男性スタッフ

「いい体だな。俺の女にしてやるよ！」

めぐり

「た、助けて八君!!」

シュカン！

バカン！

八幡

「ウオリアア！」

ゴス！

男性スタッフ

「ウゲー！」

バタ！

天井に円い斬りくちができて、そこから八幡が登場、男性スタッフを殴り飛ばし気絶させた。

八幡

「めぐり大じよb!？」サツ! //

めぐり

「八君来て? どうして目をそらすの?」

シルヴァ

『めぐり貴女、自分が今どんな格好してると思っているの?』

めぐり

「え? . . . あ。」 // // // // //

八幡

「.」 // // // // //

此処は試着室。しかもめぐりの姿は下着姿.

めぐり

「は、八君、外に出てて。この人を操っていたホラー.」 //

///
///
///

八幡

「わ、分かった・・・。」
シルヴァ

『何？この空間？』

《遊園地／スタッフ控え室》

青人形

『あれ？声がしなくなっただぞ？』

赤人形

『変だな？』

ヒュン！

アスモディ

「!？」

ドン！

青人形

『わ！何だ!？』

赤人形

『あれは破邪の剣!?!』

スツ!

カシヤ!

ボオ!

アスモディ

「!?!」

ギギギ!

パチン!

八幡

「お前がアスモディか。貴様もホラーの返り血に誘われて来たんだろうが、もう思い通りにさせませんぞ。」

青人形

『こいつ魔戒騎士。しかも、あいつより強そう。』

赤人形

『なら、おい! 目の腐った魔戒騎士!』

八幡

「?」

赤人形

『この赤い鼻に注目！』

カー!

八幡

「……。」

めぐり

「八君大丈夫？」

赤人形

『さあ、目の腐った魔戒騎士。その人間の女を殺せ！』

八幡

「……。」

ジャキ!

八幡は、魔戒剣を出しめぐりに向けた。

めぐり

「は、八君……。」

八幡

「……。」

めぐり

「……私、八君になら斬られてもいいよ。あの時、私を斬りたかったのに斬れなかつたんだよね。」

銀牙騎士ゼロ

『ホラーの返り血を浴びた人間は斬る。それが掟だ……。』
めぐり

「八君優しいから。だから、私を斬ってもいいよ。」

青人形

『覚悟があるようだね。』

赤人形

『じゃあ目の腐った魔戒騎士。その女を殺しちやえ。』

八幡

「……。」

ジャキ!

ザン!

めぐり

「……あれ?」

めぐりは八幡に斬られると思ひ、目を閉じたが斬られていなかった。変わりに……。

赤人形、青人形

『ウワァー!』

ブワ!

八幡

「たくっ!鬱陶しい人形だったな……。」

めぐり

「八君?」

八幡

「めぐりお前、良くあんな言葉を言えたな?」

めぐり

「聞いてたの!?!操られたんじゃないの!?!」 / / / / / /

八幡

「俺が簡単に操られるわけないだろうが……さてアスモディ。今度は何して遊ぶ?」

アスモディ

「グルルル!」

ジャン!

アスモディは二本のジャグリングを取り出した。

八幡

「お、二刀流か俺もだぜじやあやるぜ！」

ビタア！

八幡

「何!?!」

アスモディ

「♪」

ビシユ！

八幡

「ウオー！」

アスモディは、八幡の攻撃を止め、顔に攻撃を当てようとしたが、八幡は何とか避けた。

八幡

「成る程。パントマイムか……おい、もう一回攻撃してやる。ちゃんと防げよ？」

アスモディ

「♪」

八幡

「ハア！」

ビタア！

アスモデイ

「♪」

八幡

「フツ！掛かったな。」ニヤ！

ブン！ガキイ！

八幡

「二刀流『陰陽交叉』！」

キイイン！

アスモデイ

「!？」

八幡

「よし、斬れた。」

八幡は陰陽交叉でジャグリングを叩き斬った。

八幡

「次行くぞ！」

ビタア！

八幡

「手でもアリかよ……だが両手で防いだのはダメだな。何故なら、腹ががら空きだからだよ！」

ドゴオ！

アスモディ

「!?」カハア！

八幡

「まだまだあ！二刀流陰陽撥止！」

ガキイイ！

ズドオ！

アスモディ

「!?」

ドサア！

めぐり

「八君……。」

八幡

「今の内に外に出るぞ。」

めぐり

「う、うん。」

ガチャ!

素体ホラー

『キシヤア!』

めぐり

「キヤアアアアア!」

ザシユ!

素体ホラー

『キシヤア!?!』

八幡

「安心しろ。お前は俺が守る。」

めぐり

「うん。」

ダッ!

ガクン！

八幡

「チツ！」

めぐり

「八君どうしたの!？」

八幡

「此処に来る途中、素体ホラーに足やられた……。」

めぐり

「そ、そんな!？」

八幡

「先に逃げろ。羅号！」

羅号

『バウバウ!』

八幡

「めぐりを守りながら沙希達のいる場所まで行け！」

めぐり

「で、でも八君その足じゃあ!？」

八幡

「安心しろ。俺にはまだ『切り札』があるのを忘れたのか？」
めぐり

「う、うん分かった。羅号ちゃん、道案内お願いね！」

羅号

『バウ！』

ズズン！

バカアアアアン！

魔獣アスモディ

「おやおやどうした？魔戒騎士。足から血が出ているぞ？」

八幡の前に魔獣化したアスモディが現れた。

八幡

「魔戒騎士を舐めるなよ。アスモディ！」

ガキイ！

魔獣アスモディ

「鎧召喚かさせるか！」

ビョーン！

キュカン！

カアアアアア！

ズドーン！

魔獣アスモディ

「フハハハ！魔戒騎士を踏み潰してやったわ！」

???

「そいつはどうかかな？」

魔獣アスモディ

「!?」

バゴオオオオオン！

アスモディ

「ゲファア！な、あの足でどうやって!？」

銀の馬

『バルル！バヒヒーン！』

魔獣アスモディ

「な!?!あれは!?!」

銀牙騎士ゼロ

「銀牙騎士ゼロ！ 魔導馬ギンガ！！」

魔導馬ギンガ

『バヒヒーン！』

銀牙騎士ゼロ

「魔獣アスモディ。貴様の陰我、俺が断ち斬る！！行くぞギンガ！」

魔導馬ギンガ

『ヒヒーン！』

ドカラ！ドカラ！ドカラ！

魔獣アスモディ

「小癩な！」

ビヨーン！

トン！

ドカア！

魔獣アスモディ

「ガフウ！」

魔獣アスモディは腕を伸ばしたが避けられ、ギンガは魔獣アスモディの腕に乗り、後ろ足で顔を蹴った。

材木座

「オオ！八幡！魔導馬を出せたのか!？」

ザン！

戸塚

「久しぶりに見たな。」

ドシユ！

材木座

「え？我は初めて見たのだが……。」

沙希

「私は見た事あるよ。」

大志

「ええ！姉ちゃん俺初めてだよ!？」

沙希

「そりゃ私はカルマの鏡の中にいたからね。」

めぐり

「八君……。」

戸塚

「心配しなくても大丈夫。八幡は勝つよ。」

めぐり

「う、うん所で君達も魔戒騎士？」

材木座

「うむその通り我は……。」

素体ホラー

『キシヤア!』

ザン!

カアアアアン!

材木座

「見せてやるぞ! 我の鎧を！」

キュカン!

カアアアア!

ガシヤーン!

???

「炎刃（えんじん）、騎士ゼン！」

材木座は素体ホラーを縦に斬り、魔戒剣を地面に付けて自分の周りに円描く。すると、地面から赤い鎧が出て来て来て材木座は

炎刃（えんじん）騎士ゼンとなった。

戸塚

「材木座君も鎧召喚したなら、僕も！」

素体ホラー達

『キシヤア！』

戸塚

「ハア！」

ドス！ドス！

素体ホラー達

『キシヤア!?』

キュカン！キュカン！

ドパア！ドパア！

カアアアア！

ガシヤーン

???

「天弓騎士、ガイ！」

戸塚の場に左右から素体ホラーが襲いかかったが、弓で左右の素体ホラーを刺した状態で左右の円を描き素体ホラーは消滅した。それと同時に青い鎧天弓騎士ガイとなった。

めぐり

「赤と青の魔戒騎士……。」

大志

「ス、スゲー！」

炎刃騎士ゼン

「貴様等の陰我、我が断ち斬る！」

天弓騎士ガイ

「君達の陰我、僕の矢で断ち射る！」

銀牙騎士ゼロ

「お、あいつ等も鎧召喚したか。」

シルヴァ

『久しぶりに見るわね。炎刃騎士ゼン、天弓騎士ガイ。』

魔獣アスモディ

「魔戒騎士共！何故人間を守る!？」

ンベエ！

銀牙騎士ゼロ

「ハア！」

ザシュ！ザシュ！

魔獣アスモディは口からボールを出し銀牙騎士ゼロに当てようとしたが、銀牙騎士ゼ

ロはボールを斬っていく。

魔獣アスモディ

「人間共の醜い本性を見ただろ？常に自分を偽りながら生きている存在。それが人間だ。そんな醜い存在を本当に守りたいと思うのか？」

銀牙騎士ゼロ

「……確かに、貴様の言葉にも一理はある。だが、それでも！人間は守るに値する！」
めぐり

「八君……。」

アスモディ

「貴様も人間と同じか！」

ンベエ！

銀牙騎士ゼロ

「一気に決めてやる！」

カシヤ！

ボオ！

ポイ！

ポポポポ！

銀牙騎士ゼロ

「烈火炎装！！ハア！」

ボオ！ボオ！

ポボン！

魔獣アスモディ

「グギア！」

銀牙騎士ゼロ

「ギンガ！」

魔導馬ギンガ

『ヒヒーン!』

ドカラ!ドカラ!ドカラ!

銀牙騎士ゼロ

「ウオオオオ!ハア!」

ザン!

魔獣アスモディ

「ガ、ガアアアア!」

ピュールルル!ドン!ドン!

銀牙騎士ゼロは、魔導火のライターを上^に投げ絶狼剣を^に魔導火を纏わせ、魔獣アスモディに目掛けて烈火炎装を放った。烈火炎装が当たり魔獣アスモディは弱り始め、その隙に銀牙騎士ゼロは魔導馬ギンガで進み、魔獣アスモディの鼻を斬った。同時に魔獣アスモディを倒し火花が上がった。

バアアアア!

八幡

「フン、汚い火花だ……」

めぐり

「八君……危ない後ろ！」

八幡

「!?」

素体ホラー

『キシヤア!』

???

「ハア！」

バチイ!

素体ホラー

『キシヤア!』

ドパア!

めぐり

「え? 誰あの娘?」

八幡は油断して素体ホラーが襲いかかろうとしたが誰かが八幡を助けてくれた。

八幡

「お前、操か?」

操

「久しぶりだね、八兄。涼邑 零の妹、涼邑 操、ただいま閑岱から修行を終えて帰って参りました。」

義妹

《遊園地／外》

操

「八兄久しぶりだね。」

八幡

「ああ、久しぶりだな。操いつ東の管轄に？」

操

「ついさっきだよ。八兄。」

めぐり

「えくと八君、この娘は？」

八幡

「めぐりよ、今は呑気に自己紹介してる場合か？」

めぐり

「え？」

素体ホラー達

『キシヤア!』

めぐり

「キヤアアアアア!」

ザシユ!

八幡

「チツ!足のダメージさえなけりやこんな雑魚共。」

シルヴァ

『安心しなさい八幡。もうそろそろ来るわ。』

凜

「ハア!」

ド。パアアアア!

ヒユルルル!

ドドドドオオオオン!

八幡

「こ、これって凜さんの魔界魚達だ。」

沙希

「流星群じゃなくて流星魚ね……。」

大志

「あの人チートすぎる傘やら筆何でも使いこなすし、遊園地中にいるホラー達とハンカチを狙うなんて……。」

めぐり

「キヤー！魔界魚がこつちに来るー！」

八幡

「あ、大丈夫だめぐり。」

スルリ！

八幡

「この魔界魚達はホラーにしか当たらん。それに、ホラーの返り血が付いたハンカチも処分してくれる。」

ボボボボ！

素体ホラー達

『ギシャアアアアア!?!』

凜が上空で魔界魚を大量に放ち、遊園地にいる素体ホラー達を消滅させ、ホラーの返り血の付いたハンカチは燃えた。

八幡

「よし！炎刃騎士ゼン、天弓騎士ガイ、沙希、大志、操。残ったホラー頼めるか？」
全員

『任せろ（て）（下さい）！』

小町

「そ、そんな！あの銀の狼。魔導馬を出せるなんて……ん？」

ヒュルルルル！

ドオオオオオン！

小町

「キヤアアアアア！」

八幡達の戦いを近で見ていた小町の場所に、凜が放った魔界魚が落ちて爆発した。

小町

「キヤアアアアア！」

ドサア！

八幡

「ん？」

めぐり

「八君。あの娘誰？」

八幡達の前に、小町が落ちてきた。

八幡

「彼奴は、お前にホラーの返り血のハンカチを貼り付けた見習いの魔戒法師だ。」

めぐり

「え？」

小町

「ク！」

八幡

「お前、何でこんな事をした？」

小町

「決まっているでしょ。お母さんを取り戻すためよ。その為にはお前が邪魔だったのよ。だから——」

バキイ！

小町

「アウー！」

八幡は小町を殴った。

ガシイ！

八幡

「だからって、関係ない人間を巻き込むんじゃねえ!!」

小町

「ヒィ！」

八幡

「小町、お前が俺一人だけ殺すならいいが、次に他の関係ない人間を巻き込んだら、只じゃおかんぞ!!」

小町

「ヒィ！」

八幡

「失せろ！」

ドサア！

小町

「ち、調子に乗るなよ銀の魔戒騎士！お前の事をお父さんに相d—」
凜

「へえ〜、あの男”にそんな力がまだあつたけ？」

小町

「おかし—」ムグ

凜

「私も零君と同じよ。消えなさい。ゴミ……。」

小町

「……。」

ダッ！

凜は小町の口を塞ぎ、小町は遊園地を走り去った。

めぐり

「ねえ、八君。あの娘と凜さんって、どんな関係なの？」

八幡

「知らん。何か事情がありそうだけど、聞かん事にしてる。」

めぐり

「そうなんだ……でもあの小町って娘。八君に似てたな……。」

八幡

「そうか？」

めぐり

「うん。アホ毛なところが似てるよ。兄妹だったりして？」

八幡

「もし奴と兄妹だったら、兄妹の縁を切る。」

めぐり

「・・・そっか。」

操

「八兄〜！」

八幡

「ん？おお、終わったようだな。」

操

「うん。八兄頭なで〜」

八幡

「分かった。」

ナデナデ！

操

「えへへ。」 //

めぐり

「八君、そろそろ紹介してほしいんだけど……。」

八幡

「ああ、そうだな。操、改めて全員に自己紹介しな。」

操

「うん分かった。皆さん改めまして、涼邑 零の妹涼邑 操と言います。よろしくお願
いします。」

沙希

「八幡あんた、妹いたの？」

八幡

「正確に言えば義理の妹だ。」

大志

「どういう事ですか？」

八幡

「この娘の本当の両親はホラーに殺されちゃってな。俺が兄代わりになったんだよ。」

沙希

「そっか……。私は、アンタと同じ魔戒法師の川崎 沙希だよ。八幡とは『魔境ホラーカルマ』を一緒に封印したんだ。」

大志

「俺は、川崎 沙希の弟大志っす。」

操

「よろしく。」

凜

「私は凜よ。よろしくね。」ニコッ！

操

「ヒー！」サッ！

凜

「どうして八君の後ろに隠れるの？」

川崎姉弟、八幡、めぐり

『（小町を痛め付けてた所を見てたんだろぅな。）』

八幡

「操、自己紹介はちゃんとしな。」

操

「み、操です。」ガタガタ!

戸塚

「八幡、僕達もいいかな?」

八幡

「いいぞ。」

戸塚

「僕は、天弓騎士ガイの称号を持つ戸塚 彩加と言います。八幡とは『ボルシテイ』と出会い、『龍』の討伐の助っ人に来てくれました。」

材木座

「我は、炎刃騎士ゼンの称号を持つ材木座 義輝だ。八幡とは戸塚と同じで『ボルシテイ』と出会った。」

めぐり

「私は、城廻 めぐりよろしくね。」

操

「はい!よろしく願いいたします。」

八幡

「よし、全員自己紹介終わったな。一旦解散するぞ？」

沙希

「それがいいね。そろそろけーちゃんがり起きちゃう。」

八幡

「一応全員俺の屋敷に来るか？今日は俺の屋敷で休んでいったらどうだ？」

全員

『お願いします。』

めぐり

「八君、私もいいの？」

八幡

「構わない。」

凜

「じゃあ先ずは、八君の足を治さないかね。」

八幡

「お願いします。凜さん。」

八幡の足を治した後、八幡達は涼邑邸に向かった。

???

「あの男、成人してもいないのに魔戒騎士になり魔導馬を出せるとは。しかもあの剣の構え方は……成る程〃風雲騎士波怒（ふううんきしバド）〃の弟子か。近々会いに行くともするか。」

過去

《???邸／庭園》

少女

「ふふ、こんなにお花が取れたわ。八幡もそろそろ帰って来るわん……」フラツ
ガシツ!

少女

「?」

八幡

「大丈夫かシズナ?体が丈夫じゃないんだから無理はするな。」

シズナ

「八幡、いつ帰って来たの?」

八幡

「今さっき帰って来た。義父さんにも挨拶してシズナを探してた。」

シズナ

「そうなんだ。八幡、シルヴァ、お帰りなさい。」

八幡

「ただいま。シズナ。」

シルヴァ

『フフ、ただいま。シズナ。』

シズナ

「八幡どうだったの？騎士の訓練所の事聞いたよ。無事で良かった。」

八幡

「まあ、あの後また師匠と修行の旅に出た。」

シズナ

「そうなんだ。ねえ、八幡……。」

八幡

「何だ？」

シズナ

「八幡は何故騎士になるの？人を守る為？」

八幡

「……シズナを守る為。」

シズナ

「…………え?／＼／」

八幡

「…………／＼／」

シルヴァ

『何自分で言って自滅してるんだか…………。』

八幡

「う、うるひゃい…………／＼／」

???

「八幡、シズナ、何をやってるんだ?」

八幡、シズナ

『!? (ビクッ!)』

八幡

「と、義父さん!?／＼／」

シズナ

「ど、道寺!?／＼／」

道寺

「二人共顔が赤いがどうした? (ニヤリ)」

八幡、シズナ

『・・・・・・・・／／／』

シルヴァ

『フフ、趣味が悪いわよ道寺。』

シズナ

「道寺、体が悪いのに外に出たらまた・・・・・・・・。」

道寺

「たまにはよいじやろ？面白いのも見れたしの。（ニヤニヤ）」

八幡

「と、義父さん!?!／／／」

シズナ

「道寺／／／」

道寺

「ガハハハ！まあ八幡よ、尊士との旅の事の中に入って聞かせてくれないか？」

八幡

「いいけど、余りいい話じゃないよ？」

道寺

「構わん。先に居間で待っておるぞ？シズナとゆつくり話ながら戻るとよい。」

道寺は先に屋敷に戻った。

シズナ

「全く道寺は……。」

八幡

「……。」

シズナ

「どうしたの八幡？」

八幡

「いや、帰って来たんだなって、改めて思ったんだ。」

シズナ

「そっか。でもまさか訓練所に魔獣ホラーが現れるなんて、思っても見なかったわね。」

八幡

「ああ……。」

シズナ

「八幡、そんなに自分を責めないで……。」

八幡

「シズナ、訓練所の事だけじゃないんだ。」

シズナ

「え？どういう事？」

八幡

「最近恐い夢を見るんだ。訓練所の時も……あの夢を見たせいで彼奴等が……。」

シズナ

「八幡……。」

八幡

「ごめん、帰って来て早々。こんな弱気じゃ騎士になれないな。」

シズナ

「そんな事ない。八幡、貴方は騎士である前に人間よ。人は誰でも弱いわ。騎士でも

ね。」

八幡

「シズナ……。」

〈夜〉

《道寺の屋敷／八幡の部屋》

シルヴァ

『八幡、久しぶりの我が家は良いわね。』

八幡

「そうだな。義父さんは俺達をからかっていたけど……。」

道寺

『死ぬ前にお前達の子供がみたいの？（ニヤニヤ）』

八幡、シズナ

『義父さん!?! / 道寺!?!』

シルヴァ

『道寺は道寺で心配してたんでしようね。』

八幡

「そう、だな……。」

シルヴァ

『どうしたの?』

八幡

「眠れない……。」

シルヴァ

『また“あの夢” 見るかもって思っているわね?』

八幡

「ああ……。」

コンコン

八幡

「?」

ガチャ

シズナ

「八幡。」

シルヴァ

『アラ? シズナ、こんな夜中にどうしたの?』

シズナ

「八幡、悪い夢を見るって聞いたから、これを作ったのよ。ドリームキャッチャー。」

八幡

「ドリームキャッチャー?」

シズナ

「うん。これで八幡の悪い夢を吸い取ってくれるの」

シルヴァ

『フフ、良かったわね八幡。』

八幡

「ありがとう。シズナ。」

〈悪夢〉

八幡

「はあはあはあ。」

???

「!!」

ズドオ!

八幡は悪夢の中で、剣を構え自分が殺される夢を見ていた。

《道寺の屋敷／八幡の部屋》

八幡

「ハッ！はあ、はあはあ．．．夢か．．．」
シルヴァ

『八幡！屋敷に邪気が出現したわ！』

八幡

「何!?!」

バン！

《道寺の屋敷／階段》

八幡

「ハッ！義父さん!?!」

道寺

「．．．．。」

八幡

「死んでる．．．．。」

シズナ

「キヤー!!八幡ー!!!」

八幡

「シズナ！」

《道寺の屋敷／シズナの部屋》

バン！

シズナ

「……（ブルブル）」

八幡

「シズナ!!!」

???

「……。」

ガシヤ！

八幡

「ヤメロー!!!」

ドス！

シズナ

「アツ・・・」

ドサツ!

八幡

「シズナ!」

フツ!

シズナ

「・・・」

八幡

「シズナ!シズナ!!」

シズナ

「・・・」

八幡

「シズナアアアア
!!!!!!」

〈朝〉

《道寺の屋敷／外墓前》

八幡

「……。」

シルヴァ

『八幡、あれは“ホラー食いの魔戒騎士”よ……。』

八幡

「ホラー食いの魔戒騎士……だと？」

シルヴァ

『奴のあの構え、そしてあの太刀筋は黄金騎士牙狼に酷似していたわ。』

八幡

「そうか……。」

シルヴァ

『これからどうするの？』

八幡

「強くなる。奴よりもっと、ホラー食いの魔戒騎士より強くなって、二人の仇を取る!!」

シルヴァ

『八幡……。』

八幡

「シルヴァ。悪いがその名は捨てる。俺の新しい名は・・・涼邑 零。」

朝食

〈朝〉

《涼邑屋敷／八幡の部屋》

八幡

「ん？朝か・・・チツ、またあの夢を見たな。ホラー食いの魔戒騎士、いずれお前を見つげ出し、俺がお前を必ず倒す。」

ガチャ！

京華

「はーちゃん見ーつけた！」

八幡

「ん？けーちゃん？」

京華

「さーちゃんに皆を起こしてきてって言われて、はーちゃんのお部屋探してたの。」

八幡

「それはお疲れ様、疲れたる？」

京華

「うん。はーちゃん抱っこして〜。(キラキラ)」

八幡

「はい……。(コンコン)」

ガチャ

八幡は京華を抱っこして部屋を出た。

羅号

『ク〜ン。(俺が起こす役なのに〜)』

《涼邑屋敷／居間》

ガチャ！

沙希

「あ、けーちゃん。八幡の部屋に着いたんだ。」

京華

「うん。」

八幡

「よく迷わずに俺の部屋まで来れたな。」

京華

「凄いでしょ。」

八幡

「確かに凄いな……。」

ガチャ！

戸塚

「あ、八幡、川崎さん達おはよう。」

八幡

「おう、おはよう戸塚。」

沙希

「おはよう戸塚。」

京華

「……はーちゃん。この人だあれ？」

八幡

「この人は戸塚 彩加。俺の友達だ。」

京華

「じゃあ、けーちゃんも挨拶する。初めまして川崎 京華です。けーちゃんって呼んでね。」

戸塚

「うん、よろしくねけーちゃん。」

ガチャ!

操／材木座

『おふあひよ〜。』

八幡

「おう、操と材木座。おはよう。」

京華

「?。」

八幡

「この女の方は義理の妹の涼邑 操。こっちは子デブ。」

材木座

「なに嘘教えてるー!」

京華

「ヒッ! (ビクッ!」

ゴゴン！

八幡、沙希

『けーちゃんを怖がさせるな！』

材木座

「は、はい……。。(理不尽だろ。)」シユウウウウウ！

八幡

「けーちゃんに自己紹介しな。」

材木座

「材木座 義輝だ。」

京華

「……子デブ？」

材木座

「子デブではないわー！」

ドゴン！

八幡

「怖がさせるなつての！」

材木座

「は、はい……。シユウウウウウ！」

八幡

「大志は……。帰ったのか？」

沙希

「そうだよ。もう一人の弟の世話しなきゃいけないからね。」

八幡

「成る程な……。めぐりは？」

沙希

「料理してるけど？」

八幡、シルヴァ

「『何ー!!／何ですつてー!!』」

全員

『!?!』

シルヴァ

『は、八幡！今すぐ逃げなさい！』

八幡

「言われなくても！」

めぐり

「あ、八君起きたんだ。」

八幡、シルヴァ

「『!?!?』」

八幡

「り〜んさ〜ん。(ニゴニゴ)！」

凜

「・・・ゴメナサイ。止められなかったの。」

めぐり

「はい、皆。私が腕によりをかけて作った朝食だよ。召し上がれ。」

ドン!

全員

「『!?!?』」

めぐりが置いた朝食はかなり酷い物体であり、全員言葉が出なかった・・・。

沙希

「何これ!?!?」

京華、操

「はーちゃん／＼八兄何あれ？（涙声）」

八幡

「胃が……。（ギリギリ!）」

戸塚、材木座

『……』

めぐり

「皆、遠慮しないで食べてね？」

シルヴァ

『ん？八幡……』

八幡

「ん？どうしたシルバ……。」

???

「……。」

八幡

「〃メメ〃か。」

屋敷に変わった仮面と服装を着ているメメと名乗る子供が八幡達の前に現れた。

京華

「はーちゃん、あの子誰？」

八幡

「俺の知り合いだよ。」

トコトコ

八幡

「シルヴァ。」

キィー！

メメが八幡に近付くと、八幡はシルヴァをメメの前に近付けた。

シルヴァ

『どうやら、銀牙騎士ゼロ、炎刃騎士ゼン、天弓騎士ガイ、魔戒法師沙希、操は番犬所に
来るようにという呼び出しよ。』

八幡

「そうか。分かったよ。」

京華

「あれ？あの子、いない？」

八幡

「まあ、一応今日の予定は決まったが……これどうしよう？」

呼

《通路》

ズルズル

戸塚

「ねえ、八幡。番犬所の呼び出しって何だろね？」

ズルズル

八幡

「さあな」

ズルズル

沙希

「魔戒騎士であるあんた達が呼ばれるのは分かるけど、魔戒法師の私と操を呼ぶなんてなんだろうね？」

ズルズル

八幡

「さあな。でも、録なもんじゃない事だけは確かだろ」

ズルズル

操

「材木座さん大丈夫かな？」

八幡

「…… // 生き残りジャンケン」に負けたこいつが悪い」

ズルズル

材木座

「…… (白目)」

〈回想〉

《涼邑屋敷／居間》

めぐりが作り上げた下手物料理をどう処理するか全員が悩んでいた。

全員

『……』

八幡

「どうする?」

戸塚

「今日番犬所に呼ばれてるし……」

沙希

「私も呼ばれているし……」

操

「八兄……」

材木座

「こ、ここうなれば!」

全員（材木座以外）

『?』

材木座

「ジャンケンだ」

全員（材木座以外）

『ジャンケン?』

材木座

「生き残りジャンケンだ。負けた者がこの化学兵器を食べるのだー!」

全員（材木座以外）

『成る程!!』

八幡

「あ、でも、女子組の参加は駄目だからな」

女子組（めぐり以外）

『良かった!』

めぐり

「さつきから本人目の前にして酷いよ。ねえ、シルヴァちゃん」

シルヴァ

『……』

めぐり

「わくん」

材木座

「でわ! 殺るぞ! 生き残り!」

戸塚

「ジャン!」

八幡

「ケン!」

3人

『ポオン!』

涼邑 零(八幡) パー

戸塚 彩加 パー

材木座 義輝 グー

八幡

「イヨッシャー!」

戸塚

「か、勝ったー!」

材木座

「あ〜……」 orz

〈回想終了〉

《通路》

ズルズル

戸塚

「材木座君、良くあの料理完食したよね……」

ズルズル

八幡

「昔、めぐりの料理食った時は川が見えたな……（遠い目）」

ズルズル

沙希、戸塚、操

『（三途の川渡り掛けたのー！）』

ズルズル

操

「八兄、戸塚さん、材木座さんを引きづってて重くない？」

ズルズル

八幡、戸塚

『重い／＼いよ』

ズルズル

八幡

「たくっ！この子デブ重いんだよ！ 洲崎 類（すぎき るい）「ちゃんが見たら泣くぞ

！」

ズルズル

戸塚

「あはは、そっくだよね」

ズルズル

八幡

「そっういや戸塚、 “尋海アリス（ひろみ アリス）” さんはまだ眠りから覚めてないのか？」

ズルズル

戸塚

「うん、まだ覚めていないんだ……」

ズルズル

八幡

「そっうか……」

シルヴァ

『八幡。そろそろ材木座を起こしてくれる？』

八幡

「ああ、材木座。起きろ」

材木座

「ああ、ううん……」

八幡

「あ、類ちゃんだ」

材木座

「類殿！何処にいる!？」

八幡

「起きたな」

戸塚

「効果靦面だね」

材木座

「あ、あれ？我は一体？」

八幡

「知らん方がいいぞ。あの下手物食った後なんだからな」

材木座

「？」

シルヴァ

『さ、開けるわよ?』

バカアアアアン!

八幡

「入るぞで」

シルヴァは、番犬所に繋がる壁の扉を開け、八幡達は番犬所に入った。

《東の番犬所》

八幡

「久しぶりに来たな……」

コダマ

「……」スツ

八幡

「……」

ジャキ!

ガシユ!

ブハアアアア!

戸塚

「・・・」

ガシユ!

ブハアアアア!

材木座

「・・・」

ジャキ!

ガシユ!

ブハアアアア!

八幡達は魔戒剣、魔戒弓を狼の口を開けている銅像に刺し、小さな剣が出現した。

パアアアア!

ケイル

『お久しぶりね、銀牙騎士ゼロ。涼邑 零』

ベル

『最近来ないから、落ちこぼれ魔戒騎士をからかってやったわ』

材木座

「それで、我々を呼んだ理由な何だ？」

戸塚

「チヨツ！材木座君!？」

ローズ

『構わん』

ケイル

『本来ならこれは涼邑 零だけにお問い合わせしたかったのですが、涼邑 零だけでは荷が重いのです』

ベル

『つまり弱いという事です』

操

「な、何ですって！もう一d」スツ

八幡

「気にするな操……」

操

「チツ！」

八幡

「無礼をお許し下さい。それで、俺達を呼んだのは此処かの管轄の尻拭いの役目ですか？」

ローズ

『……その通りだ』

八幡

「やつぱりな……リングだけならまだしも、また、この管轄の尻拭いか。それで、俺では荷が重い依頼は何ですか？」

ケイル

『ある人間の護衛です』

戸塚

「護衛?」

シルヴァ

『あり得ない依頼ね』

八幡

「まさかその人間……血に染まりしものですか?」

ベル

『その通りです。かつて涼邑 零貴方が苦勞して守りきり、血に染まりしものだった人

間を無くさせたのですからね』

八幡

「……成る程ね。俺じゃ荷が重いな。それで、その血に染まりしものの人間の名は？
いくらなんでもただの人間じゃ無さそうですが？」

ローズ

『その通り。ただの人間なら護衛の依頼などしない』

ケイル

『その血に染まりし者の人間の名は、雪ノ下 雪乃』

八幡

「雪ノ下？シルヴァ、確か雪ノ下って確か……」

シルヴァ

『優秀な魔戒騎士、魔戒法師の者達が集まっているこの管轄の上位クラスの名家よ』

八幡

「そんな名家の人間が何故自分のところ……そう言う事か」

ベル

『気付いたようですね』

八幡

「此処の管轄の魔戒騎士か魔戒法師のせいで血に染まりしものになったんですね」

ローズ

『その通りだ。だから“魔境カルマ” “伝説のホラーゼドム” “竜騎士” “リング”を討伐した貴方方に依頼したいのだ』

ケイル

『それで、この依頼受けますか？』

八幡

「俺が受けるメリットがないな」

ベル

『“お前が昔愛した女を生き返らせるではどうですか？”』

八幡、シルヴァ

「!？」

全員（八幡、シルヴァ、神官以外）

「?。」

沙希、操

『（八幡／兄が愛した女を生き返らせる？）』

シルヴァ

『八幡……』

八幡

「生き返らせる？シズナを？」

シズナ

『八幡』

八幡

「分かりました。その依頼、俺は受けます……ただし」

全員

『？』

八幡

「彼奴を生き返らせるのは無しだ」

ローズ

『何故だ？』

八幡

「彼奴を生き返らせる為には肉体に彼奴の魂が必要だろ？彼奴は、静に眠らせたいんだ」

シルヴァ

『フフツ、零らしいわね』

ケイル

『それで涼邑 零は受けるようですが、どうしますか？』

材木座

「チツ！友が受けるならば我も受けよう」

戸塚

「僕も受けます」

沙希

「私も受けよう」

操

「零兄が受けるなら私も受けるよ」

ベル

『決まりましたね。それでは全員五日後 “総武高校” に “転入” するようにお願いしますね』

ローズ

『期待しているぞ。特に銀牙騎士ゼロ。ユダマ3人の魔戒騎士に依頼を渡しておけ』

フツ！

3 神官達は、八幡たちの前から姿を消した。

コダマ

「……」スッ

パシッ!

八幡

「……」

八幡達は3通の赤い封筒を受け取った。

八幡

「沙希、操、お前らには材木座、戸塚のサポートしてほしいんだが」

沙希、操

『分かったよ／分かった』

《《通路》》

八幡は、材木座達と別れ依頼の場所に向かった。

シルヴァ

『八幡』

八幡

「・・・」

シルヴァ

『八幡！』

八幡

「!?何だ？」

シルヴァ

『メメがいるわ』

八幡

「何？」

メメ

『・・・』

八幡

「珍しいな。またメメが出るなんてな」

キィー！

シルヴァ

『“西の管轄”の神官が極秘に貴方を呼んでるわ』

八幡

「何!?あの『ガラム』が……会いたくねえが、仕方ない。東管轄の甘い飴でも買って行くかね」

シルヴァ

『そうね』

そう言うと、八幡は店に向かった。

西

《魔戒導》

シルヴァ

『それにしても、あの西の神官のガルムが呼ぶなんて何なのかしらね？』

八幡

「さあな、しかも極秘だと来た」

シルヴァ

『東の神官達には黙って出るなんて、しかも、この魔戒導は西の番犬所に一直線だしね』

八幡

「そろそろ着くな」

パアアアア！

《西の番犬所》

ガルム

『お、来たの』

八幡

「久しぶりだな。西の神官ガルム。お土産買って来たぞ」ガサツ！

ガルム

『お、甘いものかの？』

八幡

「当たり前だ」

ポイ！

パシツ！

ガルム

『ん？何じゃこれは？』

八幡

「どら焼。うまいぞ？」

ガルム

『そこまで言うなら・・・アム！』

八幡が西の番犬所に入ったら、髪が白銀の幼い女の子ガルムがいた。ガルムにどら焼を投げ渡した。

八幡

「上手いか？」

ガラム

『美味じゃ！』

八幡

「そうか」

シルヴァ

『それで、私達を極秘裏に呼んだわけは何かしら？ガラム様』

ガラム

『モグモグ。東の番犬所の神官共はどうじゃ？』

八幡

「得たいの知れん三人だった。ガードマンの奴もな」

ガラム

『そうか。何か言われたようじゃな』

八幡

「分かるか？」

ガラム

『主の事なら良く分かっておるつもりじゃ』

八幡

「俺の愛した女を生き返らせるなんて抜かしやがった」

ガラム

『人を生き返らせるなど禁忌にされておる。生き返らせても空っぽじゃ』

八幡

「悪いな。一瞬、揺らいじまったよ。彼奴は、シズナは望まないのにな……」

ガラム

『死んでも愛し続ける。健気よの』

八幡

「まあ、俺の事はいい。東の神官共は何なんだ？あの神官共、俺達、魔戒騎士、魔戒法師をかなり良く思つてなさそうだったか？」

ガラム

『知らん……があやつらは元は人間じゃったと言うが、余り良く分かっておらぬ』

八幡

「そうか……奴等が謀反を起こした場合は？」

ガラム

『始末しても構わん』

八幡

「分かった」

ガルム

『くれぐれも、東の管轄の人間達に悟られるなよ?』

八幡

「分かった。もういいか? 東の神官共に依頼を頼まれてる」

ガルム

『分かった。行ってよいぞ。また呼んだら甘いお菓子を頼むぞ?』

八幡

「分かった」

ペアアアア!

《西の番犬所前／通路》

八幡

「さて、今回の依頼は・・・」

カシヤ!

ボオ!

シルヴァ

『“魔獣ホラーアングレイ”女喰いのホラーね』

八幡

「そうか……」

シルヴァ

『ガラムと話して、少しは楽になれたかしら?』

八幡

「何の事だ?」

シルヴァ

『貴方と何れ程の付き合いだと思っているの?』

八幡

「そうだったな……そういや、破邪の剣が切れるな」

シルヴァ

『なら、久しぶりに“エマ・グスマン”の店に行きましょう?』

八幡

「そうだな」

《糸車店》

カランカラン！

女性

「フー！いらっしやい。今日は懐かしい客ね」

糸車店に入った八幡は、緑の髪の色でポニーテールでキセルタバコを吸っていた女性に歓迎された。

八幡

「お久しぶりです。エマ・グスマンさん」

エマ

「坊やが此処に来たのはホラー喰いの魔戒騎士の情報？それともアンタの“友”の情報？」

八幡

「全部の情報と、破邪の剣の補充をお願いします」

エマ

「分かったけど、ホラー喰いの魔戒騎士の情報はないよ。アンタの友だった奴の情報はあるけど、聞きたい？」

八幡

「はい、彼奴は『ベルナンド・ディオーン』は何処に？」

エマ

「奴は東の管轄にいるわ……」

八幡

「!?東に？」

エマ

「ええ、分かったのはそれだけ。管轄外だから場所までは分からないわ」

八幡

「そうですか……もう一ついいですか？」

エマ

「珍しいわね。坊やが追加なんて」

八幡

「雪ノ下家についての情報です。一応シルヴァからは優秀な魔戒騎士と魔戒法師が沢山いると聞いただけなんで……」

エマ

「雪ノ下家？ああ、昔は、坊やが生まれる前はかなりの権力を持っていた御家よ。今はもう弱体化しちやっただけだね」

八幡

「原因は、ホラー喰いの魔戒騎士ですか？」

エマ

「それもあるけど、まだ弱体化の原因が他にもあるわ」

八幡

「他にも原因が……」

エマ

「黄金騎士牙狼の弱体化。かつての強さが丸つきりないわ」

八幡

「一応東の神官達は、リングは東から西に簡単に移動したのは黄金騎士が原因だと言っていました」

エマ

「リングの移動を見逃したせいで『元老院』は、黄金の鎧を剥奪するはずだったんだけど、悪運が強いのかそれはされなかったわ……」

八幡

「原因は俺ですね……」

エマ

「その通りよ。まあ、坊やがリングを討伐し鎧剥奪は免れたけど、剥奪の変わりに黄金を剥がされ今は、『漆黒の牙狼』と言つてもいいわね」

八幡

「そうですか……」

エマ

「あ、そうそう、坊や、破邪の剣とこれ上げるわ……」

コト！

エマは、破邪の剣と糸車が付いている魔導具を置いた。

八幡

「これはエマさんの魔導具だったんじや？」

エマ

「似た物を作ったのよ。巨大ホラーの動きを封じるのは無理だけど、素体共の動きを封じるのは可能よ」

八幡

「ありがとうございます」

エマ

「どういたしました。東は何かあるのか分かったもんじやないから気を付けなさいよ？」

八幡

「はい」

エマ

「ベルナンドに会ったら・・・殺すの？」

八幡

「暗黒に落ちた騎士は始末しなくちゃいけませんから。あの時は引き分けでしたからね」

エマ

「そう、なら『八幡』約束して」

八幡

「約束？」

エマ

「ベルナンドとホラー喰いの魔戒騎士を伐つても・・・生きなさい」

八幡

「……」

エマ

「それだけを約束して……」

八幡

「生きますよ……それが俺に託していった人達の願いですからね」

エマ

「そう、ならこの西からアンタが生き続けていること願わせて貰うわね」

八幡

「はい」

シルヴァ

『意外ね。エマ、貴女魔戒騎士は嫌いじゃなかったかしら？』

エマ

「嫌いよ。でも、“坊や”は別よ」

シルヴァ

『そう』

八幡

「それじゃエマさん、また来ます．．．これ情報料です」

エマ

「待ってるわよ」

カランカラン！

バタン！

エマ

「あの子には生きててほしいわね。これから先も．．．」

暗黒

〈夕方〉

《美術館／館内の裏》

ガサゴソ

オーナー

「ふう、まだ沢山あるな・・・」

ガタ!

オーナー

「?こんな所にこんな箱あったかな?」

美術館のオーナーは、裏の絵画の整理をしていたら物音がし、見てみたら購入したか分からない謎の絵画の箱があった。

ゴソゴソ!

ガサツ!

オーナー

「おおーこれは美しい!」

に。オーナーは女性の絵が描かれている。その絵を見て囚われてしまった……ホラー

《東の管轄／通路》

八幡

「……今回のホラー、女喰いのアングレイか。苦手な相手だな」

シルヴァ

『あら？八幡の苦手なんてトマト以外あったのね』

八幡

「おいおい、もう一つ苦手なものがあるぞ、シルヴァ……」

シルヴァ

『え？』

八幡

「めぐりの手料理……イダダダ！」ギリギリ！

シルヴァ

『一応触れずにいたのに……』

八幡

「アイツ、昔以上にパワーアップしやがってるなんて……」ギリギリ!

シルヴァ

『まあ、久しぶりにエマに会って良かったわね』

八幡

「ああ……彼奴だけは、ベルナンドは俺が殺す。あの時俺が躊躇しなかったら、ルシアーノさんは!」

〈回想／過去〉

ベルナンド

「死ね!八幡!」

八幡

「グツ!此処までか……(シズナ……義父さん……ゴメン。仇取れなくて)」

ザシユ!

???

「グアアアアア!」

八幡

「え？ルシ、アーノさん？」

エマ

「ルシアーノオオオオ！」

ルシアーノ

「ぶ、無事かい、八幡君？」

八幡

「ルシアーノさん・・・腕が」

ルシアーノ

「構わないよ。君を助ける為なら、腕の一本くらい安い物だよ・・・グウ！」

ベルナンド

「余計な邪魔をしてくれたな・・・今度こそ、魔戒法師共々死ねええええ！」

エマ

「ルシアーノ！坊や！」

ギイイイイイン！

八幡

「・・・」

ギチギチ!

ベルナンド

「ほう、一度諦めたと言うのに、何故再び剣を握る?」

八幡

「守りし者だからだ……」

ベルナンド

「何?」

八幡

「俺は魔戒騎士であり、守りし者だ!」

ベルナンド

「人を守って何の価値がある!」

八幡

「師匠は良く俺に言っていた……人を信じろ。例え何千何万回この気持ち裏切られても、信じろって……だから、俺はこの身が朽ち果てるまで人間を信じろ!」

ベルナンド

「ならば……信じろって言うお前の陰我……」

八幡

「人を信じられなくなった貴様の陰我！」

八幡、ベルナンド

『俺が断ち斬る！』

ジャキ！

ジャキ！

キュカン！

キュカン！

ガシヤーン！

銀牙騎士ゼロ

「銀牙騎士ゼロ！」

暗黒騎士ゼクス

「暗黒騎士ゼクス！」

〈回想終了〉

《通路》

シルヴァ

『あの死闘の後、ベルナンドは逃走して八幡は、生死の境をさま迷いながら何とか回復したわね……』

八幡

「ああ、ベルナンドとは何れ会う……その時は」

シルヴァ

『斬るのね……』

八幡

「ああ、あの時、俺の迷いがあつたせいでルシアーノさんの腕を斬られてしまった……だから今度は、俺の手で斬る！」

シルヴァ

『……まあ、八幡の覚悟は分かったけど、今はアングレイ討伐よ』

八幡

「分かつてる」

《美術館／館内》

八幡

「え〜と？」

シルヴァ

『八幡、まだ準備中みたいよ』

八幡

「イヤ、準備中なら彼処に人がいる筈ないだろ？一応聞いてみるよ」

女の子

「.....」

八幡

「あn.....」

女の子

「来ましたわああああ！（ブシヤアアアア！）／／／／／／／

八幡

「ウオ！スゲー量の鼻血だな!?ホ、ホラーかシルヴァ？」

シルヴァ

『い、いえ違うわ。人間よ.....多分、後で魔導火で調べなさい.....』

八幡

「あ、ああ……変わった人間もいるんだな」

シルヴァ

『そうね……あら？八幡、あの絵を見て。』

八幡

「ん？へへあの絵は……懐かしいな」

シルヴァ

『そうね。修行の旅をしながら立ち寄った所に似ているわね』

八幡

「この絵、欲しいな……」

シルヴァ

『仕事を終えた後にしましょ？』

八幡

「そうだな。まずはこの子の介護だね」

絵

《美術館／館内》

女の子

「ん？ん？あれ？私確か・・・」

八幡

「起きたか？」

女の子

「あ、目が腐ってる」

八幡

「目が覚めたならどいてくれないか？」

女の子

「え？あ、ゴ、ゴメンなさい」

八幡

「まあ、男の膝枕何て良くないがな・・・」

女の子

「いや、そんな事ないよ……所で君はこの美術館に何しに来たの？」

八幡

「仕事」

女の子

「仕事？私と同じ年に見えるような？」

八幡

「まあ、俺の事はいいだろ……その前に」

カシヤ

ポオ！

女の子

「？」

シーン

カシヤン

八幡

「（反応なしか）悪かったな。ここまだオープンしてない筈だろ。何で此処に？」

女の子

「私、此処のオーナーと知り合いなんだ。だから自分が作った絵を見に来たんだよ」

八幡

「ほう……何で鼻血があんなに出たんだ？」

女の子

「えつとくそ、それは……(アセアセ)」

男

「海老名さん？」

海老名

「あ、オーナー」

オーナー

「こちらの方は？」

海老名

「そういえば名前言ってなかつたね。私は、海老名 姫菜。君の名前は？」

八幡

「涼邑 零だ」

海老名

「涼邑 零？変わった名前だね」

オーナー

「何しに此処に？」

八幡

「あくイヤ、この絵が欲しくつてねオーナーを探そうとしたんだけど……」

海老名

「あ、あの絵は……（モジモジ）」

オーナー

「まあ、展示会は明日からなんですけど……まあ、いいですよ。この絵ですね。では、お帰り下さい。」

八幡

「ん？まだこの絵以外もつと素敵な絵がありそうだな……見せてくれませんか？」

オーナー

「……いいでしょう」

海老名

「あ、あの！涼邑君！」

八幡

「？」

海老名

「この絵私が作ったんだよ！」

八幡

「へくともいい絵だな」

海老名

「そ、そうかな？ 私が作った絵は変なのって言われてたんだ。初めて私が作った絵を褒めてくれたの君だけなんだよ」

八幡

「そうか……まあ、頑張っている絵描きになりな」

八幡は、オーナーと美術館の裏に向かった。

《美術館／裏》

オーナー

「此処に貴方が気に入る絵があるとは思えませんかね」

八幡

「その箱は？」

オーナー

「ああ、これは、*“ただの箱”*ですよ」

タン！

八幡

「そのの……*“中身は？”*」

オーナー

「空です。元々*“空っぽ”*でしたよ」

八幡

「そのの中身は、*“アンタが喰われたのか？それともアンタが喰っちゃまったのか？”*」

オーナー

「まさかきさきま……」

カシヤ！

ボオ！

ギギギ！

カシヤン！

八幡

「見つけた」

オーナー

「魔戒騎士か？」

シルヴァ

『八幡、そいつが“アングレイ”よ』

アングレイ

「デエイ！」

ビュン！

バシ！

八幡

「ハッ！」

ドガッ！

アングレイ

「グハア！」

八幡

「舐めるな」

八幡に殴ろうとしたが反撃をくらった。

アングレイ

「チイ！」

ビュン!

八幡

「逃がすかよ!」

ブン!

《美術館／館内》

ギ!

海老名

「あれ? 取れない?」

館内に残っていた海老名が八幡が頼んだ月の絵を取り出そうとしたが取れなくなっていた。

《美術館／??》

八幡

「見失った……いや、違うな」

シルヴァ

『奴の結界内よ』

八幡は、アングレイを追っていたが不気味な絵が飾られていた。

八幡

「アングレイって確か別名……」

シルヴァ

『トラップよ』

ブウン！

不気味な絵から赤布の人間が現れた。

八幡

「……来な」

シルヴァ

『八幡、あの子が危険よ』

八幡

「分かってる。エマさんから貰ったコイツを奴に括り付けてる」

ギュルルル！

赤布！

『!?』

赤布

『!?』

シルヴァ

『あら？何時の間に？』

八幡

「此処に入った時に……コイツらと遊んでる場合じゃないから……な！」

ピン！

ドバア！

八幡は、エマから貰った糸車の銃を使い赤布達の動きを封じ赤布達を倒した。

シルヴァ

『このエマから貰った魔導具の糸車役に立つわね』

八幡

「ああ、急ぐぞ！」

ギョルルル！

シルヴァ

『奴はかなり焦っているようね？』

八幡

「そのようだ」

《美術館／館内》

海老名

「何で取れないの？」

オーナー

「海老名さん……」

海老名

「あの、オーナー絵が取れなくて……あれ？涼君は？」

オーナー

「あの男は、変質者だ。今、警察を呼んだからもう安心だ」

海老名

「え、彼はそんな人じゃ」

オーナー

「まあ、いいじゃないかハラが減ったゆっくり。飯でも喰いながら話をして……」

ピン!

オーナー

「!?これは糸!」

八幡

「悪いなお前の“トラップ”と遊んでる暇は無かったから直ぐに出て来ちまったよ」

オーナー

「貴様……」

海老名

「涼邑君?」

オーナー

「やはり、魔戒騎士だな?」

海老名

「魔戒、騎士?」

八幡

「さつきもそう言つたら?」

オーナー?

『キシヤア!』

海老名

「ヒッ！」

八幡

「そいつは、もうお前の知ってるオーナーじゃない。そいつは人の皮を被った魔獣ホラーだ」

ギョルルル！

アングレイ

「！」

ブーン！

ズドオン！

八幡は、糸車の銃を使いアングレイを海老名から離しアングレイを床に叩きつけた。

海老名

「オーナー！」

八幡

「さっきも言ったが彼奴はもうお前が知っているオーナーじゃない」

海老名

「え？」

アングレイ

「おのれ魔戒騎士！」バシヤ！

八幡

「ハア！」

ズバア！

アングレイ

「チイ！」バシヤ！バシヤ！

ザン！ザン！ザン！

八幡

「おいおい、お前の溶解液で俺が買おうとしている絵を当てようとすんなよ！」

バツ！

ザシユ！

アングレイ

「グハア！チイ！」

ドペア！

アングレイ

『キシヤア！』

海老名

「ヒッ！オーナーなの？」

ドボン！

ビュン！ビュン！ビュン！

八幡

「……………」

ズポ！

八幡は、溶解液を吐くアングレイを魔戒剣で斬りさきアングレイは、オーナーの仮の姿を破り捨て地面に潜りアングレイは、姿を消した。

海老名

「終わったの？」

八幡

「いや、まだだ……………」

カシヤ！

ボオ！

八幡

「……………」

ユラ!

八幡

「……フウ!」

ボワ!

ドクン!ドクン!ドクン!

八幡は、魔導火を付け一回り周り火は揺れる事は無かったがドクロの絵の所で揺れ八幡は、魔導火の火をドクロの絵に飛ばしドクロの絵から心音が鳴り響いた。

海老名

「な、何?」

八幡

「羅号」

羅号

『バウバウ!』

海老名

「わ!」

八幡

「海老名を守っててくれ」

羅号

『バウ!』

八幡

「……」

魔獣アングレイ

『ギイイイイ』

海老名

「な、何あれ?」

八幡

「あれは、ホラー……人の邪心、陰我から生まれた魔獣だ」

海老名

「魔獣?」

八幡

「その魔獣ホラーを倒せるのは……」

ジャキ!

キュカン!

パアアアア!

銀牙騎士ゼロ

「俺達魔戒騎士だけだ！」

海老名

「銀の狼？（あれ？何処かで見たような？）」

銀牙騎士ゼロ

「銀牙騎士ゼロ！魔獣アングレイ貴様の陰我俺が断ち斬る！」

魔獣アングレイ

『ギイイイイ！』

バシユ！

銀牙騎士ゼロ

「ハア！」

ザシユ！

魔獣アングレイ

『ギユアアアア！』

八幡は、鎧を召還し銀牙騎士ゼロになり魔獣アングレイが片手を飛ばしたが片手を絶狼剣で斬った。

銀牙騎士ゼロ

「終わりだ……」

ドペア！

アングレイ

『キシヤアア！』

シルヴァ

『逃げる気ね』

アングレイ

『キシヤアアアアア！』

ガキイ！

ドン！

銀牙騎士ゼロ

「ハア！」

ズバアアアア！

アングレイ

『ギシヤアアアアア！』

ドペアアアアア！

ゼロは、魔獣アングレイを斬ろうとしたが魔獣アングレイは、また殻を破りアングレ

イとなりゼロに突っ込んで来たがゼロは、二本の絶狼剣を合体させ銀牙銀狼剣にさせ床を思いつきり踏み込みゼロは、アングレイを真つ二つに斬りアングレイは消滅した。

ビシヤア!

羅号

『アオーン!』

ブアアアア!

パシヤン!

バアアアア!

八幡

「羅号、バリヤ貼りご苦労様」

羅号

『クウン』

海老名

「終わったの?」

八幡

「終わったぞ」

海老名

「あ、あのこの子さつき何したの？」

八幡

「バリヤ貼らせたホラーの返り血をあびた人間は斬るのが掟だからだから羅号を君にガードをさせたんだ」

海老名

「そ、そうなんだ……」フラツ！

八幡

「無理もないな……今は寝ておきな」

海老名

「ウン……（スウスウ）」

八幡

「……」

シルヴァ

『八幡、貴方魔戒騎士の事を話すなんて何を考えているの？』

八幡

「絵を買うんだからその礼金でもあるし。巻き込んだ迷惑料だから教えただけ……」

シルヴァ

『余程あの絵が気に入ったのね』

八幡

「まあな・・・この子の家に送るから凜さんに連絡しといてシルヴァ」

シルヴァ

『分かったわ』

八幡は、気を失った海老名を家まで送った。

送り

〈朝〉

《海老名家／姫菜の部屋》

海老名

「う、うくん。ふわあくよく寝た。あれ？ここ私の部屋？どうやって？」

八幡

『今は寝ておきな』

海老名

「涼邑君が送ってくれたのかな？」

《海老名家／居間》

海老名

「お母さんおはよう」

海老名母、八幡

『おはよう姫菜／海老名（モグモグ）』

海老名

「あ、涼邑君おはよ……」

八幡

「?どうした?（モグモグ）」

海老名

「す、涼邑君?何でいるの!?!」

八幡

「お前の母親に無理矢理泊まらせられたんだよ（モグモグ）」

海老名母

「泊まらせちゃった♪」

海老名

「お母さん……ゴメンね。涼邑君」

八幡

「まあ、気にするな（モグモグ）」

海老名母

「涼邑君には、娘の死相を回避させてもらったからね」

海老名

「死相ってお母さんまたタロット占いしてたの？」

八幡

「占い？（ゴツクン）」

海老名母

「これ見たら、君は私が何者か分かると思うよ？」

海老名母は、タロットカードらしき物を見せた。

八幡

「あんた、魔戒法師か？」

海老名母

「正確に言えば、魔戒導師だよ」

シルヴァ

『魔戒導師？まだ存在していたのね』

八幡

「魔戒導師？シルヴァ何だその魔戒導師って」

シルヴァ

『零が知らないのも無理ないわね。魔戒導師とは主に占星術を得意とする術使いで、占

い師のような役割を果たしていたの、余り戦闘向きではないからもう存在していないと
思っていたのよ』

八幡

「へ〜じやあ今じやあ、魔戒導師は珍しい法師何だな」

シルヴァ

『そう言う事よ』

海老名

「あ、あの〜」

八幡、シルヴァ

『ん?』

海老名

「そのペンダントらしき物、喋ってない?」

八幡、シルヴァ

『あ、いっけね。海老名の事忘れてた／いけな、海老名の事忘れてたわ』

八幡

「まあ、紹介しよう。俺の頼りになる相棒のシルヴァだ」

シルヴァ

『はあ、初めましてシルヴァよ』

八幡

「俺達魔戒騎士は、この魔導具シルヴァのような物を持っている。持っていない奴もいるがな」

海老名

「へ、へ〜」

八幡

「それで、貴女が言っていた娘の死相を回避させたって、娘を占っていたんですか?」

海老名母

「そうよ。姫菜を占ったら死相が出ちゃったの」

海老名

「え?」

シルヴァ

『ようするに昨日その娘、死ぬ筈だったのね』

海老名

「そうなの。でも、この娘の死相は消えたのよ。しかもこれで二度目よ」

八幡

「二度目？」

海老名母

「私達は、前は西の管轄にいたのよ」

八幡

「ほう、まだあの頃は魔戒騎士成り立てで彼奴がホラーの返り血をあびてた時だな」

シルヴァ

『そうね。それしかないわね』

海老名母

「そう騎士の札が出たよ。娘は、銀の鎧の男に助けられた。それが貴方よ銀牙騎士ゼロ」

八幡

「何故、俺の称号を知っているんですか？」

海老名母

「騎士の札に名前が浮かぶのよね」

フワ

札

『銀牙騎士ゼロ』

海老名

「ね♪」

八幡

「この札何でもありだな」

海老名母

「すごいでしょ？（エツヘン！）」

八幡

「恐れ入りました」

海老名母

「恐れ入ったのは此方よ。娘を二度助けしてくれたんだからね。あ、そうだ貴方にこれ上げる」

八幡

「これは？」

海老名母

「この『東の管轄の地図』よ」

八幡

「いや、必要n・・・」

ボ！ボ！ボ！ボ！

海老名母

「それはただの地図じゃないわよ」

海老名母から渡された地図が光だした。

八幡

「これって？」

海老名母

「この地図はゲートの光よ。まあ、建物内も光っているけどどうかしら？」

八幡

「ありがとうございます……と言いたいんですが」

海老名母

「ゲートが異常に多すぎると言いたいのね」

八幡

「ええ、多すぎます」

海老名母

「原因は、この東の管轄の魔戒騎士、魔戒法師のせいなの。ゲート封印適当にしちゃってね」

八幡

「上下関係ですか？」

海老名母

「そうよ魔戒騎士は魔戒法師を見下しているのは当たり前だけど、原因は雪ノ下家なのよ」

八幡

「雪ノ下家が？」

海老名母

「まあ、雪ノ下家は元老院と縁があるのよ。番犬所にも依頼が可能よ」

八幡

「あの依頼か……」

海老名母

「雪ノ下家の魔戒騎士、魔戒法師は無名の魔戒騎士、魔戒法師を見下しているのよ。そのせいでゲートの封印がおろそかになり、ゲート封印のサボりがでちゃったりしちゃっているのよ」

八幡

「くだらん事でゲート封印をサボるとは……情けないな」

海老名母

「確かにそうね。西の管轄は、上下関係何か関係なく平等に助け合っているって聞いているわ。貴方が魔境ホラーカルマ、リングを魔戒法師と協力して討伐したと聞いて、考えを改めた人達が増えたと聞いているわ」

八幡

「大した事はしてませんよ」

海老名母

「そんな事ないわ。つて、姫菜そろそろ学校の時間よ?」

海老名

「え? あ、いけない話に夢中すぎたく(ガツガツ!」

八幡

「えくと? 貴女の名前は?」

海老名母

「あ、そういえば名乗っていなかったわね。私は海老名 姫菜の母 // 海老名 イズナ //
よ。娘と共によろしくね」

八幡

「はあ、あ、海老名学校まで送るぞ?」

海老名、イズナ

『え？ // // / まあ！』

八幡

「泊まらせてくれた礼と絵の礼だから送るだけだが？」

海老名

「あ、そうなんだ・・・（シユン）」

イズナ

「あら？ 姫菜が作った絵気に入っているのね」

八幡

「ええ、昔、魔戒騎士になる前ですが、修行の旅をしていた時にこの絵に似た風景を見たのでつい。懐かしかったので俺はこの絵好きです」

イズナ

「フフ、そっか良かったわね姫菜♪」

海老名

「うん」

イズナ

「さ、早く着替えなさい」

海老名

「ハ～イ」

ガチャ!

バタン!

《海老名家／姫菜の部屋》

海老名

「・・・」

八幡

『俺はこの絵好きです』

海老名

「うふふ、初めて褒めてくれた・・・でも、涼邑君に私の部屋見せられないよね」

そう、海老名の部屋にはBL本だらけであった・・・。

海老名

「絶対引かれるしそれに・・・私の絵を初めて私の絵を褒めてくれた人なんだよな〜つて、涼邑君待ってるの忘れてた〜」 //

《海老名家／玄関前》

八幡

「朝飯ごちそうまさでした」

イズナ

「こちらこそ。娘がお世話になっちゃって」

海老名

「お待たせ涼邑君」

八幡

「おう」

イズナ

「それじゃあ涼邑君、姫菜の事お願いね」

八幡

「はい。イズナさん地図ありがとうございます。それじゃあ海老名、行こう」

海老名

「うん。お母さんいつてきます」

イズナ

「いつてらっしやい」

《海老名家／居間》

イズナ

「さて、涼邑君にはちよつと悪いけど涼邑君の占いしちやお♪」

ゴソゴソ

イズナ

「！これって……」

札

『涼邑 零。金と銀の称号を持つ者』

イズナ

「銀は銀牙騎士ゼロ。金は……まさか涼邑 零君は二つの称号を持つ子なのかしら？
昔そんな魔戒騎士いたかも分からないのに、今世紀初めての魔戒騎士になるのかしら
？」

《通路》

海老名

「涼邑君ありがとね」

八幡

「気にするな。この絵と朝飯の礼だ。それに海老名が行く学校の近くにゲートがある。ついでに封印してから帰る」

海老名

「ねえ、涼邑君。ホラーとの戦いは何時まで続くの？」

八幡

「永遠に続く。終わりなんてない。人間に邪心がある限り、俺のいや、俺達魔戒騎士の戦いは永遠に終わらない」

海老名

「そう、なんだ……」

八幡

「まあ、この話はもう終りだ。人前で魔戒騎士、魔戒法師の事を話す訳にはいかないからな」

海老名

「うん、そうだね。ねえ、最後にいいかな？」

八幡

「構わないぞ」

海老名

「どうして昔、私がホラーに襲われたのに思い出せないの？」

八幡

「イズナさんが忘れさせただけだ」

海老名

「お母さんが？」

八幡

「ホラーに襲われた夢なんて見せない為に、イズナさんが忘れさせたんだって聞いた。いい母親だな」

海老名

「涼邑君のお母さんはどんな人なの？」

八幡

「いない……」

海老名

「え？」

八幡

「俺は、両親の顔を知らない。俺は、孤児で義父に魔戒騎士として育てられたんだ……」

海老名

「あ、ゴメンね嫌なこと聞いて」

八幡

「いや、気にしてないもう昔の話だ……」

海老名

「会おうと思わないの？」

八幡

「さあな……もうすぐ学校に着くぞ」

海老名

「あ、そう、だね」

《学校／学校前》

八幡

「へく総武高校？」

シルヴァ

『これは……偶然かしらね？』

八幡

「イズナさんの仕業か？」

海老名

「どうかしたの？」

八幡

「いや、何でもない。じゃあ俺はこれで絵の料金払うよ」

海老名

「う、うん、またね。涼邑君……ねえ、君の名前と騎士の名前教えてくれる？」

八幡

「……俺は、涼邑 零。騎士の称号の名は銀牙騎士ゼロ。じゃあな海老名、案外すぐに会えるかもな」

海老名

「え？それどういう意味……いない？」

《総武高校の近く／オブジェ前》

シルヴァ

『よかつたの？ちゃんと言わなくて？』

八幡

「ああ、どうせ四日後会えるだろ？」

ザシユ！

ザン！

八幡

「たくつ！ゲート大すぎだ」

シルヴァ

『そうね。この地図、材木座か戸塚に上げとかない？』

八幡

「そうだな。ゲートは、シルヴァがいるからいいけど、彼奴等はシルヴァのような魔導具を持ってないからな。イズナさんには申し訳ないけど地図はあの二人にやって俺は“魔導ベル”で十分だ」

シルヴァ

『まあ、よく考えてみたら八幡は未成年だからイズナが気を聞かせて昔使っていた魔導ベルを貰ってよかったわね。大昔は、その魔導ベルは魔導火のライターのようにホラーの正体を見破っていたのよ』

八幡

「じゃあこのベルはライターの先輩って事だな」

シルヴァ

『そうよ』

八幡

「あ、そうだ『花罪』」

八幡の魔法衣から白い妖精が現れた。

花罪

『?』

八幡

「川崎達をサイゼに集合させてくれないか?呼んだら金平糖3粒でどうだ?」

花罪

『♪』

シルヴァ

『OK見たいね』

八幡

「じゃあ頼んだよ〜」

ビューン！

花罪は、川崎達を呼びに飛んで行った。

八幡

「さて、シルヴァ悪いけど凜さん呼んどいて」

シルヴァ

『いいけど何故？』

八幡

「一応川崎達を西の管轄に行こうと思ってね」

シルヴァ

『西へ？あく制服ね』

八幡

「そ、流石に制服は、エマさん達に任せられるけど魔法衣は、凜さんに任せるしかないからね」

シルヴァ

『そうね。八幡の服はエマに作ってもらったけど魔法衣に改造したのは凜だからね』

八幡

「ま、俺達は先にサイズ向かおうぜ？」

シルヴァ

『そうね。ゲート封印しながらね』

八幡

「ハ〜イ」

制服

〈昼〉

《サイゼ／店内》

材木座

「八幡、遅いな……」

沙紀

「ゲート封印しながら来るそうだよ」

パサツ

「ボ！ボ！ボ！ボ！」

戸塚

「え？こんなにゲート封印したの？」

材木座

「凄まじいスピードだな……」

沙紀は、東の管轄の地図を出し光っていた箇所には銀の色が付き始めた。八幡がゲート封印したと言う印であった。

カランカラン

店員1

「い、いらつしやいませくな、何名様でしょうか？」

八幡

「待ち合わせです」 シュウウウウウウ！

戸塚

「あ、零コツチ……」

八幡

「よお〜お前ら〜」 シュウウウウウウ！

沙紀

「あ、あんたその頭のタンコブどうしたの？」

八幡

「このタンコブは、俺が悪いだけです……」

材木座、沙紀、戸塚

『何故敬語？／＼どうして敬語なの？』

凜

「沙紀ちゃん、皆ヤツホー」

沙紀

「あ、凜さん」

凜

「聞いてよ！沙紀ちゃん八君ったらね。私に連絡せずに無断で泊まったのよ」

材木座、戸塚、沙紀

『（あ、連絡しなかったから拳骨されたんだな）』

沙紀

「それで八・・・零は私達を何で呼んだの？それとこのゲート封印の異常な速さは？」

八幡

「あ、ああ。それはな、まずはゲート封印が速いのはこの地図のお陰だ」シユウウウウウ

！

パサツ

材木座

「これは？この東の管轄の地図のようだが？」

八幡

「何処にゲートがあるか分かる地図だよ」

戸塚

「え？」

凜

「零君、この地図何処で手に入れたの？」

八幡

「海老名 イズナ。魔戒導師に貰った」

凜

「この東の管轄に魔戒導師がいたの？」

シルヴァ

『私も驚いたわ』

八幡

「こら、シルヴァ」

沙紀

「魔戒導師って、詳しく知らないけど確か占い師ですよ？」

凜

「そうよ。でも、もういないって聞いたけど、まさか零君が泊まった家が魔戒導師の家だなんて驚いたわね」

八幡

「凜さんを驚かせるなんて魔戒導師って凄いな」
凜

「私でも、占いまでは無理なのよ」

八幡

「へへ意外だな」

材木座

「で、零が我等を呼んだ訳を聞こうか？」

八幡

「あ、そうだった。これから飯食って西の管轄に行くぞ？」

沙紀

「西の管轄に？何で？」

八幡

「西の管轄には腕のいい制服作りの人がいる。俺のこのコートもその人に作ってもらったんだ」

戸塚

「へへそうなんだ」

八幡

「あ、材木座。お前にこの地図やるよ」

材木座

「え？何故？」

八幡

「ゲート探しに俺はシルヴァがいるが、お前にはないだろ？だからお前にやるよ」

材木座

「では、ありがたく頂く・・・戸塚は良いのか？」

八幡

「戸塚には改造サングラスがあるだろ？」

材木座

「あ、そうだったな」

沙紀

「戸塚のサングラスがどうしたの？」

八幡

「戸塚が持っているサングラスはゲートが何処にあるのか分かるサングラスなんだよ。だから地図は必要ないのさ」

沙紀

「成る程ね。だから戸塚に地図は必要ないのか」

八幡

「そういえば、操は？」

沙紀

「操ちゃんならお手洗いに行ってる」

操

「八兄〜」

八幡

「お、操が来たな」

操

「八兄待ってたよ〜昨日、何で帰って来なかったんだよ〜」

八幡

「まあ、それは食べながら話してやるからな〜」ナデナデ

操

「しようがないな〜」 //

シルヴァ

『零、トマトも食べなさいね？』

八幡

「勘弁してくれ（ズーン）」

八幡達は、食事をしながら操に昨日の事とこれからの事を話した。

《西の管轄／糸車店前》

材木座

「変な名m……」

ギユルルル！

ギユ！

材木座の首筋に糸が巻き付いた。

エマ

「あら、私とルシアーノの店の悪口言ってるのは誰かしら？」

材木座

「く、首が……」パタパタ

エマ

「まったく、あんたら確か、坊やと共に戦ってくれた。天弓騎士ガイの称号者の戸塚 彩

加、魔戒法師の川崎 沙紀、そして坊やの義妹、涼邑 操だつたわね」

「どうして私達の名前を？ 貴女は一体？」

エマ

「私の名は、エマ・グスマン。糸使いの魔戒法師よ。アンタ達の事は色々、噂で耳にしたのよ。坊やと共に戦ってくれてありがとう」

操

「坊や？」

エマ

「私は、涼邑 零の本名を預からせてもらっているわ。坊やと言うのは八幡の事よ」

戸塚

「八幡の事を坊や呼びするなんて」

エマ

「フフ、坊やとは修行時代からの付き合いだね。弟のように可愛がってたのよ」

操

「へ〜」

エマ

「ところで坊やは？」

沙紀

「この西の管轄の神官に会いに行きました」

エマ

「ガルムに？」

沙紀

「詳しくは聞いてはいませんがただ西の使いが来て……」

〈回想／糸車店に来る前〉

シルヴァ

『八幡、メメよ』

八幡

「ガルムの呼び出しかメメ？」

メメ

『……（コクリ）』

八幡

「分かった。お前ら先に行つててくれないか？地図渡しとく」

沙紀

「わ、分かったよ」

シルヴァ

『八幡、あの事〃がばれたんじゃ？』

八幡

「さあな、ガルムの奴は、他の神官とは違つて感が鋭いからな．．．」

〈回想終了〉

沙紀

「その後、八幡と別れました」

エマ

「シルヴァの言つていた〃あの事〃って何かしら？」

沙紀

「分かりません。戸塚アンタは？」

戸塚

「いえ、分かりませんがそろそろ材木座君、解放してください」

材木座

「……(気絶)」

エマ

「あ、忘れてた。炎刃騎士ゼンの称号者。確か、子デブ
ブツ！」

エマは材木座の首に巻き付かれた糸を解いた。

材木座

「こ、子デブではn……」

エマ

「あ?」ゴゴゴゴ!

材木座

「こ、子デブです」ガクガクブルブル

エマ

「よろしい(ニッコリ)」

沙紀、戸塚、操

『怖！』

エマ

「あ、そういえば凜は？」

沙紀

「八幡が『凜さん悪いけど高級ワイン10樽お願いします』って八幡が言っつて、凜さんをお使いに行かせました」

エマ

「ウォー！今夜は豪華よ〜」

操

「八兄の知り合いは変わった人が多いな」

《西の管轄／番犬所》

八幡

「何の用だ。ガラム？」

ガラム

『主、私に何か隠しておらぬか？』

八幡

「隠す？ 例えば？」

ガラム

『主の鎧は、かなりの邪気がたまっておる。『ボルシティ』で『伝説のホラーゼドム』を討伐した後、鎧の浄化をしておらぬと言うのに、何故、無事なのじゃ？』

八幡

「さあな」

ガラム

『もし、万が一、主が『心滅』になったら、いや、なったと同時に主の命は消えるぞ？』

八幡

「守りし者として人の為に消えるのなら俺にとっては本望だ」

ガラム

『主という奴は……じゃが他の魔戒騎士はどうでもよいが、銀牙騎士ゼロ。主は私のお気に入りじゃから死ぬでないぞ？』

八幡

「……善処する。あ、今回の土産、バームクーヘンだ（ポイツ！）」

パシ!

ガラム

『アム、美味じゃな!』

八幡

「じゃあな」

ガラム

『ウム』

《西の管轄／番犬所前》

八幡

「たくつ、気付いてたかやつぱり」

シルヴァ

『感が鋭いよりやつぱり邪気の大きさに気付かれるわよ』

八幡

「だよな」

???

「おや、そこにいる黒いコートを着ている君はひよつとしたら涼邑 零君かい？」

八幡

「え？ルシアーノさん何で此処に！」

八幡は黒髪の男ルシアーノ・グスマンが声を掛けてきた。

ルシアーノ

「妻に買い出しを頼まれてね。八幡君は何故西に？」

八幡

「ええ、実は……」

八幡は、ルシアーノに東の管轄の事を話した。

ルシアーノ

「成る程。つまりその血にそまりしものを護衛の為、総武高校の制服が必要という事かい？」

八幡

「ええ、流石に俺達、魔戒騎士、魔戒法師は裏ならとにかく表の格好はした事がなくて、だから服の事ならルシアーノさん達なら分かると思つて、相談しに来たんです」

ルシアーノ

「フフ、成る程ね。分かった。これから家に行くつもりだったのかい？」

八幡

「あ、はい。俺の仲間が糸車店に行ってます」

ルシアーノ

「その仲間は、八幡の名を名乗っても大丈夫な人達なのかい？」

八幡

「はい」

ルシアーノ

「そうか……じゃあ、行こうか？」

八幡

「はい、あ、持ちます」

ルシアーノ

「ありがとう」

カシヤン

八幡

「ルシアーノさん……」

八幡は、ルシアーノの片腕を見て嘆いた。

ルシアーノ

「君が思い悩む必要はないよ。この腕は君を守れたんだからいいんだよ」

八幡

「はい……」

ルシアーノ

「じゃあ、行こうか？」

八幡

「はい」

八幡とルシアーノは、糸車店に向かった。

《糸車店／店内》

カランカラン！

ルシアーノ

「ただいま。エマ」

エマ

「おかえりなさい。ルシアーノ。坊やと一緒にだったのね」

八幡

「どうもエマさん」

ルシアーノ

「偶然会ったんだ」

操

「あ、八兄」

八幡

「よ、操……材木座何で気を失つ……この店の悪口言ったのか？」

操

「う、うん」

八幡

「やつぱり……」

シルヴァ

『馬鹿な奴』

エマ

「坊や、事情は川崎ちゃんから聞いてはいたけど制服作らなくても坊やの魔法衣を変装衣に改造してあげるわ。もちろん川崎ちゃん達のもね」

ルシアーノ

「夏の時分は、魔法衣を夏用に変えさせおけば大丈夫だよ」

八幡

「ありがとうございます。で、おいくらになりますかね？」

エマ

「1億9千万」

全員

『ブッ!』

沙紀

「な、な、何でそんなに高いんですか!？」

エマ

「その子デブの侮辱罪と魔法衣の改造費でその金額よ」

ジトツ!

材木座

「グウ」

カランカラン

凜

「ごめんなさい遅れちゃって」

八幡

「あ、凜さん」

凜

「どうしたの？」

八幡

「1億9千万おろしてきていいですか？」

凜

「・・・エマ」

エマ

「あら、坊や達の魔法衣の改造費と侮辱罪そ・れ・に口止め料（ボソツ

凜

「チツ、分かったわよ。八君お金持ってきて」

八幡

「は〜い。あ、後、エマさん。魔導ベルあります？」

エマ

「あるけどどうして？魔導火ライターがあるじゃない？」

ルシアーノ

「あ、ひよつとして八幡君達未成年でライターなんて使ったら色々問題だから魔導ベルが必要という事かい？」

八幡

「ええ、そうなんですよ学校とやらは未成年がライターダメだそうなので」

ルシアアーン

「成る程ね。分かった。八幡君の初の学校だ魔導ベルは私のオゴリだ好きな色があれば持つていきなさい」

ルシアアーンは、魔導ベルの箱を取り出した。

八幡

「あ、俺貰ったんでコイツらに上げてください」

エマ

「あら、誰に貰ったの？」

八幡

「魔戒導師の海老名 イズナさんに貰いました」

エマ

「魔戒導師・・・東の管轄にいたのね」

操

「私、銀色にしよう」

沙紀

「私は、水色。大志とあの子とけーちゃんはお揃いでいいかな?」

戸塚

「僕は青かな?」

材木座

「我は赤だ」

ルシアーノ

「それじゃあ君達の魔法衣預かるよ。4日まで間に合わせるよ」

八幡

「お願いします」

パサツ

八幡達は、魔法衣をルシアーノ達に預けた。

凜

「八君、悪いけど1億9千万おろしてきて。材木座君は、注文したワイン持ってきて罰として一人で持って来なさい(ニコツ)ゴゴゴゴ!」

材木座

「は、はい」ガクガクブルブル

凜

「戸塚君は4日間八幡君達は休むって伝えてくれない？」

戸塚

「あ、はい」

ルシアーン

「八幡君、君達暫く“ラインシティ”に行くといいよ」

八幡

「ラインシティ？」

エマ

「あの街はホラーのいない街よ。魔法衣のない魔戒騎士、魔戒法師なんて格好悪いでしょ？」

八幡

「へくじやお金届けた後にその街に向かいます」

凜

「かなり遠いから魔戒導使って行きなさい」

八幡

「はい。じゃあ沙紀、操金運ぶの手伝って」

沙紀、操

『分かった』

カランカラン

八幡達は、糸車店を後にした。

凜

「1億9千万なんて大金よくない金額じゃないの？」

エマ

「そうかしら？いつまでも坊やの母親だって黙っている貴女が悪いんじゃないかしら？」

凜

「う」グサ

エマ

「まあ、話したくても話せないでしょうね。坊やの父があんなにクズいえゴミ違うわねえ」と

凜

「あんなミジンコ以下な奴の事言わないで」

エマ

「そうよねあんなミジンコ以下な奴は幼い坊やを捨てた奴なんだからね」

ルシアーノ

「娘が良かったただの八幡君に魔戒法師の才能は無いだけで捨てた最低野郎だからね」

凜

「はあ、そうなのよね。私の初めてお腹を痛めた我が子を捨てた後、女の子が生まれ今度
はかなり可愛がってたのよ。ま、あんな娘は一切可愛がらなかったけどね」

エマ

「あの頃のアンタ坊やを初めて見せた時はかなり可愛いでしょって自慢ばかりしてた
しね」

ルシアーノ

「でもまさか導師様の養子になっていた時は驚いたよ」

エマ

「アホ毛を見た時に凜の子がなんでも思ったわよ」

ルシアーノ

「まあ、導師様に事情を聞いた時……」

導師

『ホラーの森に捨てられておったのを俺が拾ったんだよ』

ルシアーノ

「つて聞いて凜はそんな事する訳無いと直ぐに凜に連絡しようとしたんだけど」

エマ

「流石にやめといたわ魔戒騎士の道に行った坊やは流石に凜は邪魔だと思ったからね」

ルシアーノ

「でも、導師様とシズナちゃんが殺され八幡君は涼邑　零と名乗った時は、仕方ないって思ったよ」

エマ

「まあ、その後坊やは、血の滲む努力し魔戒騎士初の最年少の魔戒騎士が誕生した。まあ、一人立ちできるまで私達と導師と一緒に旅していたけど坊やの友の裏切り。血にそまりしものを守りながらの戦いで初めて守りし者とは何なのか分かり始めたのよね」

凜

「私は、その友の名は知らないけどその友はルシアーノの片腕を……」

ルシアーノ

「まあ、彼は導師様の忘れ形見と君の子だからね悔いはないよ」

凜

「血にそまりしものを守りながらの戦いはあの子だけでも厳しいと思ひエマは私に連絡して私とあの子を再会させた……まあ、黙っていたけどね」

エマ

「その後、坊やは、血にそまりしものを消して普通の人に戻してその次に西の管轄に魔境ホラーカルマが現れ魔戒法師の川崎 沙紀、大志と出会いカルマを共に討伐した。その次にボルシテイで天弓騎士ガイ、炎刃騎士ゼンと出会い二人の魔戒法師と出会い伝説のホラーゼドムを倒した。その次は、龍騎士との戦いは、坊やは負傷した状態で戸塚 彩加が心滅したのを坊やが何とか戻した。確かその後尋海アリスを戸塚 彩加が助け出した。まあ、彼女は、助け出した後眠ったままだけどね。」

凜

「次にリングとの戦いは傘使いの男と女魔戒剣士の二人との出会いリングを倒した。あの子は、人を守ると改めて決めた。あの子にとってはいい出会いでもありよくない出会いでもあったわね」

エマ

「そうね」

ルシアアーン

「まあ、八幡君は、強くなってる……が彼は何かを隠しているような気がするが、ま

あ、僕達も隠しているからね」

凜

「そうね」

カランカラン

八幡

「ただいま〜」

操

「お、重い……」

沙紀

「ほらほら、頑張りな」

凜

「お帰りなさい八君」

八幡

「はい、エマさん1億9千万お渡ししますね」

エマ

「ありがとう坊や」

カランカラン

戸塚

「凜さん東の神官達の報告終わりました」

凜

「ご苦勞様」

カランカラン

材木座

「じゅ、10樽運び終えました（ゼエゼエ）」

凜

「ご苦勞様」

エマ

「さて、坊や達直ぐにラインシティに行きなさい。たった4日の休日なんだからね」

八幡

「分かりました。ほら、行くぞ?」

操

「え、少し休んでから行くこうよ?」

沙紀

「私は、けーちゃん達と一緒に行くよ」

八幡

「じゃあけーちゃんと弟は眠りの札を貼っておけよ？」

沙紀

「分かってる」

八幡

「じゃあ凜さんいつてきます」

凜

「いつてらっしやい。休日楽しんでね」

八幡達は、糸車店を出てラインシティに向かった。

エマ

「いいの？一緒に行かなくて？」

凜

「何言ってるの魔法衣の改造なんて二人だけじゃきついでしょ？私も手伝うわ
ルシアアノ」

「まあ、確かにありがとう凜」

エマ

「まあ、ラインシティにトラブルに合うなんてないでしょ」

凜

「そうね」

ラインシティで八幡達は、トラブルに巻き込まれた。『阿号』と呼ばれる魔導具が人間を滅ぼそうとしていた。八幡達が何とか阻止しようとしたが阿号の強さに苦戦し阿号の体がテゴルに乗っ取られ戦えるのは銀牙騎士ゼロのみであった。

《ラインシティ／テゴルの結界内》

銀牙騎士ゼロ

「はあ、はあ、はあ」

テゴル

『ここまでだ諦めろ銀牙騎士』

銀牙騎士ゼロ

「冗談じゃないお前を放っておくかよ！シルヴァアアアア」を使うぞ！

シルヴァア

『それしかないわね……』

銀牙騎士ゼロ

「ウオオオオオ！」

カアアアアア！

テゴル

『な、何だ！この光は！』

銀牙騎士ゼロは光輝き出した。

銀牙騎士ゼロ？

「特と見やがれテゴル！この姿は銀牙騎士ゼロ・ゴールドバージョンだ！」

テゴル

『な、何!?!』

銀牙騎士ゼロG

「魔獣テゴル貴様の陰我俺が断ち斬る！」

テゴル

『お、おのr!?!』

ドス！

テゴルの中から大剣が現れた。

銀牙騎士ゼロG

「阿号……ウオオオオオ！」

ザアン！

テゴル

『バ、バカナアアアアア！』

ドオオオオオオ！

バアアアアン！

銀牙騎士ゼロGは、阿号の大剣を使いテゴルを思いつき斬りつけテゴルを倒した。

八幡

「はあ、はあ、はあ。最後は阿号に助けられたなシルヴァ」

シルヴァ

『そうね』

この事件は、元老院や番犬所からも知らせられたが八幡のゴールドバージョンは知らせが来なかった。

ラインシテイを納める“伝説の魔戒法師リユメ”に気に入られた八幡達は何か困った事があつたら相談に乗るといいリユメはシルヴァに蓋を付けた。

〈4日後〉

《西の管轄／糸車店》

八幡

「あゝとんでもない休日になったな」

戸塚

「そうだね」

材木座

「八幡、一体どうやってテゴルを倒したのだ？」

八幡

「さっきも言つたら？内緒だその内話すよ」

沙紀

「約束だよ？」

八幡

「はいはい。エマさん改造した魔法衣は？」

エマ

「ちゃんと出来たわ」

凜

「はい、八君」

バサ!

八幡達は、新しくなった魔法衣を着た。

八幡

「余り変わっていないような?」

ルシアーノ

「八幡君魔法衣を一回りさせてみて」

八幡

「?」

バサア

パツ!

八幡

「わ! 服が変わった! 魔法衣も」

ルシアーノ

「どう? 凄いだろ?」

八幡

「はい！」

八幡が魔法衣を一回りさせたら服が変わり魔法衣もその服に合わせて変わった。

ルシアーノ

「気に入ったかい？」

八幡

「はい！ありがとうございます」

ルシアーノ

「じゃあ、八幡君皆学校生活頑張りなよ？」

八幡達

『はい！』

転校

〈朝〉

《総武高校／1年D組》

女子生徒

「ねえねえ、姫菜聞いた？」

海老名

「え？何が優美子？」

海老名 姫菜の友人三浦 優美子が話し掛けた。

三浦

「今日、転校生がくるんだって！」

海老名

「転校生？珍しいね」

三浦

「そうなんよ。しかも男子3人、女子2人だって」

海老名

「へえ」

三浦

「へえって興味なさそうにするし」

海老名

「興味ないよ」

三浦

「姫菜も少しは興味持つし……あ、でも、確か3人中一人の男子は確か目が腐ってるって聞いたような……」

海老名

「目が腐ってる?」

八幡

『……俺は、涼邑 零。騎士の称号の名は銀牙騎士ゼロ。じゃあな海老名、案外すぐに会えるかもな』

海老名

「まさか……ね」

キーン！キーン！カーン！カーン！

ガラッ！

先生

「お前ら席に着け。ホームルーム始めるぞ」

三浦

「あ、ヤバ！じゃあ姫菜。また後で」

バタバタ

先生

「お前らもう聞いてると思うが転校生がいる。男子一人、女子二人だ」

女子生徒1

「え〜どんなひとかな？格好いいかな？」

男子生徒1

「可愛い娘かな？」

海老名

「まさか・・・ね」

先生

「お前から静かにしろ！それじゃ入って来てくれ」

ガラッ！

先生に言われ女子二人と一人の男子が入って来た。

海老名

「え？」

先生

「自己紹介してくれないか？先ずは女子から」

沙紀

「私は、川崎 沙紀。初めての学校生活なのでよろしくお願いします」

パチパチ

男子生徒1

「あの娘可愛いな」

男子生徒2

「特にスタイルがいい」

操

「私は、涼邑 操です。私も初めての学校生活ですのでよろしくお願いします」

パチパチ

女子生徒1

「あの娘可愛いね。笑っているところか」

女子生徒2

「うんうん」

先生

「最後は、男子だ」

八幡

「涼邑 零。涼邑 操の義理の兄だ。義妹共によろしく」

ガタツ！

海老名

「す、涼邑君!？」

八幡

「ん？あ、海老名久しぶりだな」

先生

「ん？何だ。海老名と知り合いかなら涼邑兄は海老名の隣だな。じゃあ、質問タイムは後にしろよくホームルームは終了だ」

ホームルーム終わりと同時に八幡達は、質問攻めにあつた。

〈昼休み〉

《総武高校／1年D組》

八幡

「あく質問攻めは疲れたよ」

操

「私も疲れたよ。零兄よ」

沙紀

「私も疲れたよ」

八幡

「材木座はどうでもいいが戸塚は大丈夫かな？」

操

「まあ、確かに戸塚さん女顔だから……男子に告白されてたりして」

八幡

「十分あり得るな」

沙紀

「否定出来ないわね」

ピイン

八幡

「ん？」

カチャ

シルヴァ

『ふはあく全く蓋なんて付けないでよね。息がつまりそうよ』

八幡

「しようがないだろ。お前人前で喋るから、リユメ様”が蓋を付けてくれたんだぞ?”」

沙紀

「確かにシルヴァが喋っている所なんて誰かに聞かれたら騒ぎになっちゃうんだからね！今は私が結界貼ってアンタの声は誰にも聞こえてないんだから」

シルヴァ

『……』

八幡

「まあ、早く飯でも食うかな」

ズドオオオオン！

八幡は上着から机と同じくくらいの大きな重箱を取り出した。

操

「ど、どっから出したの。その重箱!?!」

八幡

「魔法衣から」

沙紀

「見えないからって魔法衣から出さないでよ」

八幡

「すまんすまん」

沙紀

「でも凜さん、こんなデカイ重箱何処で手に入れたんだろ？」

八幡

「手作りだ」

沙紀、操

『手作り!?!』

八幡

「俺は一応注意しようとしたんだけど……」

〈転校前〉

《涼邑邸／凜の作業場》

トンテンカン!

凜

「八君待っててね♪今からおっきな重箱作って上げるからね♪」

八幡

「いや、あの、そんなデカイ重箱必要ないんですけど・・・」

凜

「!? (ガーン!)」

八幡

「あ、ヤベ」

凜

「死のう・・・」

八幡

「ワー! ワー! ワー! 首吊ろうとしないで下さい! 分かりました! 分かりました! デカイ重箱作って下さい!」

ピタッ!

凜

「そうよね。八君よく食べるからおっきな重箱作って上げるからね♪美味しいお料理作るからね♪」

八幡

「は、はい……」

《総武高校／1年D組》

八幡

「てな、事があつたんだよ……」

シルヴァ

『確か前は、手首を切ろうとしたり。その前は、毒を飲もうとかしてたわね』

沙紀、操

『え〜』

八幡

「はあく凍さんには困つたもんだな」

ガラツ！

材木座

「はっはっ！はっ！はっ！待たせたな八m……プギヤ！」ゴシャヤ！

材木座の顔面に弁当箱の蓋が当たった。

八幡

「人前でその名で呼ぶなっていったろ？」ゴ！ゴ！ゴ！ゴ！ゴ！

バキイ！

材木座

「ひゅ、ひゅびばひえん」

戸塚

「あ、零待たせてゴメンね……って材木座君どうしたの？」

八幡

「俺が殴った」

戸塚

「や、やり過ぎだよ？」

八幡

「フン。まあ、弁当食ってけよ凜さんが作ったからな」

操

「相変わらず零兄は厳しいね」

八幡

「当たり前だ」

沙紀

「さ、紙皿出したから好きなもの取って食べな」

操

「は〜い」

生徒全員

『(運動会?)』

沙紀、操、材木座、戸塚

『モクモグ．．．!?ウマア!』

操

「美味すぎ!」

沙紀

「口の中溶けそう!」

戸塚

「美味しすぎて涙が．．．(ポロポロ)」

材木座

「零いつもこんな美味しい料理を食べているのか!？」

八幡

「まあな」

シルヴァ

『八幡、この学校ホラーがいるわよ？』

八幡

「そうか、なら夜まで待つぞお前ら？」

材木座

「フ、承知」

沙紀

「腕が鳴るよ」

操

「今日は零兄と一緒にだよ？」

戸塚

「僕の弓の速打ちで打ち抜く」

シルヴァ

『八幡、メメよ』

メメ

『・・・』

スツ!

八幡

「ん? 指令かありがとメメ」

ナデナデ

メメ

『♪』

カシヤ!

ボオ!

八幡

「今回の俺の相手はゲートホラーか」

シルヴァ

『油断しなければ早く休めるわね』

スツ!

材木座

「おっ? 感謝するぞ」

メメ

『……』

ケリ!

材木座

「アタ!」

八幡

「お前メメに嫌われてるな……俺と材木座に依頼が来たなら戸塚は、学校の警護だな」

戸塚

「分かった」

銃

〈夜〉

《総武高校／1年E組教室》

男子生徒

「忘れ物取りに行つて遅くなっちゃった」

ガラッ！

《総武高校／階段前》

ガタッ！

男子生徒

「!?な、何だ？」

女教師

「あら？ 貴方何故いるのかしら？」

男子生徒

「!?な、何だ遠山先生か、驚かさないでくださいよ」

遠山先生

「貴方は確か熊山君どうしているのかしら？」

熊山

「実は、その、忘れ物しちゃって」

遠山先生

「そう、確か貴方余り成績良くなかったわね」

熊山

「え、あ、はい、すいません・・・」

遠山先生

「まあ、君見たいな成績の悪い子は・・・」

チリーン

遠山先生

「？」

熊山

「鈴の音？」

ギギギ

ギギギ

???

「2体か・・・」

遠山先生?

「熊山君貴方同族だったの!？」

熊山?

「遠山先生もでしたか。それにしても今の鈴の音は？」

???

「僕が鳴らしたんだよ」

熊山?、遠山先生?

『!』

熊山?

「君は？」

遠山先生?

「確か貴方は今日転校してきたの戸塚 彩加君だっけ？」

戸塚

「そういう君達は “陰我ホラー” だね？」

遠山先生？

「という事は貴方魔戒騎士？」

戸塚

「そうだよ。まあ、君達がこの学校にどうしているのなんてどうでもいいけど君達を討滅させてもらうよ？」

ジャキ！

陰我ホラー（熊山）

『その弓、天弓騎士ガイの称号者か？』

陰我ホラー（遠山先生）

『確か銀牙騎士の戦友だったわね』

戸塚

「そうだよ。まあ、その銀牙騎士は別の所にいるけどね」

陰我ホラー（熊山）

『なら、お前を倒し銀牙騎士のいる場に向かうか』

戸塚

「甘く見ない方がいいよ・・・僕達、魔戒騎士を・・・ね！」

ビッシュウ！

陰我ホラー（遠山先生）、陰我ホラー（熊山）
『チツ！』

戸塚は、陰我ホラーに矢をわざと外すように放った。
戸塚

「今のは……挨拶変りだよ」

陰我ホラー（遠山先生）

「舐めるな！」

ドパア！

陰我ホラー

『ギシヤアア！』

バサア！

陰我ホラー（熊山）

「魔戒騎士なんて俺達が倒してやるよ！」

ドパア！

陰我ホラー（遠山）

『ギシヤアア！』

ジャララララ！

戸塚

「〃翼の陰我ホラー〃と〃チェーンの陰我ホラー〃か……来い！」

《総武高校／屋上》

男

「……」

《総武高校／外》

戸塚

「ハア！」

ドシュ！

チェーン陰我ホラー

『チイ！』

ジャラララ！

翼陰我ホラー

『コノ！』

バサ！

《総武高校／外》

男

「あれが魔戒騎士涼邑 零と組んでる魔戒騎士か……未熟だな」

《総武高校／外》

憑依ホラー

『キシヤア』

《総武高校／屋上》

男

「憑依体とはいえ気付かないとはな」

ガシヤ

男

「アイツだったら気付いただろう」

ギョロ

「男が屋上で戸塚と陰我ホラーの戦いを見ていたが憑依ホラーの存在に気付かずに呆れていた。男がスナイパーライフルを構えたがスコープの先が目玉に変わった。

ドオン!

ズドオ!

憑依ホラー

『グワ!?!』

ドバアン!

戸塚

「な!?!憑依ホラー!?!」

翼陰我ホラー

『チツ、まだ仲間がい』

ドオン!

ズドオ

翼陰我ホラー

『グハ!?!』

男

「アイツと仲間になった覚えはない……」

《総武高校／外》

戸塚

「あの人は魔戒法師?でも銃を使う魔戒法師なんて……」

チエーン陰我ホラー

『隙あり!』

ジャラララ!

戸塚

「クッ!」

ガキッ!

チエーン陰我ホラーは鎖を余所見をしている戸塚に当てようとしたが戸塚は魔戒弓を盾にしたが弓をチエーンで絡められうまく離せられなかった。

ギチギチ!

戸塚

「しまった!」

チエーン陰我ホラー

『フン!』

ブン!

戸塚

「うわ!」

ドサツ!

チエーン陰我ホラー

『そらよ!』

ブン!

ドオン!

バキイン!

戸塚

「うわ!」

チエーン陰我ホラー

『ウオ!?!』

男?

「……」

戸塚

「助けて、くれたの……?」

男は、魔戒弓に絡められたチェーンをスナイパーライフルでチェーンを打ち抜いた。

翼陰我ホラー

『チィ!あの魔戒法師目障りだ先ずは奴から!』

バサ!

ドオン!

翼陰我ホラー

『グハア!?!』

男

「失せろ……」

ズドドドドン!

翼陰我ホラー

『ギャアアアア!?!』

ドバア！

戸塚

「陰我ホラーを倒した？」

チエーン陰我ホラー

『チイ！』

戸塚

「僕もやらないと」

キュカン！キュカン！

ガシアアアアン！

天弓騎士ガイ

「天弓騎士ガイ！」

チエーン陰我ホラー

『しまった』

天弓騎士ガイ

「ハア！」

ビシユ！

ドス！

チエーン陰我ホラー

『グハア．．．クソオ』

ドバア!

バアアアアン!

戸塚

「はあ、はあ、はあ．．．」

戸塚は、鎧を召喚し弓を素早く引いて矢を放ちチエーン陰我ホラーを倒した。

ザ!

男

「．．．」

戸塚

「(いつの間に僕の所に．．．)君は、一体．．．」

ジャキ!

戸塚

「!?!」

男は戸塚に銃を向けた。

男

「何故お前のような奴にアイツが名を教えたのかわからんな……」

戸塚

「アイツ？」

スッ

男

「まあいい、涼邑 零に伝えろ何れ会おうとな」

ザ!

戸塚

「待って君は……零の知り合いなの？」

男

「ああ……じゃあな」

バツ!

男は戸塚の前から消えた。

〈同時刻〉

《街／裏町》

ズドオオオオン!

炎刃騎士ゼン

「グハア!?!」

沙紀

「材木座!?!」

黒い鎧

「弱いなお前……」

炎刃騎士ゼン

「き、貴様何者だ……」

黒い鎧

「暗黒騎士ゼクス……涼邑 零、いや、八幡に伝える俺はこの管轄にいるとな……」

沙紀

「アンタ何で八幡の名前知ってんの!?!」

暗黒騎士ゼクス

「俺と奴は元同期だ」

沙紀

「何ですって!?!」

暗黒騎士ゼクス

「でわな……」

バツ！

暗黒騎士ゼクスは材木座達の前から姿を消した。

バアアアアン！

材木座

「暗黒騎士ゼクス……八幡の同期だと……」

銀と漆黒

《街／ビルの屋上》

八幡

「たく、誰だあの魔戒騎士は．．．」

操

「さあ．．．」

八幡と操は依頼の場に来ていたが．．．

〈街／八幡のいるビルの隣〉

ドカ!

魔戒騎士

「グワ!?!」

ゲートホラー

『ギシアー!』

見知らぬ魔戒騎士に横取りされていたがゲートホラーにボコボコにされていた。

《街／八幡のいるビルの屋上》

八幡

「人の依頼を横取りするなんて……しかもゲートホラーにボコボコにされるとは」

操

「はく完全体になっていないホラーにボコボコにされる魔戒騎士なんて初めて見たよ零兄」

八幡

「俺もだ」

ピイン

カチ

シルヴァ

『私も初めて見たわ』

操

「零兄どうする？」

八幡

「まあ、高みの見物でもしとこう」

ガサ

八幡

「クリームパン食う？」

操

「うん、食べる♪」

八幡はポケットから菓子パンを出した。

シルヴァ

『フフ、仲がいいわね♪』

《街／魔戒騎士のいるビルの屋上》

魔戒騎士

「ク、クソ!?!」

キュカン!

カアアアアア!

ガシアアアア!

牙狼？

「黄金騎士牙狼！」

ゲートホラー

『フン！何が黄金騎士だその黒さは漆黒ではないか』

漆黒牙狼

「だ、黙れ！」

《街／八幡のいるビルの屋上》

操

「嘘!?牙狼!?でも、何だかおかしいよ確か牙狼は黄金の筈だったんじゃない? (ブツ」

八幡

「フン、あれが『漆黒牙狼』か (モグモグ」

シルヴァ

『エマの情報通りね』

操

「え?どういう事?」

八幡

「エマさんいわくかつて俺が討伐したホラーリングの口車に乗ってしまったせいで黄金を剥がされたって話だ．．．．．実際見たが何とも情けない姿だ」

シルヴァ

『そうね黄金騎士も地に落ちたわね』

八幡

「構えは似ているが．．．．．ハズレか」

操

「零兄？」

シルヴァ

『．．．．．』

八幡

「シルヴァ、アイツ弱すぎるな」

シルヴァ

『そうね鎧召喚したのにそれでもホラーを討伐出来ないなんて．．．．．』

操

「零兄あの人ヤバイよ」

シルヴァ

『そうね時間が無いわね』

八幡

「・・・チツ、行くぞ」

バツ！

操

「了解」

バツ！

《街／魔戒騎士のいるビル屋上》

漆黒牙狼

「グハア!?」

ゲートホラー

『とどめだ漆黒牙狼!』

ビシユ!

ザクツ!

ゲートホラー

『グー!』

ザ!

ゲートホラーの腕に小さな剣が刺さった。

八幡

「……」

ゲートホラー

『破邪の剣……魔戒騎士か』

ザ!

操

「と、着地成功♪」

八幡

「お前さつさと鎧解除しろ」

漆黒牙狼

「そ、その必要は」

操

「ほいっと」

ガン！

バアアアアン！

魔戒騎士

「な、何を!？」

操は腰にある三角形の紋章を筆で突き鎧を強制解除された。

操

「アンタ零兄の邪魔なの」

魔戒騎士

「な!?!僕は……」

操

「『黄金騎士牙狼』って言いたいんだろうけどあんな情けない戦いを見せられてアンタに従えと?」

魔戒騎士

「ぐ……」

操

「フン」

八幡

「話は終わったか？」

操

「終わったよ」

八幡

「じゃあゲートホラー今度は俺が相手だ」

ゲートホラー

『腐り目の魔戒騎士だと……き、貴様まさか!?!』

八幡

「……」

キュカン!

カアアアア!

ガシアアア!

銀牙騎士ゼロ

「銀牙騎士ゼロ貴様らホラーの陰我俺が……」

ビュン

ザン!

銀牙騎士ゼロ

「断ち斬る！」

ゲートホラー

「グハア!？」

ドバア!

バアアアアン!

八幡は鎧を召喚して素早くゲートホラーを斬り倒した。

八幡

「行くぞ」

操

「ハ―イ」

魔戒騎士

「ま、待ってくれ！」

八幡

「？」

魔戒騎士

「君達俺の元に来る気はないかい？」

八幡

「ない」アツサリ

操

「私もない」アツサリ

魔戒騎士

「な、何故!？」

八幡

「弱い奴の下に付く気はない」

操

「私も……」

???

『俺様も』

魔戒騎士

「ザルバッ！」

シルヴァ

『魔導輪ザルバ。アンタともあろう物が何でこんな奴に仕えてんのよ』

ザルバ

『フン、たまたまコイツが牙狼剣を抜いちまっただけさ。俺様はコイツに仕えてねえし

『契約』もしてねえよ』

シルヴァ

『やっぱりね』

八幡

「だよ……（ゾクツ）」

ビュシユン!

八幡

「操! 危ない!」

操

「え?」

ガツ!

ドカア!

八幡達がいる場所に何かが飛んできて操に当たりそうだったが八幡が操を掴み何とか回避した。

八幡

「操、怪我は無いようだな」

操

「う、うん大丈夫だよ」

八幡

「よかった・・・」

???

「ホオ、俺の薙刀を避けるとはな・・・」

スタ!

八幡達の前に白髪の男が現れた。

ズポ

???

「俺の薙刀を避けたのは貴様が初めてだ」

八幡

「誰だ貴様?」

ナイト

「俺の名は“ナイト”」

銀VS黒

《街／ビルの屋上》

ナイト

「俺の名は『ナイト』」

八幡

「ナイト……お前まさか」

ナイト

「フン、お前は他の魔戒騎士、魔戒法師とは違うようだな会っただけで俺が何なのか分かったようだな」

八幡

「ああ、お前……『闇に落ちた魔戒騎士』だな」

ナイト

「ククク、その通りだ銀牙騎士ゼロ」

操

「この男零兄の鎧の名前何で知っているの？」

八幡

「どうやら高みの見物していたのは俺達だけじゃなかったようだな」

ナイト

「ほう、気付いていたか」

八幡

「まあな」

ナイト

「まあいい……俺と戦え銀牙騎士」

八幡

「……いいだろ」

操

「れ、零兄!？」

八幡

「お前はそいつのお守りしてろ」

操

「え?」

魔戒騎士

「うう……」

八幡に言われて誰のお守りかと思っただらザルバを持つ魔戒騎士が気を失っていた。

操

「避けられなかったんだ……」

ザルバ

『その通りだ』

操

「人の事言えないけど訓練してるの？」

ザルバ

『サボっている』

操

「零兄は毎日訓練してるよ（ハッ）」

ザルバ

『大違いだな』

操

「そだねっ」

ナイト

「では、殺るとしよう」

コツコツ

八幡

「ああ……」

コツコツ

八幡とナイトは○を描きながら歩いた。

八幡

「俺はアンタを見た事があるぜ……」

コツコツ

ナイト

「そうか、俺はない……」

コツコツ

八幡

「まあ、無理ないか俺は知り合いの写真からアンタを見た事があるだけだからな」

コツコツ

ナイト

「ほう、そうなのか……」

コツコツ

八幡

「ああ、それとお前に聞きたい事がある。『アデレード・ハーデン』っていう女を知っているか？」

コツコツ

ナイト

「アデレード・ハーデン？ああ、知っている」

コツコツ

八幡

「何？」

コツコツ

ナイト

「アイツは……」

コツコツ

ナイト

「俺が……」

コツコツ

ナイト

「殺した(ニイ)」

コツコツ

八幡

「お前が……アデレードさんを……」

コツコツ

八幡

「自分を愛した女を殺したのか」

コツコツ

ナイト

「そうだ。俺は力を得る為に俺の障害になる物はこの手で殺すだけだ」

コツコツ

八幡

「貴様……(ギン)」

コツコツ

八幡

「アイツが何れ程お前をしたっていたのか分からないのか？」

コツコツ

ナイト

「フツ、知らんな」

フツ!

バキイ!

ナイト

「ガフツ!」

八幡

「.....」

八幡は、素早くナイトの場所まで移動しナイトを殴つてナイトは仰向きに倒れた。

操

「れ、零兄.....」

ザルバ

『速い.....』

八幡

「立て!この程度じゃ終わらんぞ!」

ナイト

「少し油断したな」

バツ！

ザ！

ナイトは直ぐに立ち上がり薙刀を持った。

ブオン！

八幡

「チィー！」

ゴドン！

ズズン！

ザン！

ナイトは薙刀を八幡の頭上に降り下ろしたが八幡は魔戒剣でガードしたが地面がめり込むほどに重かった。

八幡

「グウウ！（何て重い・・・）」

操

「零兄何でよけなかったの？」

ザルバ

『お嬢ちゃんアイツは避けなかったんじゃなく避けられなかったんだぜ』

操

「え? どういう事?」

ザルバ

『さっきの斬れる音がしたろそこを見て見な』

操

「え? げえ?!」

操はザルバに言われて斬れる音がした場を見たら壁には斬撃があり操は驚いた。

操

「も、もし零兄が防がなかったら……」

ザン!

操

『ギャアアアア!』

操

「……(ゾクツ)」

ザルバ

『あの男はそれが分かっていたようだな避けたらお嬢ちゃん死んでたぜ』

ナイト

「ほう、防御を選んだか……イヤ、選ばなければ後ろの奴等が死んでいたな」
ギチギチ！

八幡

「あの魔戒騎士はどうでもいいが義妹がいたんでね……」
ギチギチ！

ナイト

「そう……」

ドガア！

八幡

「ガフツ！」

ナイト

「か！」

ナイトは、八幡の横腹に蹴りを当てた。

ズザア！

八幡

「チィ！（ツウ）」

ナイト

「まだまだつづくぞ！」

ブオン！

八幡

「クッ！」

ガキガキガキガキィ！

操

「嘘!? 零とスピードが互角なんて!？」

ザルバ

『スゲエ斬撃だな・・・お嬢ちゃん結界貼れるか?』

操

「なめないでよ私これでも“結界師”だよ」

ザルバ

『ほう』

操

「零兄！結界貼るよ！」

八幡

「分かった！」

操

「ハア！」

カア！

ナイト

「グッ！」

《操の結界内》

ナイトと八幡は変わった場所にいた。

ナイト

「何だココは？」

八幡

「此処は『結界師』操の結界内だココだったら思いつきり出来るぞ」

ナイト

「ならば遠慮はいらんな」

八幡

「ああ……」

八幡、ナイト

『行くぞ!!』

キュカン!

ギュガン!

カアアアアア!

ブワアアアア!

ガシアアアアン!

銀牙騎士ゼロ

「銀牙騎士ゼロ!」

暗黒騎士ボルグ

「暗黒騎士ボルグ!」

ナイトは、薙刀状の魔戒剣で正面に円を描くことで召喚されナイトは暗黒騎士ボルグとなつた。

操

「な、何て禍々しい鎧なの!？」

ザルバ

『顔部分は髑髏みたいだな』

ガシユウ!

暗黒騎士ボルグは兜を下げた。

銀牙騎士ゼロ、暗黒騎士ボルグ

『行くぞ!!』

ビュン!

カア!!

ズドオオオオオン!!

操

「わあ!？」

ザルバ

『何て風圧だ!お嬢ちゃん俺様達の場所に結界貼れないか?』

操

「任せて!ハア!」

ブワ!

操は、二人分の結界を貼った。

ガッ！

ギギ！

銀牙騎士ゼロ

「せーの！！」

ドン！

ギユルルル！

銀牙騎士ゼロと暗黒騎士ボルグはぶつかり合ったがお互い吹っ飛んだが銀牙騎士ゼロは結界の壁にぶつかると前に体制を立て直し壁を思いつきり蹴り上げ暗黒騎士ボルグまで絶狼剣を構え回転した。

銀牙騎士ゼロ

「アリアアアアアア！」

ギユルルル！

暗黒騎士ボルグ

「フーン！」

ドン！

暗黒騎士ボルグ

「ハアアアアア！」

ズドオオオオオ！

暗黒騎士ボルグも壁を蹴り上げ突きの構えで銀牙騎士ゼロに突っ込んできた。

ギャルルルル！

カア！！

ドオオオオオオン！

ザッ！ザッ！ザザザザ！

クル！

ズザザザザア！

銀牙騎士ゼロと暗黒騎士ボルグはお互いぶつかり合ったが互角で今度は二人共地面に落ちながら立て直した。

暗黒騎士ボルグ

「ハアー！」

ブオン！

ガキイ！

ジュイイイイイ！！

暗黒騎士ボルグ

「何!？」

銀牙騎士ゼロ

「ハアアアアア！」

ザン!!

銀牙騎士ゼロは暗黒騎士ボルグの薙刀を二本で防いだと同時に受け流しながら暗黒騎士ボルグの前まで近付き胸の部分に当たった。

操

「す、すごい……」

ザルバ

『あんな魔戒騎士が何でこんな管轄に来たんだよ』

ガキガキガキガキ!

操

「ねえザルバ二人の剣見える？」

ザルバ

『イヤ、ギリギリだ……』

ガキガキガキガキ!

銀牙騎士ゼロ

「陰陽撥止！」

ガキイ！

暗黒騎士ボルグ

「チイ！」

スカッ

銀牙騎士ゼロ

「牙突！」

暗黒騎士ボルグ

「何!？」

ズドオオオオオ!

暗黒騎士ボルグ

「グウウ！」

銀牙騎士ゼロ

「チイ！外したか」

銀牙騎士ゼロは陰陽撥止で剣を飛ばし暗黒騎士ボルグは、飛んで来た剣を避けたが銀牙騎士ゼロは牙突を放ち胸に当てようとしたが左肩に当たった。

銀牙騎士ゼロ

「だがこれで……」

ズドオオオオオ!

銀牙騎士ゼロ

「何だ!?!」

馬?

『バヒヒイイイイン!』

グルン!

銀牙騎士ゼロ

「マズイ!?!」

ズドオオオオオオン!

銀牙騎士ゼロ

「グアアアアア!!」

バアアアアアン!

八幡

「ガハア!?!」

銀牙騎士ゼロは暗黒騎士ボルグにトドメを刺そうとしたが突然操の結界を破り黒い馬が乱入し馬は後ろ足で銀牙騎士を蹴り上げようとした。銀牙騎士ゼロは剣で防御し

ようとしたが暗黒騎士ボルグに剣が刺さっていたため両腕で防御したが余りの衝撃で鎧が解除された。

操

「零兄!?!」

ザルバ

『あれは魔導馬』

暗黒騎士ボルグ

「フン、奴か……」

バアアアアン!

ナイト

「また会おう銀牙騎士ゼロ」

バツ!

ナイトと魔導馬は八幡達前から姿を消した。

操

「零兄大丈夫?!」

八幡

「あ、ああ……あの魔導馬は一体……」

フ
ツ
「フツ」???

指輪

〈夜〉

《涼邑邸／家内》

ガチャ!

操

「り、凜さくん!」

八幡

「うう．．．」

凜

「八君!?!どうしたの一体!?!」

操

「そ、それは．．．」

???

『俺様が話そう』

凜

「え？」

凜は、声が出した方を見た。

ザルバ

『よお、お前さん確か「アスモデイ」を追っかけてた奴だな』
ザルバが何故か操の指に嵌められていた。

凜

「ザ、ザルバ!？」

操

「え、と、凜さん実は……」

ピイン

操

「あ」

カチ

操はシルヴァの蓋を開けた。

シルヴァ

『ちよつとアンタ達八幡を早くベッドに寝かせなさい！（怒）』

操

「は、はい！」

凜

「でも、まずは治癒からよ」

シルヴァ

『必要ないわ』

操

「え？でも、暗黒騎士と殺りあったのに……」

凜

「暗黒騎士!?まさか……」

シルヴァ

『奴じゃないわ八幡と殺りあったのはボルグ。装着者の名はナイトよ』

凜

「ナイト?……」

操

「え?シルヴァ何これ？」

八幡

「……」 シュウウウウウ

暗黒騎士ボルグとの戦いで傷付いた傷が“勝手”に治っていった。

凜

「シルヴァ、これ、どういう事？」

シルヴァ

『言えないわ』

凜

「何故？」

シルヴァ

『八幡が自ら喋るでしょ』

凜

「私にも秘密なの？」

シルヴァ

『あら、なら凜貴女の秘密八幡に話せるの？』

凜

「グッ!？」

操

「？」

凜

「そ、それよりザルバが何故いるのかしら？」

ザルバ

『暗黒騎士ボルグと殺りあつた後アイツと縁を切りこのお嬢ちゃんに頼んでアイツから抜き取つてもらつた』

凜

「へ、へえ〜・・・ま、まあ、あの魔戒騎士情けなかつたけどね」

八幡

「フア〜・・・あれ？ここ何処だ？」

シルヴァ

『家よ』

八幡

「あ、そ」

操

「あ、八兄目が覚めたの？」

八幡

「おう、操おはよう」

ザルバ

『おう、起きたか』

八幡

「……何故いる？」

操

「実は……」

操は、ザルバの事を話した。

八幡

「成る程な納得だ」

ザルバ

『ま、よろしくな』

八幡

「ああ……ちくと俺、番犬所に行ってくる」

操

「え？何で？」

八幡

「ザルバの事話さなきやならんだろ？」

ザルバ

『成る程な。なら俺様もつれてけ』

八幡

「分かった。操行くぞ？」

操

「え？でも、八兄歩いて大丈夫？」

八幡

「ああ、見たんだろアレを？あくかなりこつた〜」ゴキゴキ

八幡は『普通』に立ち上がった。

操

「(普通に立った!)」

ザルバ

『(この男何かの加護でも受けてんのか?)』

八幡

「じゃあ、いってきます」

凜

「い、いってらっしゃい」

ガチャ!

《街／東の番犬所》

八幡

「と、言う訳でザルバを家で預かる事になりました」

三神官

『ハア〜』

操

「零兄三神官すぐく落ち込んでいるね・・・(ヒソヒソ)」

八幡

「まあ、無理ないだろうあの魔戒騎士完全体のホラーじゃないホラーにゴコゴコにされたんだから(ヒソヒソ)」

ザルバ

『ま、他にも失態数は数え切れないほどにあるがな』

八幡

「あの魔戒騎士一体何したんだよ・・・」

三神官

『コホン』

ケル

『話は分かりました』

ベル

『魔導輪ザルバは貴方方にお預けします』

ローズ

『お前も考えたなああの落ちこぼれ魔戒騎士に難癖つけられる前に我々に言えばどうにか
なると考えていたのだから』

ケル

『懸命な判断です』

ベル

『我々もザルバの事を元老院に伝えておきます』

八幡

『お手数お掛けしてすみません』

ローズ

『お前が気にする必要はない』

ケル

『それにしても暗黒騎士が出てくるとは……』

ベル

『最近魔戒騎士、魔戒法師が少なくなっているのは奴等が原因だったのですね』

ローズ

『それとお前には悪い知らせがある』

八幡

「？」

ケル

『炎刃騎士ゼン。材木座義輝が暗黒騎士ゼクスに襲われました』

八幡

「暗黒騎士ゼクスだと……」

操

「そ、それで材木座さんは!？」

ベル

『幸い材木座義輝は命に別状はありませんでした』

操

「よかった」

八幡

「暗黒騎士ゼクスは今、何処に？」

ローズ

『分かれば苦労はしない』

八幡

「そう、ですか……（ギリツ）」

操

「零兄？」

ケル

『……もう貴方達は帰って休んでください』

八幡

「はい……失礼します」

操

「あつ（ペコツ）」

八幡と操は番犬所を後にした。

《街／商店街》

操

「ねえ、零兄、材木座さんのお見舞いしなくていいの？」

八幡

「別にいいだろアイツそう簡単に死なないし」

操

「材木座さんの扱がひどいな・・・」

八幡

「それより腹へったな・・・（グゴゴゴゴ！）」

操

「え!?!今の何の音!?!」

ザルバ

『コイツの腹の音だな』

操

「嘘でしょ・・・（タラッ）」

八幡

「どっか店に寄るか？」

操

「そうしようか」

ドン！

八幡

「ああ、失礼」

???

「八幡？」

八幡

「え？お前……ルークか!？」

ルーク

《街／BAR》

八幡

「久しぶりだなルーク」

ルーク

「ああ、久しぶりだな八幡」

八幡とルークと名のる男と何故かBARにいた。

八幡

「お前此処の『銃法師』になっていたのか？」

ルーク

「残念ながらな」

八幡

「そうかい……まあ、それはそうとお前に伝えたい事がある……」

ルーク

「何だ？」

八幡

「暗黒騎士ボルグに会った．．．」

ルーク

「何!?!八幡奴は今何処にいる!?!」

八幡

「まあ、まあ、落ち着けルーク。話してやるから落ち着け」

ルーク

「分かった．．．」

八幡は、ナイトの事を話した。

ルーク

「そうかそんな事が．．．」

八幡

「すまんな仕留められなくて」

ルーク

「イヤ、お前が無事ならそれで構わん．．．それより八幡」

八幡

「?」

ルーク

「そのガキは誰だそれに何故魔導輪ザルバを持っている？」

操

「ガキって……」

ザルバ

『「こう見えてかわいいお嬢ちゃんだぜ？」』

八幡

「そう言えば言っていなかったな……この娘の名前は涼邑
操。血の繋がりはないが俺
の妹だ」

操

「涼邑」操です」

八幡

「で、操。コイツの名前はルークだ」

ルーク

「フン」

操

「(態度悪!?)」

八幡

「コラ、ルーク」

ルーク

「で、コイツの事はいい何でザルバを持っている？」

八幡

「それは、ザルバから聞いた話だと牙狼の魔戒騎士と縁を切ったんだとよ」

ルーク

「そうかそれなら納得した。今回の牙狼は最弱と聞いたからな」

八幡

「そういう事だ……で、まだ俺に何か言いたげだなルーク？」

ルーク

「……総武高校で天弓騎士ガイに会った」

八幡

「そうか……で、お前から見てどうだった？」

ルーク

「未熟だなあの魔戒騎士は目の前の敵しか見ておらず隠れていた憑依ホラーに気付けず
にいた」

八幡

「ハハハ、厳しいねえ……でも、お前がカバーしたんだろ？」

ルーク

「ああ……」

八幡

「ま、ありがとうよ」

ルーク

「フツ……八幡何故奴に名を教えた？」

八幡

「伝説のホラーゼドムと竜騎士事件知ってるだろ？アレの苦勞で名を教えただけだ」

ルーク

「そう言う事か……」

店員

「あの、お客様？」

八幡達

『?』

店員

「未成年者ですよね？」

八幡

「そうだけど？」

八幡は、普通に答えた。

店員

「で、では、学校側には黙って……」

チリーン！

八幡は、店員が話の途中で魔導ベルを鳴らした。

店員達

『グッ！』

客達

『グウウ！』

ギギギイ

ルーク

「魔導ベルか？」

八幡

「未成年者がライターなんてしたら色々やこしいんだよ」

リンリン

八幡

「暗黒騎士ボルグとの戦いは手加減されてたからな腹いせに此処で暴れるぞルーク」

ジャキ！

ルーク

「ああ」

ジャキ！

ルークは、魔導銃を構えた。

操

「え？何あの魔導具？」

ザルバ

『あれは魔導銃だお嬢ちゃんあの魔導銃はホラーを倒せる魔導具だ。まあ、しっかり使
いこなさねえと宝の持ち腐れだな』

八幡

「操、結界頼んだぞ？」

操

「了解」

〈朝〉

《街／BARの前》

八幡

「フワア〜」

操

「フワア〜」

ザルバ

『お疲れだなお嬢ちゃん』

ピイン

カチ

シルヴァ

『お疲れ様八幡、操』

ルーク

「それじゃあ八幡必要があったら呼んでくれ」

八幡

「ああ、またなルーク（ヒラヒラ）」

ルーク

「ああ」

コツコツ

ルークは八幡の元から去った。

操

「ルークさんって八兄以外の魔戒騎士しか認めてないの？」

八幡

「まあな……アイツとは一緒に修行していたからな」

操

「ふうん……そう言えば八兄、ルークさんに暗黒騎士ボルグの事言った時ルークさん凄く興奮してたような気がしたんだけど」

八幡

「暗黒騎士ボルグ。ナイトはルークの親父だ……」

操

「え!?!」

シルヴァ

『それだけじゃなくナイトはルークの母親を殺したのよ』

操

「!?だ、だから八兄あの時怒ったんだ……」

八幡

「この事は凜さんや他の奴等には言うなよ?あまり人の過去話していい訳じゃないからな」

操

「分かった……」

八幡

「じゃあ帰って朝飯食ってシャワー浴びて学校行くぞ?」

操

「眠いよ〜」

浸入

《マフィアの泊まっているホテル／監視室》

〈夜〉

ピーーピーー

マフィア1

「ん？」

マフィア2

「侵入者だエレベーターの中だ」

《マフィアの泊まっているホテル／エレベーター前》

マフィア達

『・・・』

ポーン

ガー

ダラララララ!

ドンドン!

シーン

マフィア達は監視室から侵入者がエレベーターの中にいると報告が来てエレベーターが開くのを待ち開いた瞬間銃を撃つたが……。

マフィア3

「いない……」

マフィア4

「そんなバカな……」

ガー

バタン

ドカバキドカバキ!

ドガア!

ガー

マフィア5

「あぐあ」

バタ

グシヤア

マファイア5

「ウギヤア！」

侵入者はエレベーターに入ったマファイア達はエレベーターがしまった後殴られた音が鳴り響き最後にエレベーターのドアがへこんだ。エレベーターが開きマファイアマファイア5が倒れた後マファイア5は侵入者に顔を踏みつけられた……。

《マファイアの泊まっているホテル／謎の部屋の前》

侵入者

「ウフ♪」

バババ！

シユタ

侵入者は謎の部屋の前に赤外線があつたが凄い身のこなしで赤外線を交わし謎の部屋の前にたどり着いた。

タタタ

ビービービー

侵入者

「!?」

侵入者は謎の前にはパスワードがあった。侵入者は腕にあるキーボードでパスワードを弾いたがエラーになり警報が鳴り響いた。

《マファイアの泊まっているホテル／ボスの部屋》

マファイア6

「ボス侵入者です」

ボス

「フン、アレ」の部屋には簡単には入れません……侵入者を殺せ」

《マファイアの泊まっているホテル／謎の部屋の前》

マファイア7

「そのまま手を上げて振り向け」

侵入者

「・・・(スツ)」

マファイア8

「フツ(ニヤリ)」

バツ!

マファイア9

「なっ!?!」

ドカバキドカバキ!

侵入者は手を上げた後素早くマファイアの側に行きマファイア達をボコボコにしたが侵入者は逃げた。

《マファイアの泊まっているホテル／外》

〈朝〉

侵入者

「ハアゝ失敗したか・・・パスワードが昨日の内に変えられるなんて“普通”じゃあり得ないわね・・・私一人じゃ無理ね。確かあの魔戒騎士はこの東の管轄にいるんだっけ?会いに行くか“八幡”に(ニヤツ)」

《涼邑邸／居間》

〈朝〉

ルークと別れた八幡と操は屋敷に戻りシャワーを浴びて凧は朝食の準備をしていた。

八幡

「!? (ゾクウ!」

操

「八兄どうしたの?」

八幡

「いや、多分気のせいだ…… (ガクガクブルブル」

カマクラ

『ニヤ〜? (どうしたの〜?)』

羅号

『バウ? (どした?)』

花罪

『?』

凜

「二人共早く食べなさい」

八幡、操

『は〜い』

操

「ねえ、八兄」

八幡

「何だ？」

操

「材木座さん大丈夫かな？」

八幡

「まあ、死んでなきや大丈夫だろ」

操

「材木座さんの扱い本つとうに悪いよね」

八幡

「まあ、今日アイツ休みだろ一週間」

操

「八兄分かるの!？」

八幡

「材木座は暗黒騎士ゼクスに遊ばれてたんだよ」

操

「八兄、暗黒騎士ゼクスの事知ってるの？」

八幡

「ああ、元同期だ……」

操

「え？」

凜

「八幡君……その話はまた今度にしなさい」

八幡

「はい……」

ザルバ

『そう言えばお前達どこの学校何だ？』

八幡、操

『総武高校』

ザルバ

『よりもよって……アイツも総武高校だぞ』

八幡

「え、そうなのか？」

ザルバ

『残念がらな』

操

「ザルバ返せ〜って言いそう」

ザルバ

『言うぜアイツの場合』

八幡

「まあ、早く行こうぜ」

ザルバ

『そういえばシルヴァは何で蓋しているんだ？』

八幡

「学校でシルヴァが喋ったら大変だろ？」

ザルバ

『成る程な。所で誰に蓋してもらったんだ？』

八幡

「〃大魔戒法師・リユメ〃様だ」

ザルバ

『何だと？あの大魔戒法師・リユメにだど？どうやって知り合ったんだ？』

八幡

「それはな……」

八幡はザルバにリユメの事を話した。

ザルバ

『お前さんよく〃テゴル〃倒したな……』

八幡

「まあ、かなりの命懸けの戦いしたからな」

凜

「八幡君着替えて」

八幡

「あ、はい」

バサ

八幡は、魔法衣を回して総武高校の制服に変わった。

八幡

「操行くぞ?」

操

「はーい」

ザルバ

『おい、俺様も連れてけ』

八幡

「じゃあ、学校で喋るなよ?」

ザルバ

『分かった』

凜

「はい、お弁当」

八幡

「ありがとうございます」

凜

「八幡君、操ちゃん。いってらっしゃい」

八幡、操

『いってきます』

八幡と操は、総武高校に向かった。

誘拐

《総武高校／一年D組》

〈朝〉

ガラッ

操

「眠いよ〜」

八幡

「同じく……」

沙紀

「あ、零……」

八幡

「おう、沙紀。材木座の事聞いたよ一週間休みだろ？」

沙紀

「何で分かったの？」

八幡

「アイツも魔戒騎士だ。それに共にゼドムを倒したんだ簡単に死なねえよ……」
ザルバ

『お前さんゼドムも倒したのか?』

沙紀

「え?」

沙紀は操の指に嵌めている物をみた。

ザルバ

『ん?何だ?』

沙紀

「ま、ま、魔導輪ザルバ!」

八幡

「後で話すから……」

沙紀

「わ、分かった……」

《総武高校／一年D組》

〈授業中〉

教師1

「ウワァン！」

八幡

「フン」

女教師1

「ビー！」

操

「眠い」

男教師2

「ナンテコッタナンテコッタ！」

沙紀

「ハァ〜」

男子生徒

「おいおいすげえなああの三人あの教師達を泣かせて帰らせるなんて……」

海老名

「涼邑君達凄いな……」

授業中に寝ていた涼邑兄妹を教師が起こしたがまず初めに教師が八幡に問題だったが簡単に解いて間違いを指摘し腐った目で睨まれ男教師は泣きながら逃げた。

次の授業操も起こされたが寝惚け状態なのに問題を簡単に解いて女教師が泣きながら逃げた。

次の授業は英語で沙紀も簡単に問題を解いた後英語で話ながら沙紀は指摘して男教師は泣きながら逃げた。

《総武高校／屋上》

〈昼〉

沙紀

「さて、話してもらおうよ？」

八幡

「分かった。暗黒騎士ゼクスは俺と同期だ」

操

「八兄と同期で何で暗黒騎士に？」

八幡

「アイツは人間は守る価値は無いと言って暗黒騎士に落ちた」

沙紀

「そうなんだ……」

八幡

「西管轄のルシアーノさん覚えてるか？」

戸塚

「え、うん」

八幡

「俺が甘かったせいでルシアーノさんは俺を庇って腕を斬り落とされちゃった」

戸塚

「そんな事が……」

八幡

「ま、話を切り替えて魔導輪ザルバがいる理由は簡単に言うとな今回の主に滅茶苦茶に失望したから俺達に付いて行きたいって言ってた」

ザルバ

『簡単すぎだな』

沙紀

「へ、へえ」

八幡

「で、戸塚お前憑依ホラー見逃してたんだってな」

戸塚

「え、何で知ってるの？」

八幡

「ルークから聞いたぞ」

沙紀

「ルーク？」

八幡

「白髪の男に会ったろ？アイツだよ」

戸塚

「あの人!? やっぱり知り合いだったんだ!？」

八幡

「礼を言いたいんだったら止めとけよ？」

戸塚

「え? どうして？」

操

「あの人八兄しか認めてないんですよ……私なんてガキ扱いだったし……」

戸塚

「そ、そうなんだ……」

沙紀

「八幡、ルックってどんな魔導具使うの？」

八幡

「アイツが使う魔導具は銃だ」

沙紀

「銃？珍しいね」

八幡

「まあ、そうだなアイツの銃の腕前はかなり凄いぞ」

沙紀

「そうなんだ」

操

「八兄お腹すいた〜眠い〜」

八幡

「俺だって眠いが我慢しろ」

沙紀

「アンタ達何で眠たいんだ？」

八幡

「暗黒騎士ボルグと殺りあつたんだよ」

沙紀、戸塚

『え？』

ザルバ

『ありや凄かったぜ。お嬢ちゃんの結界が無かったらこの街は被害が甚大だったろう』

『よ』

戸塚

「暗黒騎士が二人も現れるなんて……」

八幡

「まあ、この話は終り飯食うぞ」

操

「うん」

八幡達は弁当を食べた。

《総武高校／校門前》

女

「情報じゃあこの学校に通っているようね．．．何で学校に通っているのかしら？」

《総武高校／下駄箱》

八幡

「早く帰って寝たい．．．」

操

「アタシも．．．」

男子生徒1

「なあ、学校前にすげえ美人がいるんだって」

男子生徒2

「胸もデカいんだってよ」

男子生徒3

「見に行こうぜ」

八幡

「元気だな」

操

「若いつていいよね零兄」

沙紀

「アンタらも十分若いでしょうが」

八幡

「まあ、早く帰ろうぜ」

女

「八幡、久し振りね」

八幡

「え？」

女

「ハア、イ久し振りね八幡」

八幡

「ジ、ジーナさん!?なん」ドゴオ!

八幡

「ゴホオ！」

ガクッ

八幡は腹を思いつきり殴られ気を失った。

ジーナ

「フツ♪悪いけどこれから彼とデートなのよじゃあね♪」

ズルズル

八幡

「.....」

戸塚、沙紀、操

『.....』

バタン

ブロロ

ジーナと呼ばれた女は気絶した八幡を引きずって車に乗せてそのまま走った。

操

「つて零兄が拐われたー！」

沙紀

「あ、あの女一体・・・？」

戸塚

「凜さんに報告しなきゃ!？」

情報

《街／＼ジーナの車内》

ブコロ

八幡

「う、ウーン……ハツ!？」

ジーナ

「あ、起きた八幡？」

八幡

「ゲホゲホっ会ってそうそう腹パンは無いでしょジーナさん？（ジトツ）」

ジーナ

「ゴメンね♪」

ピイン

カチ

シルヴァ

『全く貴女が誘拐するなんて……』

ジーナ

「あら、シルヴァ。久し振りねいつの間に蓋付きになったのかしら？」

シルヴァ

『あら、貴女私達の事調べてたんじゃないの？』

ジーナ

「フフ、まあ、色々八幡の事を調べたわ……」

シルヴァ

『ご苦労様ね……』

八幡

「で、態々俺を誘拐したんだ。何か厄介なホラーでも現れたんですか？」

ジーナ

「まあ、詳しくはこの資料を見てね」

ジーナは八幡に資料を渡された。

八幡

「え〜と何々チンピラだった男がかなりの力を持った？」

ジーナ

「そうよ。しかもこの短い間にかなりの力を持つのは有り得ないでしょ？」

八幡

「確かに有り得ないけどホラーだったならジーナさん一人で相手できる筈じゃあ」

ジーナ

「残念ながらそのギャング達はホラーじゃなかったのよ」

八幡

「成る程ねだから俺を……」

ジーナ

「そうよ。調べるだけじゃきりが無いから忍び込んだけどパスワードが書き換えられていたのよ。まるでこちらの動きを読んでいたかのようにね」

八幡

「成る程ね……で、マフィアが隠している物がホラーだったら」

ジーナ

「壊してかまわないわ。それにそのボスを利用して八幡が探している暗黒騎士を見つけ
る事が出来るかも知れないわよ？」

八幡

「!？」

シルヴァ

『八幡……』

八幡

「必要ない」

ジーナ

「どうして？」

八幡

「そんな奴の力借りなくても俺が必ず見付けます」

ジーナ

「フフフ♪」

八幡

「？」

ジーナ

「もし、八幡がボスの力を借りるって言ってたらこの仕事は降りてたわ」

シルヴァ

『甘く見すぎよ』

八幡

「仕事降りたとしても他の魔戒騎士に頼んだらいいんじゃないか……」

ジーナ

「この東管轄の魔戒騎士信用できないのよ（ハア〜）」

八幡、シルヴァ

『成る程／ね』

ジーナ

「まあ、気を取り直してこのビルの最上階が怪しいのよ」

八幡

「浸入経路の先には赤外線かパスワードは不明か……赤外線は問題ないけどパスワード分からないと意味ないですよ？」

ジーナ

「それはね一度電源を落とすわ。電源落とすにはボスのDNAが必要なのよ」

シルヴァ

『そのDNAを手に入れるにはキスしかないわね』

ジーナ

「!?」

ギギイ!

パペア!

八幡

「デエー!？」

シルヴァに言われジーナは、車が反対斜線に行ってしまいぶつかりそうになった。

シルヴァ

『ちよつと危ないでしょ!？』

ジーナ

「アンタが変な事言うからでしょ!？」

八幡

「ジーナさんキスのけいけい……(ゴリ)」

ジーナ

「ナニカイツタ……(ゴゴゴ!)」

八幡

「イエ……」

八幡はジーナに銃を突き付けられた。

???

『ミャア♪』

ヒョコ

八幡

「ん？ “ミア” 久し振りだな寝てたのか？」

ミア

『ミヤア♪』

ジーナの胸からフェレットに似た生き物が現れた。

シルヴァ

『貴女まだこの魔獣飼っていたの？』

ジーナ

「ミアは私の優秀な護衛だからね」

ミア

『ミヤア』

八幡

「おいで」

トコトコ

ミア

『ミヤア♪ (ナデナデ)』

八幡

「いや〜ミアはかわいいな〜」

ミア

『ミヤア〜ン♪（ナデナデ）』

ジーナ

「……………で、話を再開していいかしら？」

八幡

「あ、はい」

シルヴァ

『で、その人間のDNA手に入れるにはキスが嫌なら他に方法あるの？』

ジーナ

「……………」

八幡

「ジーナさんキスしか無いで……………（ゴリリ！）」

ジーナ

「マタ、ナニカイツタ？（ゴゴゴゴ！）」

八幡

「ス、スミマセン（ガクガクブルブル）」

ミア

『ミヤアゝ（ガクガクブルブル）』

ジーナ

「まあ、それは、最終手段よ……」

シルヴァ

『ヘタレ（ボソツ）』

ガチャ！

八幡

「つて今の俺じゃないですよー!？」

ジーナ

「まあ、赤外線何て八幡掻い潜れると思うけど一応これ上げるわ」

八幡

「これはグローブ？」

ジーナ

「これがあれば“あの打撃技”が使えるわよ？」

八幡

「あの打撃技か……」

シルヴァ

『あの打撃技は負担が大きすぎて八幡の手が暫く使えなくなるのよね』

ジーナ

「まあ、そのグローブをしていたら負担が減るわよ」

八幡

「まあ、ありがとうございます」

シルヴァ

『で、DNAはどうするの♪』

ガチャ!

八幡

「何でー!?!」

一方その頃涼邑邸では・・・

《涼邑邸／居間》

凜

「何ですって八君が拐われたー!?!」

操

「そうなんです！」

凜

「戸塚君、沙紀ちゃん貴方達がいて何て様よ！」

戸塚、沙紀

『すいません!?!』

ザルバ

『まあ、いきなりだったら無理があつたんだぞ?』

凜

「黙れ魔導輪!壊すぞ? (ギロ)」

ザルバ

『すいません……』

凜

「今すぐ番犬所に行くわよ！」

魔戒騎士、魔戒法師

『は、はい……』

《番犬所》

ケル

『魔戒法師ジーナが魔戒騎士涼邑 零を拐った？』

ベル

『あ、そう言えば彼女に依頼を』

凜

『どんな依頼を頼んだのよ！』

ローズ

『マ、マフィアの事を頼んだのだ』

操

『マフィアを？』

ケル

『いや、チンピラだったのが街の市長にまで成り上がったのでホラーがらみかどうかあの者に頼んだのだ』

沙紀

『それが何で零を拐うのとどんな関係が？』

ベル

『かなりの警戒で動きが素早い魔戒騎士が必要だったのだと聞いている』

戸塚

「あく成る程納得しまし・・・ヒツ!?」

凜

「あの小娘、零君に何かしたら許さないぞ（ゴゴゴゴ!）」

全員

『こ、怖!?!』

《街／ジーナの車内》

〈夕方〉

八幡

「さくて奴のDNAを手に入れる他の方法はありますよジーナさん」

ジーナ

「あるの?」

八幡

「花罪」

ピョコ

花罪

『?』

八幡の上着中に小さな妖精が現れた。

ジーナ

「あら、かわいいじゃない」

花罪

『、(A、*)ノ≡!?(ピユ!)』

花罪は、ジーナの声に驚いて上着の中に隠れた。

八幡

「あらら、花罪出ておいで」

花罪

『一匹。(ジー)ピョコ』

八幡

「花罪、お前に仕事だ」

花罪

『?』

八幡

「この写真に写っている男の髪の毛一本かあるいはこの男が触ったグラスを1つ持って来てくれないか? 金平糖はそうだな……五個でどうだ?」

花罪

『♪』

八幡

「お、やってくれるかありがと♪」

花罪

『(・ω・、人)(ウルウル)』

八幡

「ん? どうした?」

シルヴァ

『どうやら花罪ちゃんは追加報酬が欲しいようよ♪』

八幡

「追加報酬? 珍しいな何だ?」

花罪

『(^ ^ ω ^) (ニコニコ)』
シルヴァ

『どうやら花罪ちゃんは頭撫でて欲しいようよ♪』
八幡

「分かった成功したら頭撫でてやるよ」

花罪

『ゞ (*≡▽≡)ノゞ (ワイワイ)』

八幡

「じゃあ頑張れよ？」

花罪

『(”、ム)ゞ (スチャ)』

ビュン!

花罪は八幡達から素早く去った。

ジーナ

「大丈夫なの？」

八幡

「アイツは俺の優秀な使い魔ですからね」

ジーナ

「そう……」

八幡

「まあ、日が沈むのはまだ先だし少しゲート封印して行くか」

ガチャ

ジーナ

「真面目ね……」

八幡

「魔戒騎士ですからね……」

ボタン

《街／オブジエ前》

八幡

「ハア！」

ザシユ！

シユン

シルヴァ

『八幡、花罪ちゃんが帰って来たわよ』

八幡

「お、帰って来たか」

花罪

『ε||、（*、▽、）ノ（タダイマー』

八幡

「お帰り」

ジーナ

「それで例の物は？」

花罪

『♪』

パツ

花罪はグラスと髪の毛を出した。

八幡

「お、ありがと。よくやったな（ナデナデ」

花罪

『♪』

シルヴァ

『よかったわね花罪ちゃん♪』

ジーナ

「少し時間ちようだいね？」

パソコン

《マフィアの泊まっているホテル／通気口》

〈夜〉

ガタガタ

八幡

「全くあの人のいつていた俺のピッタリの浸入口酷くない？」

ピイン

カチ

シルヴァ

『文句言わない八幡、貴方その目だと一発で捕まるわよ？』

八幡

「うっせ」

シルヴァ

『まあ、ジーナの事だから今頃マフィアの手下ボコボコにしてるでしょ』

《マフィアの泊まっているホテル／監視室前》

チンピラー

「あ、あぐあ……」ドガッ！

ギリリ

ジーナは、チンピラの壁に顔を足で押さえ付けた。

ジーナ

「アンタ達のボスが最上階に隠してる物があるでしょ

？」

チンピラー

「お、お前『アレ』が何か知ってるのか!？」

ジーナ

「アレ?」

チンピラー

「あの『パソコン』だよ!? 違う……アレはパソコン何かじゃねえ!? アレは『ポケモン

』だ!」

ジーナ

「なら、私の邪魔をしない事ね」

チンピラー

「え・・・？」

ジーナ

「出ないとアンタ達全員食われるわよ？」

チンピラー

「どういう事だ？」

パッ

チンピラー

「ゲホゲホッ」

チンピラー

「ガハッ!?」バキッ!

ジーナはチンピラーの顔に足で押さえ付けていた男をはなし蹴り出しチンピラーは
気絶した。

《マフィアが泊まっているホテル／エレベーター通気口》

バシユウ!

カン!

ギユルルル!

八幡

「上に参りまゝす」

八幡は、糸の銃でエレベーターの天井にさして最上階まで上った。

《マフィアが泊まっているホテル／最上階》

ガラツ!

八幡

「フウツ! 最上階に到着!」

八幡は、最上階のエレベーターの扉を無理矢理開けた。

八幡

「さくて後は合図を待つのみ」

シルヴァ

『八幡、〃足の重し〃を外さないの?』

八幡

「必要ない今回はアレを試したいからな」

シルヴァ

『そう言う事ね』

《マフィアが泊まっているホテル／監視室》

ジーナ

「フフ、八幡お待たせ♪」

カタタタン!

ジーナ

「頼むわよ……」

ピー

ブウン……

ジーナは、マフィアのボスのDNAが付いているカードをカードキーにスライドさせてシステムがダウンした。

《マファイアが泊まっているホテル／最上階》

ブウン……

八幡

「ヨーイ！ドン！」

ビュン！

八幡は、システムダウンと同時に走った。

《マファイアが泊まっているホテル／最上階謎の部屋の前》

八幡

「ウオリアアアアア！」

バゴオオオオン！

八幡

「ヨシ！（フンス）」

ブウン！

八幡が謎の部屋の前に近付いた瞬間に拳で扉を破壊した同時にシステムが復旧した。

《マフィアが泊まっているホテル／監視室》

ガチャチャ!

ジーナ

「……」

ボス

「やってくれたな泥棒ネコ」

マフィアのボスが武器を持った複数の部下を連れて来てジーナに銃を向けていた。

ジーナ

「……」

ボス

「あの部屋に写っている男はお前の仲間か？」

ジーナ

「ええ、そうよあの部屋にある物をいただこうと思つてね」

ボス

「そうかよ。だがアレを盗むのは不可能だ何せアレは “生きているんだよ”」

ジーナ

「(やっぱりホラーか……八幡、早く破壊してね)」

《マフィアが泊まっているホテル／謎の部屋》

八幡

「気味が悪い部屋だな」

シルヴァ

『気晴らしに歌でも歌ったらどう?』

八幡

「そうだな……まゝわるまわるいゝとぐるまゝ♪」

シルヴァ

『その歌好きね♪』

八幡

「エマさんがよく歌ってくれてたから覚えたんだよ」

ベチヤツ!

八幡

「ホント趣味が悪い部屋だな．．．」

八幡が何かを踏んだと思ったら床に血がついていた。

ブン

八幡

「あん？」

謎の部屋に進んでいたら一台のパソコンがあり勝手に起動した。

パソコン

〈ようこそ魔戒騎士〉

パソコンから文字が出た。

八幡

「ブン、俺が来るの知ってたようだなそれに．．．」

シユルシユル

ビシユ!

ガシツ

八幡

「歓迎されてるな」

ギリギリ

八幡の背後から黒いコードが現れ八幡を襲いかかろうとしたが魔戒剣で防いだが魔戒剣にコードが絡まった。

八幡

「この二本の剣が欲しいのか？ほら、やるよ」

パツ

ヒュドオ！

ビュン！

八幡

「オラア！」

バキイ！

バチバチ

ズボ！

八幡は黒いコードによって絡まれた魔戒剣を急に離れたため黒いコードは壁にめり込んだ。黒いコードの動きを封じたら素早くパソコンまで移動し八幡はパソコンを思いつきり殴った。

八幡

「さて、魔戒剣回収しよ」

ガシツ

シユルシユル

八幡

「まあ、簡単に終わったら苦労しないか……」

《マフィアが泊まっているホテル／監視室》

謎の部屋から一部始終見ていたマフィア達は驚いていた。

ボス

「嘘だろ!？」

ジーナ

「ウフ♪」

シユルシユル

チンピラ2

「?な、何だこりや!？」

八幡がパソコンを殴った後突然無数の黒いコードが現れた。

ジーナ

「チッ！」

ガチャ！

ドオン！

バチバチ！

黒いコードがマファイア達を襲いかかろうとしたがジーナは、マグナム銃を使い小さな結界が出現させマファイア達を守った。

ジーナ

「逃げなさい！早く！」

マファイア達

『ヒイヒイヒイ！』

ガチャ！

ボス

「チクショウ！全部お前らのせいだ！」

ボスはジーナに銃を突き付けた。

ジーナ

「私達が来なかったら何れアンタ達喰われていたわよ」

ボス

「うるせえ！俺はもつとのし上がるんだ！」

ダアン！

ボス

「グワ!?!」

チンピラー

「・・・」

ボス

「お、お前・・・」

ボスはジーナを撃ち殺そうとしたがチンピラーがボスの腕に当たった。

シユルシユル

ジーナ

「これは不味いわね・・・八幡急いで」

ドゴゴゴゴオ！

《マフィアが泊まっているホテル／屋上》

パソコン？

〈(#。D。)>

銀牙騎士ゼロ

「銀牙騎士ゼロ！ “アグリゲート” 貴様の陰我俺が断ち斬る！」

ホテルの屋上から無数のコードで巨大化したホラーアグリゲートと鎧召喚した銀牙騎士ゼロが現れた。

銀牙騎士ゼロ

「陰陽撥止！」

ズドオ！

ホラーアグリゲート

∧!! (; ロ) 。 。 ∨

陰陽撥止でアグリゲートのコードを刺しアグリゲートの動きを封じた。

銀牙騎士ゼロ

「牙突！」

ズドオ！

銀牙騎士ゼロ

「“牙突・三式”！」

グリーン！

ザアン！

アグリゲート

（へ）（ひ）（へ）（へ）（びー）！

ドオオオオオン！

銀牙騎士ゼロは牙突でアグリゲートの画面を刺し方向を植えにむけ牙突・三式でアグリゲートを斬り裂いた。

バアアアアアン！

八幡

「よし、終わり……帰ろ」

《マフィアが泊まっているホテル／監視室》

シユルシユル

ピタ

バサア！

銀牙騎士ゼロがアグリゲートを倒した為黒いコードは消えた。

ジーナ

「消えた……やったわね八幡」

ボス

「ハア〜たす」

バキイ!

ボス

「ガハア!?!」

ジーナはボスの顔に蹴りを入れた。

《街／歩道》

八幡

「ハア〜今日は……」

パツパ〜

八幡

「?」

ジーナ

「乗ってく？」

ニア

『ミヤア♪』

八幡

「お言葉に甘えさせてもらいます」

ガチャ!

ボタン!

ブロロ

《街／ジーナの車内》

ジーナ

「今日はありがとうね八幡」

八幡

「いえ……」

ジーナ

「貴方の事色々調べさせてもらったわ今は涼邑 零って名乗っているそうね」

八幡

「はい」

ジーナ

「ホラー喰いの暗黒騎士を倒したら八幡に戻るの？」

八幡

「さあ、分かりません」

ジーナ

「そう……」

《涼邑邸／玄関前》

キキ！

ガチャ！

八幡

「どうもありがとうございました」

ジーナ

「いいのよ八幡気にしないでね。じゃあまた、会いましょうね」

ボタン！

ブロロ

ジーナは八幡の前に去った。

八幡

「この東の管轄に移動してからいろんな奴等と再会してるな……」

シルヴァ

『そうね』

八幡

「ハアゝ家に入ろう……」

ガチャ!

凜

「八君八君八君八君八君」

操

「ヒイイイイイ!」

戸塚

「ガクガクブルブル」

沙紀

「ブルブル」

八幡

「何事……?」

ジーナ

「フフ、八幡、案外早く会えるかもね♪」

携帯

《涼邑邸／居間》

〈朝〉

新聞

『マフィアのボスギャングの報復にあい死亡』

八幡

「はあ、こうなったか・・・」

ピイン

カチ

シルヴァ

『人間同士の争いに私達は関わる訳にはいかないわ』

カマクラ

『ゴロゴロ♪（ナデナデ）』

八幡

「ま、この人間の自業自得だな・・・」

コト

凜

「はい、お待ちせ八君」

八幡

「ほら、カマクラ膝から退いてくれないか？」

カマクラ

『にゃ』

ピヨン

八幡

「で、操は何で震えてるんだ？」

操

「な、何でもないよ（ガクガクブルブル）」

ザルバ

『何も聞くな……』

凜の怖い場面を見たため震えている操。

八幡

「そうか……さて、今日は学校遅刻して行くか」

操

「ど、堂々と言ったね・・・」

八幡

「最近ゲート封印してなかったからな」

操

「此処の魔戒騎士、魔戒法師して無さそうだもんね」

八幡

「ザルバどうなんだ？」

ザルバ

『お前さんの言う通りだ』

八幡

「・・・三神官も苦勞するな」

操

「まったく」

八幡

「まあ、操後で合流しようぜ」

操

「うん」

八幡と操はゲート封印しに屋敷からでた。

《学校／一年D組》

〈三時間目〉

女教師

「ハアイ♪皆さん初めまして新しく英語教師になった」

ガラッ

八幡

「スイマセ〜ン遅刻しま．．．し、た」

女教師

「フフ、初めましてわた」

ピシヤ!

操

「零兄どうしたの？」

八幡

「か、帰るぞ……」

操

「え？何で？」

八幡

「いいか」

ガラッ

女教師

「いきなり閉めるなんて酷いわそれに遅刻はよくないわよ？」

八幡

「……ジーナさん」

操

「え、（この人確か八兄を拐った人）」

ジーナ

「早く入りなさい」

八幡

「はい……」

ジーナ

「あらためまして初めまして新しく英語教師になった ジーナ・ブラウン です」

八幡

「ジーナ・ブラウンって……」

ジーナ

「えくと涼邑 零君」

八幡

「は、はい……」

ジーナ

「私この学校初めてなのよ案内お願いね？（ニッコリ）」

八幡

「はい……」

操

「あのわた」

ジーナ

「ごめんなさいね私は涼邑君に頼んでいるの（ゴゴ）」

操

「は、はい……」

ジーナ

「あら？」

ジーナは操の指に嵌めている指輪を見た。

ジーナ

「(魔導輪ザルバ？どうしてこの娘が？後で八幡に聞いてみましょう)」

《総武高校／廊下》

〈休み時間〉

八幡

「ハア、まさかジーナさんが此処の先生になっていたなんて……」

ジーナ

「ちよつとしたサプライズよ」

八幡

「ハハ、で、ザルバの事聞きたいんじゃないんですか？」

ジーナ

「まあね」

ニア

『ミヤア』

八幡

「お、ニア相変わらずジーナさんの胸の谷間にいたのか」

ニア

『ミヤア♪』

ジーナ

「ちよつと八幡……」

八幡

「ああ、すいませんザルバの事ですネ……」

八幡は、ジーナにザルバの事を話した。

ジーナ

「成る程ねザルバがいた理由が分かったわ確かに今回の牙狼は弱いつて噂は聞いたわ魔導具にまで見捨てられるなんてね情けないわね」

八幡

「まあ、確かに……」

ピイン

カチ

シルヴァ

『八幡。メメよ』

メメ

『……（スツ）』

メメは、八幡に赤い封筒を渡した。

八幡

「ありがとう……。最近仕事俺達に回しすぎじゃね？」

メメ

『……（シユン）』

八幡

「アツ、メメ悪いなお前が落ち込む事ないぞ（アセアセナデナデ）」

メメ

『♪』

八幡

「じゃあなメメ」

メメ

『♪(バイバイ)』

メメは、八幡達の前に消えた。

ジーナ

「フフ、八幡ってメメにも好かれているのね」

カシヤ

ボオ

八幡

「陰我ホラーが憑依ホラーを束ねているので全て討滅するべし……少しキツいな……」

ジーナ

「お手伝いしましょうか？」

八幡

「ま、お願いします」

海老名

「あ、涼邑君」

八幡

「ん？海老名どうした？」

海老名

「う、うんちよつと待っててお母さん涼邑君見つけたよ」

八幡

「？」

海老名

「お母さんが代わってっていつてるんだけど・・・」

海老名は自分のスマホを八幡に渡した。

八幡

「・・・何コレ？」

海老名

「え？スマホだよ携帯電話知らないの？」

八幡

「知らんそもそも魔戒騎士と魔戒法師はそんなの持ってないからな・・・」

海老名

「あ、納得」

八幡

「で、それに出ればいいのか？」

海老名

「う、うんそうだよ」

八幡

「えくと？もしもし？」

海老名

「涼邑君・・・逆さまだよ」

ジーナ

「プツ」

八幡

「あ、そうなの？」

クル

八幡

「もしもし？」

海老名 イズナ

『あ、もしもし涼邑君』

〈ジーナ側〉

コクコク

ジーナ

「ねえ、貴女、ハ……零とはどんな関係なのかしら？」

海老名

「え」と

海老名は八幡と出会った事を話した。

ジーナ

「成る程ねアングレイ討伐の時に助けられたのね」

海老名

「は、はい」

ジーナ

「ところで、貴女お母さんって魔戒法師なの？」

海老名

「あ、はい魔戒導師です」

ジーナ

「へ〜魔戒導師なんてまだいたんだ……それでお母さんは何で電話をしたの？」

海老名

「何でも今回の依頼は涼邑君一人じゃ無理だからもう二三人魔戒騎士が必要だと言ってました」

ジーナ

「……零一人じゃ頼り無いつて事かしら（ムツ）」

八幡

「慢心は早死にの元ですよ」

ジーナ


「電話終わったの？」

八幡

「ええ、終わりました海老名コレどうやって切ればいいんだ？」

プープー

海老名

「あ、のボタンを押せばいいよ」

ピ

八幡

「切れた」

ジーナ

「で、どんな電話だったの？」

ジーナは、魔戒導師に言われた言葉を言われ少し機嫌が悪かった。

八幡

「俺早退します」

ジーナ

「は？何で？」

八幡

「ちよつと番犬所に魔戒騎士増員のお願いしに行きます」

ジーナ

「何だよ」

八幡

「憑依ホラーがかなり多くてしかも陰我ホラーがパワータイプと飛行タイプがいるそうです流石に憑依ホラーはジーナさんと操にやってもらおうけど陰我ホラーも何体かいるか不明だそうです」

ジーナ

「そう、分かったわ……」

八幡

「じゃあ海老名勉強頑張れよ」

海老名

「う、うん……」

八幡は、学校を早退し学校を後にした。

《街／番犬所》

ケル

『魔戒騎士増員してくれだど?』

ベル

『理由は?』

八幡

「憑依ホラーと陰我ホラーの相手は俺一人はキツイのでそれに……最近まともに休んでいないので（フツ）」

ローズ

『分かった魔戒騎士を増員させよう元老院から頼んでみる』

八幡

「ありがとうございます（パアアアアア！）」

三神官

『まあ、我々も悪いのだがな．．．（フツ）』

八幡

「あ、そうだルークにも連絡しよ」

食事

「ダイナーレストラン」

カランカラン

女店員

「いらっしやいませ〜」

八幡

「キョロキョロ!?! ルーク」

ルーク

「八幡?」

八幡

「相変わらずラザニア好きだな」

女店員

「ご注文は?」

八幡

「ラザニア♪」

ルーク

「珍しいな八幡が此処に来るなんてな」

八幡

「実はな」

八幡は海老名 イズナに言われた事をルークに話した。

ルーク

「その魔戒導師撃ち殺そうか？（ビキ」

八幡

「やめろ（ルークなら殺りかねん）」

カランカラン

材木座

「はち」

ドウン

ルーク

「何だ零コレは撃ち殺す」

八幡

「撃ち殺してもいいがやめろつての（ハア」

材木座

「は、八」

ダウン！

ルーク

「何でコレにも教えてる」

八幡

「ボルシテイの一件に関わったんだよ（ハア）」

ルーク

「コレもか」

八幡

「店員さんすいませんでした迷惑料と壁の修理費です（ペコリ）」

八幡は女店員に札束を渡した。

女店員

「ありがとうございまくす♪あ、それと涼邑 零様西のダイナーの店長が貴方につて」

ドオン!!

八幡

？

「ナニコレ」

八幡達の席にデカいステーキを置かれた。

女店員

「今日は大仕事と聞いてスタミナを付けてくださいね♪」

八幡

「あ、ありがとうございます（タラ）」

店員

「お二人もどうぞ♪」

コトン

材木座、ルーク

「」

材木座、ルークの二人には薄い肉一枚だけしか置かれなかった。

材木座

「あ、あの」

女店員

「なにか（ビツ）」

女店員は親指を壁に指した。

材木座

「あ。」

壁には穴が開いていた

女店員

「な・に・か? (ビキ)」

材木座

「イエ。」

ルーク

「↑穴を開けた人

八幡

「脂物は少し控えてたんだが偶にはいいかな

ピイン

カチ

シルヴァ

『零シツカリご飯を食べなさいね』

八幡

「ん、そういえば材木座 (モグモグ)」

材木座

(モグモグ) キコキコ

「な、何だ？（シヨボシヨボ）」

八幡

「暗黒騎士ゼクスと殺り合ってどうだった？」

材木座

「!？」

八幡

「奴の『左腕合ったか？』」

材木座

「合ったがそれがどうしたんだ？」

シルヴァ

『ありえないわね』

八幡

「確かにな」

材木座

「どういう事だ？」

八幡

「暗黒騎士ゼクスの左腕は俺が斬り落とした筈何だかな」

■ ■ ■ ■ ■

材木座

「何？どういう事だ？」

八幡

「そういえばお前は知らなかったんだっけ」

八幡は暗黒騎士ゼクスの事を話した。

材木座

「そ、そんなヤバい奴だったのか」

八幡

「そうだ。よくもまあ、お前生きてたな」

シルヴァ

『遊ばれたのね』

八幡

「納得」

材木座

「ヒドっ」

八幡

「まあ、材木座の事はもうどうでもいい今回の依頼俺なりに嫌な予感がするからジーナ

さんと操に声を掛けた後、番犬所に助っ人を頼んだからな」

材木座

「アレ!?!戸塚殿と川崎殿は!!」

八幡

「別の依頼に行ってるルーク一緒に」

ルーク

「行くぞ勿論(グ)」

八幡

「ありがとう」

材木座

「決断速い」

八幡

「そういえばお互いまだ自己」

ルーク

「いらん(ファイ)」

材木座

「いや、これから一緒に」

ルーク

「零俺は先に行く場所は何処だ？」

八幡

「ああ、あのバカデカイビルだ」

ルーク

「分かった」

八幡

「じゃあまた後でなルーク」

ルーク

「ん」

カランカラン

女店員

「ありがとうございました〜♪」

ルークは八幡に場所を聞いた後店を出た。

シルヴァ

『零、今回の依頼本当に嫌な予感するの？』

八幡

「ああ、あの『ホラー落ちした魔戒騎士』と同じヤバイ予感だ」
シルヴァ

『それってまさか』

八幡

「思い過ごしならいいんだがな」

カランカラン

女店員

「ありがとうございますました〜♪」

八幡はお金を払って店を出た。

材木座

「↑置いてきぼり

」

リュメ

「巨大ビル前」

操

「もう零兄酷いよ置いていくなんて!! (プンプン!)」

八幡

「わ、悪かったよ」

操

「零兄が置いていかれたせいであの誘拐魔と一緒にだったんだよ」

ジーナ

「誰が誘拐魔よ (ム」

操

「アンタよ!! (ビッ」

ジーナ

「貴女ねーちゃんと年上に敬意を払いなさいよねえ」

操

「零兄を拐った人に敬意払うわけないじゃない（ウウ）」
操は八幡の後ろに隠れた。

八幡

「（俺を身代わりにするなよ）」

ミア

『にゃ〜』

ルーク

「八幡」

八幡

「あ、ルーク来たか」

操

「あ、ルークさ」

ルーク

「フィン（ファイ）」

操

「うう、ルークさん零兄には挨拶して私には無いのか〜」

ザルバ

『まだ操を認めてないんだろ？』

操

「うう、確かにそうだけど」

材木座

「零、来たぞ」

操

「あ、材木座さん体大丈夫なんですか？」

材木座

「ウム、何とかな」

操

「良かった」

八幡

「コイツ心配しても無駄だぞ」

操

「え？」

八幡

「コイツ昔は女遊びをしてたんだよ」

操

「ええ!?!こんなナリで!?!」

材木座

「ちよ!?!操殿酷くない!」

八幡

「コイツの女遊びには当時ボルシテイに派遣されていた俺と戸塚、他の魔戒法師を困らせていたんだよ（ハア〜）」

ザルバ

『こんなナリなのにか?』

八幡

「こんなナリでだ（ハア）」

ピイン

カチ

シルヴァ

『まあ、こんなナリでも今は一人の女の子に夢中のお陰で鍛え直しはじめたのよね』

操

「え?こんなナリで?」

材木座

「さつきからナリナリうるさいぞ（ピキッ）」

八幡

「まあ、材木座イジリはこのくらいにしてもうすぐ」

???

「ザルバ！」

八幡

「ん？」

ザルバ

『ゲッ！』

???

「ザルバ探したぞ。さあ、ザルバを返してもらおうぞ」

操

「誰？」

葉山隼人

「君はあの時の
ザルバが無くなって
いたから困っていたから
君が拾って」

海老名

「あ、涼邑君？」

八幡 ！？

「ん？海老名と」

海老名

「あ、この娘涼邑君の知り合いでしょ？」

八幡

「!?」

女

「久しぶりだな涼邑 零、涼邑 操」

ババツ

八幡と操は膝を付いた。

操

「お、お久しぶりです」

八幡

「〃大魔戒法師リユメ様〃」

リユメ

「ウム！久しぶいな二人共ライセンスティでは世話になったな」

八幡

「はい。」

操

「あの、リュメ様が何故東の管轄に
リュメ
.....?」

「それを話す前にその前に」

ソロソリ

材木座

「あ」

リュメ

「フツ」

ヒュン

材木座

「グエエエエエ!? (ドゴオ)」

リュメは筆を出して材木座を地面に叩き落とした。

八幡、操

「.....」

.....

ザルバ

『おい、操何で材木座を地面に叩き落されたんだ？』

操

「あく材木座さんがリュメ様の悪口を言っちゃったんだよね〜」

ザルバ

『悪口・年齢、あるいはバ』

リュメ

「フン!!」

ギョーン!

ザルバ

『グエ!!』

操

「ギャ!?!」

八幡

「リュメ様!?!操の右手が右手がー!?!」

リュメ

「あ、すまない操」

操

「だ、大丈夫です。ザルバアンタね言葉に気よ付けてよね」

ザルバ

『す、すまねえ』

リユメ

「ん？何故操が魔導輪ザルバを持っているんだ？」

操

「あ、それは……」

操はリユメにザルバの事を話した。

リユメ

「そうかそれで操がザルバを持っていたのか」

操

「そ、そうです」

ジツ

リユメは葉山 隼人を見た。

葉山 隼人

「な、何か？（こ、このお方が大魔戒法師リユメ様もしかして俺を……）」

大魔戒法師リユメ

「何故こんな奴が黄金騎士になれたんだザルバよ」

ザルバ

『さあな・・・』

大魔戒法師リユメ

「涼邑 零が牙狼になるのなら話は別なんだが（キラン
 どうだ零牙狼にならんか」

八幡

「え!?! そ、そんな俺が牙狼なん (ゾク」

全員（海老名、葉山以外）

『!?!』

八幡達のいる場所に結界が貼られた。

操

「ザルバ」

ザルバ

『結界だな』

ジーナ

「何、この邪気？」

ルーク

「何だ一体？」

八幡

「こ、この邪気は（ブルブル」

材木座

「どうした零？」

ピイン

カチ

シルヴァ

『まさかこの邪気は』

コツコツコツ

銀髪の男

「フツ」

八幡

「き、貴様は」

シルヴァ

『あ、アイツは』

リユメ

「どうしたお前達!？」

ザルバ

『あのホラーの男知っているのか？』

シルヴァ

『ええ、あの銀髪の男は』

八幡

「『裏切り者の魔戒騎士』」

シルヴァ

『あのホラーの名は』

八幡

「『鬼のホラージンガ』」

ジンガ

「久しぶりだなあ『銀の小僧』」

□ □ □